お兄ちゃんが好き！？

coach

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お兄ちゃんが好き！？

【Ｎコード】
Ｎ９４７１Ｈ

【作者名】
ｃｏａｃｈ

【あらすじ】
中学二年生の胡桃は、初恋が成就して意気揚々としていた。そんな幸せ絶頂の彼女に襲い来る一つの悲劇。果たして胡桃は、その悲劇を乗り越えることができるのか。※タイトルからある種の期待――「実兄を振り回す天真爛漫なヒロインが織り成すコメディ」とか「義兄に想いを寄せる純情なヒロインが紡ぎ出すラブストーリー」などに違いないぞ、楽しそう！　的な期待――をなさった方へ。そういう少年・少女コミック的な展開は一切無いということをあらかじめお断りしておきます。

その1

このしみったれた世界を今こそ変えてやるっ！

革命を志す理想主義者のごとき気勢を上げ、福田胡桃（クルミ）は敢然と世界に立ち向かった。

彼女の世界。すなわち、朝起きて、学校に行って、授業中寝て、友人とおしゃべりして、部活行って、帰って、ドラマ見て、宿題をやらずに寝る。平々凡々な世界。まことにしょうもないと言わねばならない。胡桃はうんざりしていた。彼女は現在中学二年生である。去年の一年間、そういうツマラン生活をして、胡桃は飽き飽きしたのである。

「こんなのは本当のわたしじゃない！」

いったん変えようと決意した彼女の行動は早かった。胡桃はイマドキの女の子である。救いの手が伸びるのをグズグズ待ったりしないのだ。カボチャを馬車にしたり、薄汚れたチェニックを豪華なイブニングドレスにしてくれる老婆を待つには、現実的だったとも言える。

そうして今、五月の中旬、茜射す中学校の校門前、胡桃は世界を変える呪文を唱えた。

「す、好きです。つ、つ、つ、付き合ってくだしゃい」

まともにどもって、あまつさえ噛んでしまった彼女のその心臓は、フルマラソンを走破したマラソンランナーのそれのごとくばくばくと鳴っていた。普段は全く自己主張をしないくせに、こんな大事なときにドキドキドキドキ、何をはしゃいでいるのか、うるさくてたまらない。心臓よ止まれ、と聞こえようによっては怖いことを一心に願っている胡桃の前に、一人の少年が立っていた。

胡桃の呪文を浴びた彼は、彼女のクラスメートである。贅肉を削ぎ落したような無駄のない体つきをしているが、けして不健康なものではなく、それはまるでクリスタルカットされたダイヤモンドを

思わせた。
黙考する彼の前で、胸の動悸がおさまらない胡桃。
いわゆる「告白」というものを生まれて初めて彼女はしたわけであるが、こんなに緊張するものだとは聞いていなかった。話が違う！　責任者、出てこい！　胡桃が心の中で怒りをぶちまけたのは、友人に対してである。
というのも、彼女らは揃ってこんなことを言っていたのだ。
「大丈夫、大丈夫、緊張なんてしないって。ただ、呼びとめて、こう言ってやればいいのよ。『もしわたしと付き合いたかったら付き合ってあげてもいいよ』って。大喜びでオーケーしてくれるって。男子の方だってカノジョ欲しいと思ってんだからさ」
ケタケタと豪胆に笑う友人たちに励まされた胡桃だったが、今思えば相談する相手を間違えたような気がする。彼女らがゲットしたカレシとは、髪を染めたりピアスをあけたりすることにしか興味が無いチャラ男である。今目前にいる少年、中沢小太郎（コタロウ）は、そういう軟派ヤロウとは一線を画す存在なのだ。参考になどなろうハズがない。
サッカー部の彼は二年生でありながらレギュラーとしてチームの一角を担うほど抜群の運動神経を誇り、しかし、それを鼻にかけることはない。誰にでも分け隔てなく優しく、しかもその優しさたるや、男子クラスメートをして「オレが女だったら惚れるね」と言わしめたほどである。教室の戸を開けてもらったくらいでそこまで言う彼の人生に幸あれ、と言いたくならないわけではないが、とにかく、小太郎は上等な男の子と言って良い。顔立ちも端正であるので、当然女子にも人気が高い。風の噂によると一年のときに何度も告白されているそうである。しかしそのことごとくを断ってきた、ということも聞いていた。
告白を受けなかった理由は杳（よう）として知れない。理想が高いのだろうか。
そんな難攻不落の城に挑むのに、正面突破はいささか無謀であっ

たかも知れないが、なんといっても胡桃にとっては初恋である。深遠な恋の駆け引きなど望むべくもない。傍らにいた彼女の参謀役たちも大口開けて笑うことしかしない能無しばかり。当たって砕けるしか手はなかったのである。

どのくらい時間が経ったのだろうか。五月の夕べはまだ明るい。部活動が終わって男友達と帰ろうとしていた小太郎を校門前で捕まえたのである。雰囲気を察したその友達からは冷やかしの声がかけられて小太郎に迷惑をかけたわけだが、これはやむを得ない。ダイレクトに当たるのではなく友人を使って小太郎を呼び出してもらうということも一応考えてみたのだが、

「これはわたしの戦いだ！」

という、恋心を伝えに行くのにまるでタイマンを張りに行くがごとき潔さを発揮して、ひとりで事に向かったのである。

橙色（だいだい）の夕日に染め上げられるなか、胡桃は小太郎の喉元を見ていた。告白した後はまともに目を合わせられず、視線を下げていたのである。喉の少し上にある顎先がこくんとうなずくのが見えて、ついで、「いいよ」という一言が胡桃の耳を快く打った。

それは世界を変える一言だった。夕暮れの景色が俄かに燦然とした黄金色に輝いたような気がした。胡桃にとって、新しい朝が来たのである。半ば信じられない気持ちで確かめるように彼の目を見ると、小太郎もじっと胡桃を見ていた。長い睫毛が縁取る綺麗な瞳に、ちょっと照れた色が混ざった。

「ふつつか者ですが、よろしく」

照れくささを紛らわすような小太郎の口ぶりに胸が鳴った胡桃は、どもりながら、こちらこそ、と返して丁寧に頭まで下げていた。

その2

胡桃(クルミ)は夢見心地のまま帰宅した。告白を受けてくれた小太郎(コタロウ)はそのまま別れ道まで胡桃をエスコートしてくれた。記念すべき「初お帰り」だったわけだが、何を話したのかは覚えていなかった。変なことを口走ってなければ良いが、嬉しすぎて頭がくらくらしていたので、もしかしたらポロポロと何かつまらないことを言ってしまったかもしれない。恋する乙女のいっぱいいっぱいの愛らしさとして評価してもらうほか無いところである。

「何かあったの、お姉ちゃん？」

自分の部屋に入って、学校指定の肩かけカバンを下ろした胡桃は、ニヤケ面を見とがめられた。妹である。胡桃のマイホームは団地の一室であって、そこに住む家族は胡桃の他に母、父、兄、弟、妹の六人構成。当然、個室など望むべくもなく、妹とプライベート空間を共有しているのだった。

椅子に座って、うさんくさいものでも見るような目つきをする小学四年生の妹に、胡桃は姉の快挙を語ってやった。実のところ胡桃は話したくて仕方なかったのである。それで余計ににやついていたのだ。なにせ幸せはおすそわけすると倍になるという。今でも十分幸せなのに倍になったら死ぬかもしれない！

話を聞き終わった妹の態度は、胡桃を死の恐怖から解放してくれたようである。彼女はその怜悧な瞳をぱちぱちとさせて、

「ふーん、良かったね」

と言っただけで、勉強机に戻ると、学習プリントらしきものにペンを走らせ始めた。まことに張り合いのないことである。姉に初カレができたというのに何だろうこのつれない態度は。わけてあげようと思った幸せを突き返された形になった胡桃はムッとしたが、そこでピンときたものがある。

胡桃は妹の背後から、

「大丈夫。咲子(サキコ)もそのうちカレシできるよ」
女の子としてはるか先を行ってしまった姉をうらやむ妹をなぐさめてやった。
妹はプリントに向かったままで、
「お姉ちゃん」
「なあに？」
「今勉強してるから」
落ち着いた声音のままたしなめてきた。
部屋を追い出された胡桃は、消化不良気味の気持ちを解消すべく、兄と弟の共同スペースへと向かった。向かったと言っても、廊下を挟んで目の前である。引き戸を開けると、小六の弟の姿が見えた。兄はまだ帰っていないらしい。弟はなにやら難しげな顔をしながら、床一面に広げられたトレーディングカードを見ていた。彼の趣味である。確かモンスター・なんちゃーらとかいう名前で、どっぷりとはまっているらしく、小遣いを全てつぎ込み、そればかりか町が主催するトーナメントにも参加しているほどの入れ込み様であった。
「へえ、良かったじゃん。姉ちゃん」
両手に持ったカードをためつすがめつしながら口先だけで答えるという、適当極まりない答え方をする弟に対して、胡桃は一言、
「このカードおたくめ！」
罵声を浴びせ、部屋を後にした。「サモナーと呼べ！」という怒号を壁越しに聞きながら、胡桃は続いて、買い物から帰って来た母、仕事から帰って来た父、部活から帰って来た兄に、今日のセンセーショナルな出来事を話した。彼らは年少の弟妹よりは反応してくれたものの、一様に穏やかなリアクションだった。唯一、兄だけが多少興味ありげな顔をしてくれたが、とはいえ、胡桃の期待していたようなものではなかった。
「おめでとうございます、クルミさんっ！」
うるさいほど鳴り響くファンファーレ、まぶしいほどたかれるフラッシュ、四方八方から突きつけられるマイクの前で胡桃はクール

に言うのである。
「そんな大したことじゃないわ。落ち着いて、みんな」
言われるまでもなく沈着な家族に、
「もう少し騒いでよ！」
と言い出すことはさすがにできず、胡桃は、自分の気持ちを過不足なく読みとってほしいという思春期特有の願望を胸に抱きつつ、記念すべき日をやり過ごしたのだった。

その3

家族の代わりはクラスがしてくれた。

胡桃（クルミ）と小太郎（コタロウ）が付き合い始めたという噂は、翌朝にして、すでにクラス中の知るところとなった。いかなる情報網のしからしむるところによるのかさっぱり判然としないのだが、このような「カップル誕生」の報というのは、燎原の火の如く恐ろしいほどの速度で広がるのである。

胡桃がもやもや推測するところによると、これは「裏生徒会」とでも呼ぶべき秘密諜報機関の仕業であった。表向き生徒の学校生活を牛耳るのは生徒会であるが、彼らには実際のところ大した権限など無い。コミックでよく見かけるのとは違い、ナンデモカンデモやりたい放題という訳にはいかないのが現実である。生徒の日常生活の為にしてくれることと言えば、せいぜいが、

「いついつにこれこれの行事がありますよ、がんばろうね」

的に学校行事への参加を促したり、校門前の清掃活動をしたりと、もちろんそれらはそれらで大切なことであるが、あんまり目立った話でもないし、一般の生徒からしてみれば、活動しているのかしてないのかよく分からんというのが実情である。

その代わりに存在するのが「裏生徒会」である。彼らは、生徒の学校生活、主に恋愛問題を解決するために、様々な情報を提供してくれる。誰が誰のことを好きらしいとか、付き合ったとか、別れそうとか、別れたとか。各クラスに配置された「耳」が情報を集め、「口」が情報を流す。その情報は適確無比であり、大いに生徒の学校生活を豊かなものにしてくれているのだった！

「中沢、お前、福田と付き合ってんの？」

胡桃の妄想は、自分の名が不意に愛するカレシ――実にイイ響き！――の名と共に聞こえてきたときに、破れた。

昼休みの喧騒がピタリとやむ。教室中の好奇の目が、胡桃から少

し離れた席に座る男の子に集まっていた。なんだかもう見ているだけで幸せになれそうな男の子である。その傍に立つのが、今しがたツマラン質問をした男子だった。昨日校門前で小太郎を呼びとめた時に、彼と一緒にいたサッカー部の男子である。

――あ、もしかしたら……。

胡桃の、少女コミックを読みすぎてすっかり（漫画的）恋愛モードになってしまった脳に、電光のように閃く考えがある。それは、今、小太郎に詰め寄っている彼は胡桃のことが密かに好きなのではないか、というものだった。

胡桃は己の罪深さに打ち震えた。きっと彼は入学式の時に胡桃に一目惚れをして、以来一年想いを温めてきたのだ。何度も告白しようと思ったことだろう。その度に、もうちょっとタイミングを見た方が良いと、考えを改め、しかし後悔し、次こそはと拳に決意を握ってきたに違いない。そうして、今年、運命の女神の祝福によって胡桃と同じクラスになれ、これからいよいよちょっとずつ仲良くなって秋頃には告白までこぎつけようと思っていた矢先に、胡桃・小太郎カップル成立の悲報が届いたのだ。彼の無念はいかばかりか。

胡桃は心中で彼に詫びたが、それとこれとは別問題である。純粋な男心が為したことであったとしても、事態は思わしくない。胡桃は固唾を飲んで成り行きを見守った。というのも、カップルが別れる原因として、

「クラス中からからかわれるのが嫌！」

ということが挙げられるからである。現に一年生のときに、それが理由で自然消滅したカップルが同じクラスにあったのだ。

胡桃は、付き合い始めた直後にして、既に別れへのルートの見える分岐点に自分がいることを意識した。

「付き合ってるけど、それがどうかしたのか？」

小太郎は端然とした声を出した。新カップルにとって初の危機は、その一言で軽やかにクリアされた。どっと沸き起こる歓声の中、小太郎はサラサラとした黒髪を揺らして胡桃のほうを向くと、軽く手

を振ってきた。ぼおっとして手を振り返す胡桃。更に高まる祝福の声。

「だからクルミちゃんには近づくなよな、ボクのカノジョだから」

小太郎が恋のライバル（仮）に釘を刺した。胡桃は、あまりの嬉しさに、今なら空も飛べるだろうと思われたほどだった。下の名前で呼ばれたこともさることながら、公の前でカノジョと言ってもらえたのである。

――幸せすぎて怖い……。

その甘やかな恐怖感に浸ってうっとりとしている時間は長くは続かなかった。

その4

小太郎（コタロウ）の凛とした鮮やかな立ち居に胡桃（クルミ）がうっとりとしていると、唐突にがしっと両脇をつかまれて、あっという間もあればこそ、恋（こい）話（ばな）の余韻冷めやらぬ教室から引きずり出され、連行された先は女子トイレであった。

「聞かせてもらうわよ、クルミ。なんで、コタロウくんとあんたが付き合うなんて話になってんのか」

取り巻きの二人を両横に控えさえ、仁王立ちでこちらをねめつけるその姿は非常に女の子らしいと言わねばならない。男子の前でもやってみればいいのにと胡桃が皮肉げに思っていると、じりじりと間合いが詰められる。胡桃は壁際に追い込まれた。

他人の幸福を素直に祝うことができる、そういう人間だけでクラスが構成されているとしたら、どんなにか美しい学生生活を送れることだろう。だが、現実はそう甘くはない。他人の幸せをねたみそねみ、あまつさえ、「そんなものはぶっ壊してやるわ」などと考える不届きな輩もいるのである。

「さあ、正直に言いなさい。どんな卑怯な手を使ったのか。包み隠さず、全部ね」

そういう輩の一人が今日の前にいる彼女である。

「コタロウくんがあんたと付き合うなんて信じられない。何か事情があるんでしょ」

堂々と立ち向かったのに、陰湿な策謀を用いたようなことを言われて、ムッとした胡桃だったが、彼女一人だけならまだしもその左右に一人ずつ付き人がおり、状況は三対一。この数的不利を覆すことができるほどの実力がない胡桃としては、正直に答える他なかった。

「え、なんで？　何でクルミの告白、普通に受けちゃうの？　わたしだって一年の時告白したんだけど断られてるんだよ。何でクルミ

なのよっ。おかしいでしょ」
髪を振り乱し恐慌状態に陥る少女を目前にしながら、彼女を選ばなかった小太郎の慧眼（けいがん）に、胡桃は感服した。
女子が一人入ってきて、「な、なに？　イジメ？　イジメなの？」的な好奇と同情が混ぜられた目で一瞥して、個室へと消えた。まさか、ロマンティックな話をしているとは夢にも思うまい。せめて校舎の屋上にでも呼び出してくれれば格好もつくのに、とロケーションの変更を求めたいクルミだったが、そもそも屋上は進入禁止であった。
「でもさ、クルミで良かったかもよ。すぐに別れることになるかもしれないし」
ボスの横で下っ端Ａが失礼なことを言った。少女コミックに登場するガラスのハートを持つヒロインだったら、打ちひしがれている所である。しかし、あいにく胡桃はそんな繊細なものは持ち合わせていなかった。こんなことでいちいち傷ついていたら、とても彼女らと付き合えたものではない。もっとも果たして付き合う必要があるのかどうか、再考の余地はあるが。
胡桃は発育途上の胸をぐっと張った。いくら不利な立場とはいえ、攻められっぱなしは彼女の流儀ではない。
「とにかく、付き合ってもらえるようになったから、応援してよね」
「応援？　誰が！」
バカも休み休み言えと言わんばかりの顔でふんと鼻を鳴らすクラスメート。
胡桃は独り言のようにぼそっと言った。
「サッカー部ってカッコイイ男の子多いよね。コタロウくんって部内でも友だち多そうだなあ」
効果はテキメンだった。
突如として、醜い気面が穏やかな菩薩の顔へと変わった。
「クルミちゃん、わたしたち、親友よね」
がしっと熱く、暑苦しく手を握りしめてくる友人。親友のカレシ

からカッコイイ男の子を紹介されて、親友同様幸せになるというバラ色の未来を夢想したのだろう。瞳に星を煌かせる友人たちに、もちろんよ、と言って鷹揚にうなずいてやると、そこで胡桃はようやく解放された。彼女たちは、早速サッカー部の男子の品定めを始めた。

やれやれと思って、ついでに個室に入り、そうしてトイレを出る時に手を洗いながら鏡を見た胡桃の脳裏を、ふと疑問がよぎった。エセ親友の言葉ではないが、どうして小太郎はＯＫをくれたのだろうか。

水を止めてから、鏡に映った自分の顔をしげしげと胡桃は見た。肩までの天然パーマ気味の黒髪に、まっすぐに引かれた眉、大きめの瞳に大きめの唇。喜怒哀楽をはっきり表せそうなメリハリのある顔立ちである。自分が女の子らしい可憐さとはかけ離れていることを再確認した胡桃は、小太郎がＯＫをくれた理由から、「告白してきた女の子のルックスに魅かれた」という項目をまず削除した。

その5

数々の女の子の告白を断ってきた小太郎（コタロウ）。振られた女の子の中には、先ほどのクラスメートのようにロクでもない子もいたかもしれないが、きっと胡桃（クルミ）が足元にも及ばない美少女もいただろう。頭脳明晰な子もいたろうし、天真爛漫な子や家庭的な子もいたであろう。それらの子の告白は断ったのに、なにゆえ胡桃の告白はあっさりと受け入れてくれたのか。

不可解である。

奇怪でさえある。

さっきまでそんなことは全く考えもしなかった。昨日告白をＯＫしてもらった後も、喜びに我を忘れ、思春期の女の子としてまことに恥ずべきことに、思わず家族に言いふらすことまでしてしまったほどだった。それから今の今まで実に幸福な気分だったのだ。それなのに……。

友だちは選んだ方が良い、と胡桃は猛省した。

とにもかくにも気になって仕方がなくなった胡桃は、ベルギーの名探偵に倣（なら）い、灰色の脳細胞をフル稼働させてみた。しかし、さっぱり分からない。そもそも灰色ということからして分からない。雨後のタケノコのごとくニョキニョキ現れた自称親友どもではない真の親友に相談してみようかとも思ったが、もし彼女にまで首を捻られたらなけなしの自信を喪失してしまうかもしれないと胡桃は恐れた。結局、胡桃は直接本人に訊いてみることにした。

「何でわたしの告白ＯＫしてくれたの？」

とは、何ともぶしつけな質問のように思えたが、是非もない。気になって仕方が無いのである。

――最悪、からかわれてるだけってこともあるかも……。

「緊張した様子で告白なんかしてくるから冗談で付き合ってやっただけだよ、ハハハ」

とか、
「ずっと可愛い子ばっかりに告白されて飽きちゃった所に君程度の子が来たから返って新鮮でさ、ククク」
だの。秀麗な面を歪めて小馬鹿にしたような笑みをもらす少年の姿をした悪魔の像が、胡桃の頭に浮かんだ。何と恐ろしいことだろう。胡桃はふるふると身を震わせると、自分で自分を抱くポーズを作ってみた。華奢な女の子がやると一層可憐に見えるそうである。胡桃がやっていけないことがあろうか。断じてそんなことはない！
と胡桃は断ずる。
そんなことをして遊んでいるところへ、
「クルミちゃん」
爽やかな声がして、声よりなお清々とした容姿の少年が現れた。昨日と同じくらいの時刻、日がもうしばらくしたら一日の役目を終える頃、これも昨日と同じ校門前である。小太郎とは、部活が終わったあと一緒に帰ることを約束しておいたのだ。
「早速、カノジョと帰るのかよ」
近くからかかる冷やかしの声に、胡桃は顔を熱くしたが、小太郎は動じた様子でもない。羨ましいだろ、と笑顔で返して余裕を見せてから胡桃の隣に並んだ。
歩を合わせて十歩ほど歩いたのち、胡桃はわき腹の辺りをつねるようにした。つねることができるお肉がついているのがちょっと切ない。自傷行為は趣味ではなく、正気を保つためである。小太郎と並んで歩いていると、どこからともなく温かい幸福感が胸のうちに溢れてきて、なんかもうどうして付き合ってくれる気になったのか、などということがどーでもいいことのように思えてきたからである。恐るべし、恋の力。
胡桃は脇腹の痛みをピリッと感じながら、小太郎に尋ねた。
にこにこしていた小太郎の顔がくもり、ちょっと困ったような顔になった。胡桃はすぐに後悔した。付き合い初めからうっとうしい子だと思われたかもしれない。

「ごめん、忘れてください」
付き合ってくれる理由を訊いたことで、付き合えなくなったら本末転倒もいい所である。胡桃は謝ってこの件を流そうとしたが、
「初めてだったんだ」
ほぼ同時に、小太郎が口を開いていた。
「初めて、クルミちゃんが面と向かって告白してくれた。これまで告白してくれた子はみんな、メールとか友だち伝えとかでさ。それはいけないことじゃないかもしれないけど、告白をメールでするってことはさ、別れるときもメールでするってことでしょ。ある朝起きて、メールをチェックしたら、一言『別れましょ』ってあったとして、それで終わっちゃう関係なんて、最初から結ぶ必要がないと思わない？」
滔々と話す小太郎に、始め胡桃はふむふむと納得した。まことにもっともである。自分で行って良かった。ビバ、あたし！　しかし、そのうちに大変なことに気がついた。
「メールや他人の口を介さず直接告白してくれたから」
と小太郎は言う。ということは、
「じゃあ、その……何ていうか、別にわたしじゃなくても、直接告白してくれる子だったら……」
誰でも良かったということになるではないか！
胡桃は慌てて口を閉じた。
それは流石に失礼すぎることに気がついたのである。

その6

何かに気がついたとき、往々にして、既に手遅れになっているということがある。

小太郎（コタロウ）は胡桃（クルミ）が言いたいことを正確に見抜いたようだった。

「先着順……って言っちゃうと、確かにその通りではあるんだけど」

言葉を吟味するようにしてゆっくりと言う小太郎の声に、ちょっと気落ちした胡桃だったが、だからと言って別に自分に誇れるものがあるわけでもないのだから、気落ちできる資格などそもそも無いのである。

「あんたの目は節穴なの？　あたしにはこんなにいいトコたくさんあるのに。あたしの良さが分からないなんて、なんておバカさんなのかしら」

そう言って傲然と彼を見下ろし、溢れんばかりの色とりどりの魅力で圧倒して、「先着順」などという不名誉極まりない選ばれ方を撤回させることができれば格別であるが、胡桃は自分に大した魅力があるとは思っていないのだった。この年まで浮き世を渡っていれば、嫌でも分かることである。

「今は大したことないけど、いつか綺麗になるんだっ！」

物心ついたときから思い続けて、はや十年。

そろそろ夢見るときを過ぎる頃である。そうであるからこそ、「いつか王子様が現れる」などという幻想を抱くのをやめ、昨日小太郎に告白できたのだとも言える。

「でもね、クルミちゃんのことは可愛いって思ってたよ」

聞き間違いだろうか。それとも妄想？

あまりに意外な言葉にまともに横を向いた胡桃。その目に、照れたように笑う小太郎の顔が映った。

「明るくて、ハキハキしてて、面白くて、何よりまっすぐな子だなって。同じクラスになってからずっとそう思ってた。きっと一緒に

いたら凄く楽しいんだろうなって」
聞き間違いでも妄想でも良い。この時間がもう少しだけ続いて欲しい。
「だから、昨日告白された時は凄く嬉しかった」
惜しみない褒め言葉から来る嬉しさとプレッシャーに舞い上がりつつ押しつぶされた胡桃は、
――そのような大したものではありませぬ。
心中で冷や汗を掻きながら、小太郎が告白を受けてくれた理由は気にしないようにしよう、と決めた。これだけ好印象（誤解含む）を持ってくれているなら、理由が何であれどうでも良い。そもそもよくよく考えてみれば、彼がどういう理由で告白を受けたにせよ、胡桃は申し込んだ方である。文句を言える筋ではない。
にもかかわらず、小太郎ははっきりと答えてくれた。そこに彼の誠実さがある。のみならず、その後のフォローも忘れない。そこには彼の優しさが見える。胡桃は自分の目に間違いがなかったことを確認した。
一つ疑問が解消されてすっきりとした気持ちになった胡桃だったが、難儀なことに、今度はまた別の疑問が現れた。何にでも疑問を持つその旺盛な探究心。胡桃は、昔、「末は博士か大臣か」と酔っぱらった叔父に激賞されたことを懐かしく思い出した。
今度の疑問は小太郎に関することではない。
――あたしはどうして小太郎くんのこと好きになったんだっけ。
自分自身についてのことである。
小太郎が聞きたいかどうかは分からないが、今度はこちらから言ってあげるのが公正な態度だろう。よし、と内心意気込んだ胡桃だったが、しかし、不思議なことにそれがなかなか思い出せない。
小太郎の美点ならいくらでも上がる。今さっき見せてくれた誠実さや優しさ、繊細な外見、凛々しい態度などなど。そういう所を好きになったと言えなくもないが、それよりももっと強力な動機があった気がする。それが思い出せない。

「気を悪くした、クルミちゃん？」
胡桃の沈黙を誤解した小太郎が気遣わしげにこちらを見ていた。
胡桃はぶんぶんと首を横に振って、
「変なこと訊いてごめんね。答えてくれてありがとう」
ぶしつけな質問に答えてくれたことに対して感謝を示した。
「良かった。付き合って一日目でもう嫌われたらどうしようかって心配したよ」
柔らかい笑みを湛える小太郎につられて笑った胡桃は、話題を変えた。小太郎が属するサッカー部の今年のレベルなどを訊いてみたりして歓談モードに持っていった。その間も、心の中ではずっと小太郎を好きになった理由について考えていたのだが、しかし、別れ道で別れるときになってもついにそれを思い出すことはなかった。

その7

恋する相手と別れたのち、家に帰ったあとも延々と考えていた。考えたのだが、どうにも思い出せない。

――なんだったけなあ。何かあったんだけど……。

何かを思い出そうと努めるのは、学校の宿題をしたりするのとは別種の煩わしさがある。宿題は分からなければ答えを見れば良いし、場合によっては放り出しても良い。記憶を探る場合には、答えが無い上に、諦めようと思っても気になってそうもいかない。

うんうんうんうん、唸っていると、近くからふうという吐息が聞こえてきた。

「どうしたの、お姉ちゃん？　昨日できたカレシにもう嫌われでもしたの？」

回転椅子をクルリと回して机を背にし、妹が言う。そのどこか慰めるような色を持つ声を聞いた胡桃（クルミ）は、改めて家の中での自分の立ち位置というものを知った。上に兄、下に弟と妹。サンドイッチは真ん中の具が最も美味しい所であるのに、兄妹関係の場合は違うようである。この位置は、最も割りを食うポジションである。なにせ親の興味を引かないのだ。親は、胡桃が小さな頃は先に生まれた兄の頭を撫で、いったん胡桃が長ずれば幼い弟妹の頬をさすることに情熱を傾けた。そうして愛を受けず粗略に扱われてはや十余年。グレなかった自分を褒めてやりたい気分である。親が愛情を注がなかった所為だろう、兄や弟妹たちから軽視されている自分を胡桃は感じていた。

「単にあんたに威厳が無いだけじゃない？」

そういう異見も友人から上がったが、断固却下した。

「そんなんじゃないわよ、ちょっと考えごと」と胡桃。

「ならいいけど」

妹は椅子を回すと再び机に向かった。

胡桃は絨毯から立ち上がると、部屋を出た。勉強の邪魔をするな、と言う妹の心の声がありありと聞こえてきたのである。部屋の引き戸を閉める時に、妹の後姿を見て、今度は胡桃がため息をつきたくなった。妹の髪はキレイなストレートである。対して自分は天然パーマのくるくる気味。

――わたしを産む時、お母さん手を抜いたんだわ。よくよく可哀想な、わたし……。

薄幸の我が身をいっそう哀れみつつ、キッチン兼ダイニングスペースへ行くと、当の母の背が見えた。

今さら恨み言を言っても始まらない。胡桃は悟りを開いた高僧のような達観した気持ちで、夕食の準備をしている母を許し、ダイニングテーブルについた。包丁とまな板の奏でるハーモニーが耳に心地よく響く中、胡桃は近くの棚に置き去りにされた少女コミックを手に取った。ありとあらゆる悲劇がルックスも能力も平均値しかないヒロインに猛然と襲い掛かる物語に、胡桃はもう何百回感じたか分からない感動に浸った。

――こんなことになったら、わたしだったら絶対に乗り越えられないわ。

胡桃にはその自信がある。

ページをめくると、華やかな美少年がヒロインに手を差し伸べるシーンだった。

――でも、これは羨ましい。

美少年が助けてくれるなら、いつでも不幸のどん底に落ちる覚悟もある胡桃だった。

隣の椅子が引かれて、誰かが席についたようである。

反射的にちらりとそちらを見た胡桃の目が、一瞥(いちべつ)後、再び少女コミックに戻った。何かしら違和感を感じて、もう一度隣を見ると、席に座っているのは兄である。一つ年上の兄は、同じ中学に通っている。あんまり仲はよろしくないが、この年でべたべたしている兄妹がいたらそっちの方が気持ち悪い。兄は特段変わった様子でもな

いが、胡桃は何か引っかかるものを感じて、なおじろじろ見ていた。
少女コミックが手から力なく落ちたのは一瞬後のこと。
テーブルの角に当たり床に転がったコミック。それを拾い上げて、ほら、と差し出してくれた兄を、胡桃は絶望的な気分で見つめた。
どうして小太郎に魅かれたのかはっきりと思い出した。
奇妙な目でこちらを見てくる兄を見返しながら、胡桃は自分がどんな星の下に生まれているのか天に問いたくなった。
兄に似ていたから。
それが、胡桃が小太郎のことを好きになった理由だった。

その8

その日はとても食欲が湧かず、早々に夕餉の食卓を立つことにした。いつもはお代りさえする勢いの胡桃(クルミ)が思いもかけず小食なものだから、母には心配そうな顔をされ、妹からは、カレシができたから早速ダイエットでも始めるのか、とからかわれる始末。それに応える力もなく、胡桃は布団に潜り込んだ。

認めたくないことではあるが、全てを思い出した。

小太郎と初めて出会った、二年生の始業式の日。梅花散る春の陽気に、気分もハツラツ、おニューの上靴をぺたぺた鳴らしながら胡桃が新しいクラスに向かうと、同じ方向に向かう一人の少年の姿がある。後ろ姿と歩き方がまさしく我が兄である。始業式の日から二年生の階をうろうろしているとはしようがない人だ、とそう思った胡桃が、「お兄ちゃん」と声をかけた所、振り返ったのは兄とは似ても似つかぬ清らかな少年だった。胡桃はびっくりした。小学生の頃、担任教師のことを誤って、「お母さん」と呼んでしまった時よりも恥ずかしくなった。

人違いで引きとめたことを詫びる胡桃に、小太郎は気にした様子でもない。二人は自己紹介したところ、クラスメートだということが判明した。以来、何となく小太郎が気になるようになって、その言動を耳目で追ううちに、彼の良い所が掃き溜めに舞い降りた白鶴のごとく判然とし、好意を抱き告白に至ったのだった。

初恋成就の上は出会いのきっかけなどどうでもいい。兄だと間違えて声をかけてしまったお茶目な行為はいずれ笑い話となるだろう。しかし、事はそれだけでは終わらないのである。後ろ姿はともかくとしても、前に回れば全く似ていない小太郎が、それでも何かの折に不意に兄のように思えるときがあって、そのとき感じる安心感のようなものが彼のことを好きになった決定的な要因だとしたら――

人、それをブラコンと言うべし。

胡桃は寝苦しい夜を過ごすこととなった。
翌朝、いつもよりも随分早く登校した。
――この悩みを分かち合えるのは親友しかいないわ。
胡桃は心配事や厄介事を内に溜めておくような性質ではない。すぐに他人に話す。内に溜めておいてしくしく悩んでも可憐な子ならいいだろう。周りが気にかけてくれる。しかし可憐ならざる子である胡桃がぐずぐず悩んでいても、ますますブスくなるだけである。人が近づいてこなくなる。だったら、こっちから近づいて悩みに巻き込んでやればよい。
まことに自分勝手な理屈に巻き込まれた友人は、理由も告げられないまま朝早く学校の中庭にメールで呼び出され、怪訝さと不機嫌さがないまぜになった表情をしていた。清々しい朝の空気の中、胡桃が昨日自身の身に起こった悲劇を切々と告げたところ――
おお、他人の不幸を笑う者に災いあれっ！
思わず呪詛の言葉を投げつけてやりたくなった。
友人は、胡桃が話し終わった途端、青空に哄笑を響かせ始めた。きゃらきゃらと止めどなく笑うまことに友達甲斐のある彼女は無二の親友と言って差支えない。実に小学校からの付き合いであって、艱難辛苦を手に手を取って乗り越えてきた仲である。とはいえ、深刻極まりない悩みを大口開けて朗らかに笑い飛ばされた日には、百年の友情も一気に色を失うというものだ。
「ちょっと、実夏（ミカ）！　いつまで笑ってくれちゃってるのよっ！」
胡桃は険のある目を向けた。
「ご、ごめん……で、でもさぁ」
「笑い事じゃないでしょ。友だちがブラコンの烙印を押されたのに、どうして笑ってられるの？」
いたって真面目に胡桃が言うと、友人は再び吹き出した。胡桃の眉根が寄る。彼女が欲しいのは笑いではない。涙である。胡桃の境遇を思ってさめざめと泣いてくれる友である。人選を間違えたか？
「昨日はほとんど眠れなかったんだからね」

まさか普段は何とも思っていない兄が、実は胡桃の無意識深くに潜み、カレシの決定という乙女の一大事にしゃしゃり出てくるとは。考えるだに身震いがする。その震えが一晩おさまらなかったのである。

ひとしきり笑い続けた少女は、

「別にいいと思うけどなあ、ブラコンでもさ。わたしもお兄ちゃんのこと好きだったし」

気楽な声を出した。

一瞬、胡桃は、親友も同病にかかっているのかと思って、憐れみながらも喜んだが、ことが過去形で語られているのを聞き逃さなかった。

その9

友人の話によると、小学校の低学年、彼女がいとうつくしき少女だったとき、よくお兄さんのあとを引っ付いて回って嫌がられていたそうである。

「どこに行くにもお兄ちゃんの後についてってね。なつかしいな。『将来、お兄ちゃんと結婚するんだっ』なんて言って。ああ、なんてカワユイわたし」

遠い目をして過去に浸る友人の腕をぐいと引いて、胡桃は現在に引きずり出してやった。問題は、過ぎ去りし日々ではない。今なのだ。ただ今この瞬間に我々は生きているのである。百歩譲るとしても、過去を懐かしむのはお肌が曲がる年になってからで良い。

「今ねえ……うーん、今はどうかな。別に嫌いじゃないけど、好きとまでは」

もちろん結婚はしたくない、と真面目な顔で厳かに宣言する友人。

胡桃は彼女の片頬をつねった。片方ではバランスが悪いのでもう片方もつねってみる。

「はにふんのよ〜」

「このままあんたのほっぺたを膨らみきった餅みたいにしてやりたい」

友人の瞳に恐怖の色が浮かんだ。

「真剣に答えてくれるよね、ミカ？」

頬をどちらもつねられたまま、友人は小さくうなずいた。

胡桃は手を放した。

「でもさあ、何が問題なのよ、クルミ？　春樹（ハルキ）先輩に似てたからコタロウくんのこと好きになったって、別に悪いことじゃないと思うけど」

頬をさすりさすりそんなことを言う友人。春樹とは兄の名である。

「ハルキ先輩、美形だし。あんたと違ってね」

後半部は先ほどつねられたお返しだろう。胡桃はあえて聞こえない振りをした。しかし、前半部は聞き捨てにできない。胡桃は友人に眼鏡をかけることを勧めた。目も良くなるし、魅惑の眼鏡っ子になって思うまま男子を翻弄することだってできる。

「ハルキ先輩、二年生の間でも人気あるよ。この前もクラスの子から、先輩にカノジョいるのか聞かれたし。『カノジョもいるけど可愛くない小姑もいるよ』って答えといた」

再び胡桃の腕が動いたが、目標を捉えることはなかった。身を翻して攻撃をかわす実夏。そうそうやすやすとつねらせる気はないらしい。

「さすが我が親友。腕を上げたわね、ミカ」

「フ、二度も同じ攻撃を食らうわたしではないわ」

アホらしいやり取りに当初の悩みを忘れてしまいそうになる所にこそ真のアホらしさがある。

胡桃はぶんぶんと頭を振って正気を取り戻そうとした。

兄の人気があろうがなかろうが、そんなことはどうでも構わない。問題は、意識下で兄を慕う気持ちがカレシ選びの決定打となった、というそのことである。それの何が問題なのか、と友は言う。彼女には事の重大さがよく分かっていないようなので、胡桃は分かりやすくレクチャーしてやることにした。

「ミカ、あんたの前に今一人の男の子がいるとするでしょ」

「カッコイイ子？」

黙れ、という意を込めて瞳からビームを発する胡桃。

「ご、ごめん。続けて、クルミ」

「その子が告白する、『ずっとミカちゃんのことが好きだったんだ』って。あんたはＯＫする。でも、不思議に思う、『どうして、わたしに告白してくれたんだろう。わたしなんて何の取り柄もないのに』って」

ムッとした顔を作る実夏を、胡桃は無視した。

「そうして気になって仕方がないあんたはついに訊いてみることに

する。その時の彼の答えはこうよ、『ミカちゃんって僕のお姉ちゃんに似てるんだよね』って」
　ようやく事の深刻さが分かったのだろう、実夏は青ざめた顔をしていた。
「さあ、そんなことになったら、あんただったらどうする？」
「ごめんなさい」
　実夏はぺこりと頭を下げた。告白してくれた架空の少年に対して、お付き合いを継続できないことを謝っているのだ。そりゃそうだ。何も好き好んでシスコン男と付き合わなくても、男子は星の数ほど、少なくともこの学校にだって全学年合わせて三百人はいるのである。他のノーマルな男子を探した方が良い。
　さて、「実夏―仮想シスコン男子」の間に働く力学を、「小太郎―胡桃」間にパラレルに適用すれば、どうなるか。答えは明々白々である。カレシは去り、少女はひとり。
「別れたら、わたしの胸を貸してあげるからね、クルミ」
　実夏は、悲劇的な結末が予想される親友の肩を、ぽんぽんと慰めるように叩いた。

その１０

「福田胡桃（クルミ）はお兄ちゃん好き」
この秘密は墓場まで持っていかなければならない。
とはいえ既に友人に話してしまった。彼女にも一緒に墓場に入ってもらわないといけないが、多分嫌がるであろう。胡桃は仕方なく彼女のことは信用することにした。それよりも心配なのはむしろ自分自身だった。隠し事があまりうまくない胡桃が、自ら小太郎（コタロウ）含め周囲に洩らしてしまう危険性の方がよほど高い。
――注意しないといけないわ。
もしこんなことが知られたら、そして小太郎にひかれて別れる破目になどなったら、もう学校には通えまい。胡桃にはその自信がある。ブラコンを理由に別れられなどしたら、末代までの恥である。小太郎に他に気になる女の子ができたとか、あるいは胡桃自身に魅力がなかったとか、そういうことであればまだマシである。涙ながらに友に失恋を語り、語った自分に酔うこともできる。それがブラコンでは、
「自業自得じゃん」
の一言で済まされてしまう。泣く暇も無い。
美しい別れの為、この秘密は絶対に隠し通さなくてはいけないのだ！
そこで胡桃は気がついた。
――なぜ、別れることが前提に？
胡桃は自分で自分の空想力に驚いた。驚いたというか呆れた。付き合って二日目。本来ならば、
「初デート、どうしよう」
とか、
「一緒に帰るときにこっちから手をつないだら大胆かなあ」
とか、そういう甘ったるいことをにへらにへらと笑いながら妄想

して、友人に気味悪がられる時期のはずである。それが、後ろ暗い秘密を抱え、いかに綺麗に別れるかということに思いを致しているとは。何を間違えればこんなことになるのだろうか。いや、「何を」どころの話ではないのかもしれない。全てが間違っているのだ。

例えブラコンだとしても、意識的に兄が好きだということであれば、まだ救いもある。

「お兄ちゃんと恋人同士になりたいニャ」

的な気持ちを持つ、潔いブラコンならまだ良い。ノーマルな恋は諦めて、兄にアタックすれば良い。もしかしたら気持ちが通じるかもしれない。なにせ兄である。妹を哀れんでくれることも無いとは言い切れないだろう。しかし、胡桃にはそんな明確な気持ちは無いのだった。兄自体は求めずに、同級生の中に兄を求めるという倒錯しきった性癖。無意識のブラコン。素晴らしい！　歌でも歌いたい気分である。

実際に歌えるはずもなく、逆に、思い余って万が一にも自分の秘密を言わないように、胡桃は用心深く口を閉ざしてその日を過ごした。声をかけてきてくれたクラスメートは、彼らには悪いが、かたっぱしから無視した。

「大丈夫、クルミちゃん？」

声音に心配そうな色を混ぜて、小太郎が訊いてきたのが、一日が終わった後のことである。昨日と同じように、一緒に帰っている途上でのことだった。さすがに小太郎まで無視する訳にはいかず、

「え、な、何が？」

愛想笑いで答える胡桃。にわかに鼓動が速くなった。

いつもはペラペラしゃべりまくる少女が唇を真一文字に引き結んで機嫌悪そうにしていれば、何事か起こったと考えるのが普通である。そういう趣旨のことをオブラートに包んだ婉曲な表現で小太郎は述べた。

特別何もないから心配しないで、と繕う胡桃に、

「一つ約束しようよ、クルミちゃん」

小太郎が明るい声を出した。
「ボクたち付き合ってるんだから、隠し事は無しにしない？　悩みがあったら何でも相談し合おう。どうかな？　そういうのって、うっとうしい？」
さして考えもせず、胡桃は、小太郎の提案を受け入れた。何でも相談し合う関係。それは、胡桃にとっての理想の男女の在り方だった。単にべたべたするだけではなく、互いを信頼し助け合う。何という麗しい恋の形……。
うっとりとした胡桃だったが、
「じゃあ、クルミちゃんは今、何を悩んでたの？」
と小太郎に問われ、冷水を浴びたかのように浮かれ熱は一息にさめた。おそるおそる小太郎と目を合わせると、その瞳には冗談を許さないような真剣な色が映っていた。

その11

――実はわたし、不治の病に侵されてるの。
――え……。
――小太郎（コタロウ）くんにだけは知られたくなかった。
――胡桃（クルミ）ちゃん……。
――サヨナラ。
立ち去ろうとする胡桃。その手を取る小太郎。
――やめて、コタロウくん。同情なんて要らない！　同情されても辛いだけなのっ！
――違う！　同情なんかじゃない！
――え？
――ボクはクルミちゃんを愛してるんだ！
――ウソ……。
――本当だよ。病気が何だ！　そんなの関係無いよ。
――コタロウくん！
小太郎の胸の中に飛び込む胡桃。ひしと抱き合う二人。やがて二人は身を離し、小太郎が覚悟を決めたような顔で静かに尋ねる。
――それで、一体どういう病気なの？
シミュレーションという名の妄想はそこまでしか続かなかった。ここまでも大分都合が良いが、仮に万が一そんな流れになったとして、問題はここから先である。どうがんばっても、不治の病がブラコンでは美しい話になどならない。終了。
無言でしばらく歩きながら、胡桃は答えに窮していた。正直に話すことは論外である。言えば、恋を失うのだ。恋人に誠意を尽くしたがゆえに、恋が終わっては本末転倒である。とすれば嘘をつくしかない。では一体どういう嘘を。簡単にはバレないもの、追及できないもの。そういうものが必要とされている。
「実は、その……この頃、お父さんとお母さんが仲が悪くていっつ

も喧嘩してるの。それでちょっと悩んでるんだ」
胡桃は、昨日紐解いた賢者の書に知恵を借りた。その本には、ごく普通の少女を襲うありとあらゆる悲劇が書かれているのだ。悲劇の書、と言っても良い。挿し絵つきの、いやむしろ絵がメインの本で、読みやすいこともあって胡桃は常に座右に置いて愛読していたのだった。読書は大切である。
ブラコンを誤魔化すための窮余の一策であったが、
――それにしては……。
と、胡桃は悲しそうに伏せた目の下でほくそ笑んだ。即興だったにしては中々良い嘘に思われた。親が不仲であるというのは、中学生にとって十分に悩みの種になるだろうし、かつ相談をした所で小太郎には何もできない。何もできなければバレる心配もない。パーフェクト！　自分の悪魔的な計算高さに満足した胡桃だったが、満足感が続いたのはしばしの間だけだった。
小太郎は突然に立ち止まると、夕日をバックにしてふかぶかと頭を下げた。
「あ、あの……コタロウくん？」
驚きに目を瞠（みは）る胡桃。
頭を上げた小太郎の瞳には溢れんほどの同情と慰めの色があった。
「ごめん、クルミちゃん。そんな大変なことだとは思ってなくて。辛いこと言わせちゃったね。だから、今日元気なかったんだ。ボクには何もできないけど……でも、話を聞くことくらいはできるし、ボクでできることがあれば何でも言ってね」
胡桃は小太郎の本質を見た気がした。二日前に付き合い始めたばかりの女の子に対してここまでの誠意を見せられるとは並一通りの人ではない。彼にとって、人と付き合うということは、人と「誠実に」付き合うということと同義なのである。
感動の音が全身に鳴り響くのを聞くとともに、これまで感じたことのない種類の痛みが胸に走った。善人を騙した罪悪感による痛みである。さらに、胡桃は恐怖さえ感じていた。真剣に付き合おうと

してくれている人にウソをついてしまったのである。もしそれがバレたら、彼はどう思うだろうか。胡桃は二重の秘密を抱えることになった。

別れ道で、

「クルミちゃんの家まで送ってくよ」

と更なる思いやりを見せられた時には、もう何もかも話して許しを請おうかと思ったほどである。しかし、言えばトラブルは必至。それも特盛級のトラブルである。誠意を見せてくれた小太郎を傷つけた上に、しかも別れなければならない。

胡桃は小太郎の申し出を丁重に断ると、彼の視界にいるうちは空元気を出して毅然とした態度で歩き続けた。曲がり道でふと振り返ったとき、まだ見送ってくれていた小太郎に手を振る。小太郎から見えない位置に来ると、胡桃はがっくりと肩を落とした。

足を引きずるようにして自分の団地棟にたどり着き、どうにかこうにか三階分コンクリートの階段を上った。スチール製の玄関ドアを開けると、家族の笑い声が流れてきた。傷心の胡桃にはどこか白々しい。お帰り、という母の言葉に応える気力も無く部屋に入った胡桃は、最後の力を振り絞って押入れから布団を引きずり出し、早々に身を横たえた。

もうこれ以上は今日は何もする気にならず、着替えることさえ億劫で制服のまま眠ってしまおうかと思った。夕飯も、はやりの連続ドラマも、宿題も――これはいつものことだが――何一つとして取り組むエネルギーがない。

――失恋したときもこんな風になんのかな。

ロマンチックな分だけ、そっちの方がまだマシである。

安らかな夢の世界に旅立とうとしていたとき、

「クルミ、起きろ。メシだ」

それを邪魔する声。

うっすらと目を開けた胡桃の前に――

彼女を絶望のどん底に突き落とした当の少年の顔があった。

その12

認めよう。胡桃（クルミ）は正義の女である。事態を公平に見渡してみれば、今回の件に関して兄の責任はない。兄は何をしたわけでもないのだ。ただ、彼女と同じ親から彼女より先に生まれて来ただけのことである。兄は、ただ兄だっただけである。

――知ったことかっ！

胡桃は左手に持っていた審判の天秤を放り投げた。

「公平」など金魚のエサにでもすればいい！

「公平」でカレシが作れるかっ！

胡桃は目隠しを取ると、右手にしていた断罪の剣を振り上げた。

胡桃には夢があった。

カレシと二人で帰る夕暮れの小道。何ということもない話を嬉々として語っているうちに不意に訪れる沈黙。静かに歩く中、彼の手の甲に自分のそれが軽く触れて、頬を染める胡桃。別れ際、また明日、と声をかけてくれる少年を見て、彼と一緒の明日があることの喜びに浸る――

そんなささやかな幸せをぶち壊してくれた当人が上から覗きこんできていた。カッと目を見開いた胡桃は、ゆらりとまるで幽鬼のように立ちあがった。

兄は眉をひそめながらも沈着な面持ちをしていた。彼は常に冷静な男である。ついぞ、慌てたところを見たことがない。

「下に三人もいると、嫌でも落ち着くしかない」

とは、あまりに兄が所帯じみた落ち着きを見せることをからかった時に、返ってきた言葉である。言葉通り、兄はよく面倒を見てくれた。感謝してやっても良い。胡桃は寛容の人でもある。が、しかし、ブラコンにするほど世話してくれるとは、それはやりすぎの域である。

やはり感謝するのをやめた胡桃は、ギンと兄を睨みつけた。

友人によれば、なかなか女子に人気があるという。
――まさか妹にも人気があるとは思ってないでしょ。
胡桃は自嘲の笑みを漏らすと、自分より少し背が高い兄の顔にぐっと顔を近づけてやった。やんちゃな男の子同士のがんつけのような風情になる。
兄は顔を後ろに引いた。
「何だよ？」
「……嫌い」
「何？」
胡桃は、二つ隣のダイニングまで突き抜けるほどの大声で叫んでいた。
「お兄ちゃんなんか大っっっきらい！」
これしか言えることはない。
妹の唐突の告白にも大して心揺らす様子が見えないのにも苛々した胡桃は、部屋の引き戸に向かって、ビッと指を向けた。
「出てって」
「おい、クルミ。突然何だよ？」
「うるさいっ！　出てけっ！」
口角泡を飛ばす勢いで言ってやると、兄は、両手を軽く上げるようにして、
「分かった。今出て行くから、落ち着け」
と冷静な声を出した。その余裕のある態度に、胡桃の苛々メーターは頂点に達した。落ち着け？　どの口でそれを言うのか。
しゃがんだ胡桃は枕を手にしたが、忌々しいことに、危険を察知したらしい兄は引き戸を開けて速やかに部屋を脱出していた。胡桃は枕を布団に戻すと、その上に握った拳を打ちつけた。ハンマーでも打ちつけたような響きに下の階の住人はさぞ驚いたことだろう。
大声を出して一層疲労した胡桃だったが、立ち上がったついで、制服からパジャマに着替え始めた。そうして着替え終えたところで力尽きた。ややあって、「クルミ、入るわよ」という声が聞こえ、

静かに引き戸が開いた。兄妹喧嘩の仲裁をするためだろう、現れた母に、夕飯は要らない旨、胡桃はもぐり込んだ布団の中から伝えた。

「一体、どうしたの？」

どうしたもこうしたもないのである。掛け布団が作る闇の中から、ほっといてよ、と弱い声で言うと、そっと母の手が入ってきて、胡桃の腕から肩に触れて、最後には額に当たった。

母の手はひんやりとして気持ちが良かった。だが、そのうちにズキズキと頭痛がし始めたのだった。

その13

胡桃（クルミ）は風邪を引いた。

兄に怒鳴り声を上げた直後から発熱し、熱はするすると急上昇。ひととき三十九度近くまで上がった。水枕と冷却ジェルで火照った頭をサンドイッチしながら、胡桃はぐったりと身を横たえて一夜を過ごした。

夢の中で、胡桃は不思議の国にいた。

ブラコン・キングダム。

そこは兄ラブの女の子たちが集まるブラコンのための王国である。王国では日夜、兄を籠絡する方法が議論されている。朝兄を起こすとき、食事を給仕するとき、一緒に学校に行くときなど、どのような仕種や振る舞いをすれば己の魅力を最大限に発揮し、兄の心をぐらつかせることができるのか。あるいは、兄に言い寄る不逞の輩をどうすれば追い払うことができるのか。

立派な城門の内側から響いていくる喧喧囂囂（けんけんごうごう）牛もうもうたる言い合いを聞きながら、胡桃が突っ立っていると、

「ようこそ、ブラコンキングダムへ」

ネコ耳をつけたメイド服姿の少女がにこやかな笑みを向けてきた。

胡桃が慌てて自分はノーマルであることを伝えると、少女は変わらぬ笑顔で、

「その服を着ているということはこの門の内側に入る資格があるということです」

手の平を向けてきた。目を疑う胡桃。いつの間にか自分もメイド服を身につけているではないか。おそるおそる頭を触るとふわふわした手触りのものがついている。

「お互いお兄ちゃんを手に入れる為にがんばりましょう！」

少女がぐっと握り拳を作る。そのためのメイド服だ、と言わんばかりの口調だったが、意味が分からない。これは、兄ではなくて、

単なるメイド好きの変態を落とすためのコスチュームではないのか。そんな疑問を胡桃が抱いたところ、ぐいっと手が引かれて、更にぐいぐい引きずられる。城門の中に導くつもりだ。

このままアブノーマルな世界に入れられてたまるか、と思った胡桃は、メイド少女の手を振り払うと、自分の頭につけられたネコ耳バンドを引き剥がした。そのまま、バンドを投げつける。それを顔で受けたメイド少女は、これまでの柔らかな口調を一転させて、底冷えのする声を出した。

「往生際が悪い子ね。あんたはブラコンなのよ。認めなさい。認めれば楽になるわ」

胡桃は身構えた。

「違う！　わたしはノーマルよ。可憐でチャーミングで将来美人になりそうな、歌って踊れるどこにでもいる中学生よ。お兄ちゃんなんか、好きじゃない！」

夢の中であることを利用して、胡桃は都合のいいことを言った。

「フフフ、でも、あんたが小太郎（コタロウ）くんを好きになったのは、お兄ちゃんに似てるからなんでしょう？　いくら否定しても無駄。心の奥底では、兄を慕ってるのよ」

その嘲るような口ぶりに、胡桃は我慢ができなくなった。彼女の忍耐メーターの針は実に簡単に振りきれるのである。にやにやしたインチキメイドの頬に、胡桃の両手が伸びる。思いきり頬をつねってやると、まことに苛立たしいことに、彼女の頬は柔らかくかつすべすべとしていた。しかも見た目も雪のように白いのだ。このかわいい頬で兄を落とそうとしているのだろう。

――赤まるほっぺにしてもっとかわいくしてやる。

と意気込んだ所で、胡桃はハッと目を覚ました。

ぼおっとした視界が徐々にクリアになって、見知った顔がこちらを見ているのに胡桃は気がついた。妹である。彼女はなぜか仏頂面をしていたが、その訳はすぐに分かった。ほっぺたをギュウとつねられていれば、いくら愛らしい彼女でもブサイクにならざるを得な

い。
胡桃の手が妹のほっぺたを離れ、掛け布団の上に落ちた。
室内は朝の光に柔らかく染まっている。
「大丈夫、お姉ちゃん？　大分、うなされてたよ」
心配して覗き込んだところ、突然に姉の腕が伸び、何の恨みがあるのか自分の頬をつねり出したのだ、と妹は続けた。
「水、ちょうだい」
起き上がってかすれ声を出すと、近くにあった水差しから妹はコップに水を注いでくれた。ぐいっと飲み干す胡桃。少しぬるめの水だったが、返って飲みやすい。体に潤いが戻った感じがして人心地ついた胡桃は、現在の状態を確かめた。
頭痛なし。改めて腕を動かしてみると、多少意志の力を必要としたが問題ないようだ。良し、と思って立ちあがろうとしてみたが、そこでぐらりと体が揺れて、妹に支えられる破目になった。
「トイレ？」
そんなことを訊いてきた少女に、胡桃はギラリと強い目を向けた。むやみに妹をひるませた胡桃は、お姉ちゃんには行かなければならない所があるのだ、と厳かに告げた。

その14

恋する乙女が向かうべき場所とは、他でもない、カレシの腕の中である。

すなわち、

「学校へ！」

胡桃（クルミ）は、姉を支える妹に激を飛ばした。しかし、妹は動かない。

「どうした、シルバー？　ハイヨー！」

馬役を任ぜられた妹は、静かに首を振って、学校という公共の場所に行くには、服を着替え、髪を梳かし、歯を磨かなければならないのだ、と病に侵されいつもよりいっそう頭が回らなくなっている姉にやさしく説き聞かせた。

「それにお姉ちゃん、今日はまだ学校に行ける状態じゃないでしょ」

「何を言う？　行けるか行けないかじゃないわ。行く気があるかどうかよ。行く気があれば行ける！　為せば成る」

胡桃は無駄にカッコイイことを言って、そうして言った自分にちょっと酔った。酔っぱらいの相手をする気はない妹は、とりあえず姉をバスルームへと導き、あとは母に任せることにした。母は、背を曲げて両腕を前に垂らしながらまるでゾンビのような様子でバスルームから出てきた長女を、むんずとつかみあげて、布団の中に戻した。

「絶対に学校に行くんだっ！」

掛け布団を蹴飛ばして駄々をこねる胡桃を、母はうさんくさそうな顔で見た。一年生のときは、ちょっと気分が悪いといってはすぐに学校を休もうとするズル休みの権化のような子だったのに、いつからそんなに学校好きになったのか。そんなことを訊かれた胡桃は母に、二十数年前のことを思い出せば分かる、と言い返した。

「お母さんにだって、中学生のときがあったでしょ？」

胡桃は、倦怠感漲（みなぎ）る体を無理無理気力で動かして立ちあがると、

のろのろとパジャマを脱ごうとしたが、
「あったわ、もちろん。その頃のお母さんはね、親の言うことをよく聞くいい子だった。布団に戻りなさい！」
母に怖い顔で一喝され、スゴスゴと従うしかなかった。ちょうどそこで体力も切れた。しっかりと布団の中に収められた胡桃は情けない気持ちでいっぱいだった。微熱に負け、恋人に会いに行けないとは。
「ふがいないカノジョを許してね、小太郎（コタロウ）くん」
「何言ってるの。まだ三十七度五分もあるじゃない。今日は一日大人しくしてなさい」
体温計を見ながらたしなめてくる母に、胡桃は力なくうなずいた。
家族のそれぞれが出がけに見舞いに来てくれたが、なぜか兄だけが来なかった。こういうときに人の本質というものがはっきりとするのだ。胡桃は、お粥を持って来た母に、兄の冷血ぶりを訴えた。
「じゃあ、もう怒ってないの、春樹（ハルキ）のこと？」
薄味のどろりとした中途半端な食べ物に顔をしかめていると、母が不思議なことを言った。なぜ兄を怒らなければいけないのか。兄のことは特別好きというわけではないが、しかし、嫌なことをされたことはこれまでのところ無い。そんな無害な人に対して怒っていたら、よっぽどの癇癪持ちであろう。野に咲く竜胆（りんどう）の如き可憐な少女がやたらめったら怒声を張り上げることがあろうか。
「でも、家中に響くような大声でハルキのこと『嫌いだ』って叫んだじゃないの。ハルキはまだクルミが怒ってると思って、あなたの神経を逆なでしないように見舞わなかったのよ」
胡桃はスプーンを置いた。
「もういいの？」
母はもっと食べるよう勧めてきたが、胡桃は断った。医者に行くかどうか訊かれたが、それにも首を横にした。母が部屋を去って一人になると、胡桃は水枕に頭をつけて天を仰いだ。全てを思い出した。

自分が絶望的な病に侵されていること。
そのせいで恋人に嘘をついたこと。
慰めてくれる兄の前でさめざめと泣いたこと。
不吉な夢を見たこと。
昨日から今日に至る出来事を正確に思い出した胡桃は、天井をじっと見つめ続けていた。無心で天井を見つめているうちに忽然と何かを悟り、力強く未来を生きていけるのではないかと期待してみたが、天の声は降らず、無駄であった。
まさか自分がブラコンだとは。突然すぎる発症ではっきりとした実感が無い。しかもタイミングが絶妙なのだから恐れ入る。カレシができたという幸福の直後に訪れるブラコンという不幸。まさに、禍福はあざなえる縄の如しである。少女コミックのようなドラマチックな展開ではないか。胡桃は力なく笑った。あれは傍から見ているから面白いのであって、自らやるものではない。
胡桃はこの不幸を背負って勇ましく前に進む自分を想像してみた。せっかく治まった頭痛がまたしてきて、思わず目をつぶった。ブラコンという十字架を背負っても、それはただ重いだけで、誰からの同情も得られそうにない。
瞼の裏に小太郎の笑顔が映った。
小太郎のことは素直な気持ちで好きだった。まだ彼のことが良く分かるほど付き合った訳ではないが、現に今好きであるというこの気持ちに疑いは無い。動機が、そう動機だけが問題だったのである。こんなことなら、顔が良いとか、優しいとか、スポーツができるとか、頭がいいとか、話してて楽しいとか、そういうミーハー的な動機であればまだ良かったことだろう。
兄に似ていたから。しかも、どこが似ているということがはっきりと言えないのだからなおタチが悪い。外面的な部分は何も似ていない——後ろ姿以外。顔も声も行動も何もかも、小太郎の方が兄よりも数段勝っている。身にまとう雰囲気が何となく同じなのである。
胡桃は絶望的な気分で一日を過ごした。一体このブラコンという

病は治るのか。治るとしたらいつなのか。それまで小太郎に隠し続けていられるのか。そのうちメイド服を着てネコ耳を身につけるようになるのか。人はどこから来てどこへ行くのか。

何一つ答えが得られぬまま、布団の中で唸っていると、いつしか日は傾き、中学生が学校から解放される時間帯になっていた。

その15

熱が下がって来たのか、ちょっとずつ気分が良くなってきた所に、立て続けにメールが来た。
「胡桃(クルミ)、大丈夫？」
「明日は学校来られるの？」
「クルミがいないから、一日つまんなかった」
体を横たえた状態のまま携帯を操作して更に気分が良くなる胡桃。あやうくほろりとさえする所だった。持つべきものは友だちである。それぞれのメールに対して胡桃は、わたしは元気です、とちょっと微妙な返信をしておいた。
「バカでも風邪引くんだ」
「早くサッカー部の男子紹介してよ」
持つべからざるものは、友だちもどきである。胡桃は怒りに任せ思わず携帯をへし折るところだった。危ない、危ない。そんなことをしても胡桃が一方的に損をするだけである。胡桃は新アドレスを考え始めた。新しい携帯アドレスは心配メールをくれた人にだけ教えることにした。自分にぴったりの可愛いアドレスを考えていると、携帯が光って新たなメールの到着を告げた。
小太郎(コタロウ)からだった。
ドキドキしながら開くと、そこには丁重な見舞いの言葉が打たれていた。胡桃は足をばたばたさせた。明日は何が何でも学校に行くことに決めた。
「たとえ、這(は)ってでも！」
そのハイテンションは長くは続かなかった。というのも、なおもメールは続いていて、下にスクロールしていった先に、
「辛いことがあったら何でも話してください」
と一文あったからである。今日の病気とは関係ない。それは明らかに胡桃が昨日話したウソ悲劇に対するいたわりの言葉であった。

冷めた。テンションメーターは一気に急下降した。胡桃は自分の軽はずみを責めた。何であんな嘘をついてしまったのか。
――今日は会えなくて良かったのかもしれない。
会わせる顔がない。
とはいえ、明日になれば問題が解決するというわけでもなく、
「クソっ！」
胡桃は、恋する乙女にあるまじき言葉を口走った。ちょうどそのとき、部屋の引き戸が桟を滑る音がして、母が顔を出した。フクザツな表情をしていたが、熱とそれ以上に思春期という病に侵されている娘を思いやってくれたのであろう、胡桃の失言については何も言わなかった。
「泉（イズミ）ちゃんがお見舞いに来てくれたわよ」
胡桃が起き上がって入室の許可を出すと、少しして制服姿の少女が部屋に入って来た。
木村泉は兄のカノジョである。付き合ってそろそろ一年になるだろうか。太っているというわけではないが全体にふっくらとした体つきで、ころころと良く笑う。家が会社を経営しており、言わば彼女は社長令嬢である。そんな人が何を間違って兄と付き合っているのか分からないが、胡桃にとっては嬉しいことだった。兄と同学年なので一歳年上になる彼女は、胡桃のことをまるで妹のように扱ってくれていた。
「ハルキに聞いて来たんだけど、調子どう？」
枕もとにふわりと腰を下ろした泉が優しく笑った。
「お姉ちゃんっ！」
瞳の縁に熱いものを感じながら、胡桃は泉の胸の中に飛び込んだ。
「わたしもうダメかも」
そう弱い声で言って、そのまま身も世もない振りで、えーん、と泣き声を上げる。
お茶を運んできた母が、病人が見舞い客にくっついて病気をうつそうとしているのを見て驚いて娘をたしなめたが、泉が、大丈夫で

すから、ととりなしてくれた。母が部屋を出て行っても、しばらく胡桃は泉にひっついていた。よしよし、とあやすように頭を撫でてもらうと少し気持ちが落ち着き、身を離してティッシュで鼻をかんだ。

「ほら、涙も拭いて」

胡桃は、泉が差し出してくれたハンカチを取って目に当てた。

「恋の悩みね」

濡れたハンカチを返すと、泉がにっこりとして言った。

「ズバリ恋の悩みでしょう。お姉さんにどんと任せなさい」

「笑わない？」

「もちろん」

ニコニコ笑顔の泉に、胡桃はちょっと不審の目を向けたが、

「もともとこんな顔よ」

という泉の言葉を容れて、兄がまだ帰ってないか確認したのちに、悩みを打ち明け始めた。泉は神妙な面持ちで聞いていた。笑わないで欲しかったわけだが、いつもにこやかな顔が真剣な表情を浮かべると、ギャップがありすぎて、それもそれで何か怖い。

まだ日が落ちる時刻でもなく電気を点けずとも十分に明るい室内が、沈黙に満たされた。

「ど、どうしたの、イズミちゃん？」

話終えてしばらくしても、泉は一言も発せず黙りこくっていた。

「クルミちゃん……」

「なに？」

泉の柔らかな瞳の奥に強い光が差した。

「どうやら、わたしたち、ライバルってことになるね」

「え？　ライバル？」

「そう。一人の男の子を取り合う恋のライバルだよ。負けないよ、わたし」

胡桃はがっくりと肩を落とした。親友には笑われ、カレシには誤解され、家族にはもとから相談できない。最後の頼みの綱である人

生の先輩からもからかわれ、この世界でとうとう一人ぼっちになった瞬間だった。

その16

光無き永劫の闇に落とされたヒロイン。行く先は見えず、さりとて来し方は消え。手探りでふらふらと手を伸ばすと、温かな手に触れた。闇の中からにゅっと現れたその手は、力強く胡桃の手を掴んだ。

この闇から引き上げてくれるのか、と胸に灯った希望は、

「春樹（ハルキ）にどっちが選ばれても恨まないようにしようね。正々堂々戦いましょう」

あえなく消えた。

「胡桃（クルミ）ちゃんだったら相手にとって不足なし。よーし、燃えてきたゾ！」

胡桃は握られた生温かい手をフンと振りほどいた。「第一回お兄ちゃん争奪杯」への参加は無論のこと辞退である。

「どうして？」

「ねえ、泉（イズミ）ちゃん……」

「ううん、何も言わなくていいよ、クルミちゃん。わたしに気を遣ってハルキを諦めるって言うんでしょ。でも、そういう同情はね、時に残酷なもの。遠慮なんかしないで、ね？」

悲愴な面持ちをしている泉をじろりと見ながら、胡桃は、自分の気持ちを表現するためとはいえ果たして、年上の人のほっぺたをつねってもよいものか、考えていた。それはいかにも失礼な行為だろう。そうかもしれないが……知るか！

風を切った胡桃の手は目標の少し手前で止まった。いや正確には止められたのである。

「落ち着いて、クルミちゃん」

泉は頬を狙って伸びてきた胡桃の手を自分の手で押さえた。

「お・ち・つ・い・て・いられるか～」

手首を取られたまま無理に腕に力を込める胡桃だったが、熱と己

の性癖と一晩戦って疲労した体からは大したエネルギーを抽出することもできず、ついに押しきることはできなかった。
諦めて胡桃が腕から力を抜くと、泉の手が手首から離れた。
「イズミちゃん、わたし、けっこー真剣に悩んでるんだけど」
無駄に疲労した胡桃が軽く睨むようにすると、ようやく本気であることを分かってくれたのか、泉は、スカートの裾を直して心持ち居ずまいを正した。しかし、その口から出たのは、
「別にいいんじゃないかな、お兄ちゃん好きでも」
まるで他人事のような言葉である。胡桃は、未来の姉とまで仰いでいた少女のあまりの酷薄さに寒気を感じた。これまで仲良くしてくれたのは、兄や母の目をくらませるための芝居だったのだ。完全に信用されたことが確信されて、彼女はもう偽りの自分を演じる必要を感じなくなったのである。
「これからその本性を露わにしてわたしを虐待し始めるのね。イズミちゃんが、そんな人だとは思わなかったっ！」
「うん。いつものクルミちゃんね」
前髪がかきあげられて額に手を当てられる胡桃。熱は無いみたい、と笑顔で告げてくる泉に、熱なんかどうでもいい、と胡桃は噛みついた。
「気にすることないって、いいじゃないの、兄を慕う妹。麗しい兄妹愛」と泉。
胡桃は肺の中にある空気を全て出し尽くすような長いため息をついた。いいわけがないのである。幼稚園児くらいならお兄ちゃん好きでも、いやそうであることによって返って愛されるかもしれないが、中二でお兄ちゃん好きというのは立派な病気である。
「でもね、わたしの友だちにもお兄ちゃんが好きだっていう子、結構いるよ」
「慰めはいらないよ、イズミちゃん」
「ウソじゃないって。休みの日に一緒に出かけたりしてるみたいだよ」

兄とデートしている自分を想像すると背に悪寒が走った。胡桃は末期的な状態にある友人を持つ泉に、同情の言葉をかけた。まあ、百歩譲って、カッコいい兄だったら分からなくもない。あんなお兄さんだったらブラコンになっても仕方ないよね、と周囲を納得させるような兄であれば格別である。

「うちのお兄ちゃんじゃさ」

どうにもしようがない、と首を横に振った胡桃は、泉の笑顔が少し引き締められたのを見た。

「いくらクルミちゃんだとしても、今のは聞き捨てにできません。ハルキはカッコいいです」

げに美しきは恋人をかばう乙女心である。胡桃は、健気なことを言う少女の膝をぽんぽんと叩いてやった。なおも兄のカッコ良さに言及する泉に、うんうん、と鷹揚にうなずいてやる胡桃。お兄さんは実はカッコいいんだよ、と強調されても、こっちは年中無休二十四時間態勢で兄と接しているのである。説得力が違う。

「……じゃあさ、もしクルミちゃんから見てハルキがカッコ良くなったら、悩みは解消されるの？」

しばらくしてそんなことを言ってきた泉に、胡桃はぞんざいにうなずいてやった。太陽が西から昇ったらという仮定と大差ない話である。万に一つも起こりようがない。

泉の優しげな瞳にいたずらな光が宿った。

「クルミちゃん。次の日曜日ヒマ？」

「ヒマじゃない……って言いたいけど」

全くの休日である。小太郎が部活なのでデートもできない。無論、小太郎が休みだとしてもデートを申し込めるかどうかはまた別の話ではあるが。

「じゃあ、決まりね」

泉はパチンと両手を打ち合わせた。

「何が？」

「次の日曜日、カッコいいお兄ちゃんとデートしよう」

その17

抵抗はした。いくら暇を持て余しているとは言っても兄とデートなど冗談ではない。そんなことをするくらいなら町の清掃活動にでも勤しんだ方がよほど有意義である、と。

「でも、もしかしたら心の淀みがキレイにさらわれるかもしれないよ」

兄をカッコ良くコーディネートすることによって、胡桃（クルミ）のブラコンに正当な理由を与えてみせる、と泉（イズミ）は自信たっぷりに続けた。

――バカバカしい！

思っただけではなく実際に口にも出してみたが、

「怖いの？」

と切り返されて、それが特に挑発するような声音でもなく、にこにこと笑いながら言ってくるものだから、返ってムッとして思わず挑戦を受けてしまったのだった。病身であったがゆえの短慮である。いつもはもっと考える子です。

「クルミ、なに、ぼおっとしてるの？　小太郎（コタロウ）くんがボール持ったよ」

友人が興奮した調子で肩を叩いてきた。

胡桃は我に返ったように、眼前に広がる光景を見た。

昼前のまだ爽やかな光の下、グラウンドで、二十名ほどの男子が走りまわっている。体育の授業。クラス対抗でサッカーの練習試合をしているのだった。昨日大病を患った胡桃は、同じく体調不良の数人の友人たちと一緒に見学に回っていた。見学しているのが、ソフトボールをやっている女子組ではなくもっぱら男子の方であるという点については、

「やむなし」

というのが胡桃の意見であり、他のズル見学している女子の意見でもあった。

フィールドのほぼ中央でボールを持った小太郎は、チェックに来た敵選手を一人軽やかにかわすと、前線にフィードした。ボールが綺麗な弧を描いて、フォワードの選手に渡る。パスを受けた味方選手はシュートしたが、ボールはわずかにゴールを逸れた。

「あ、外れた！　もう！　コタロウくんが自分でシュートしにいけばいいのに。パスなんかしないでさ」

「ホント、ホント。コタロウくんだったら決めてたよ」

周りの女子が不満の声を漏らすのを聞きながら、ふふふ、と胡桃は高慢な笑みを浮かべた。小太郎のポジションはオフェンシブハーフと言って、自らがシュートにいくこともある一方で、前線の選手にパスを供給することも大事な仕事なのだ。そんなことも知らず何でもシュートする人間がエライと思っている。無知蒙昧（ムチモウマイ）とは彼女たちのためにある言葉であろう。

「何でそんなに詳しいの？」

もちろん、調べたに決まっている。告白前に調査済みである。愛しい人がやっているスポーツに関して無関心でいられようか。また、カード狂の弟がサッカー部であって、彼からレクチャーを受けたことも役立っている。たまには弟も役立つもんである。

「で、ムチモウマイって何？」

「そういう名前のひときわどんくさいカタツムリよ。正式名ムチモウマイマイ」

調子に乗って適当なことを言った胡桃は険のある目を友人たちから向けられたが、気にしない。それどころではないのである。フィールドにいる小太郎はまるで光を纏ったように輝いていた。とても直視できないほどである。スポーツのできる男子というのは何でこんなにカッコイイのか。興奮した胡桃は、あの人がわたしのカレシですよ、と大声でグラウンド中に、いや、選挙カーに乗って街中に喧伝（けんでん）したいくらいだった。

ゲンキンなもので、小太郎にウソをついた罪悪感は今朝、彼に一日ぶりに再会したときに消えてしまった。いやあるにはあるのだが、

小太郎への想いが強すぎて、その想いに圧倒され小さくなったのである。大いなるラブの前では罪悪感など何ほどのものでもないのだ。もしかしたらこのまま日を経るに従って全然感じなくなるかもしれないぞ、と胡桃は実に都合の良い考え方をした。嘘をついたことへの罪悪感がなくなれば、あとはブラコンへの嫌悪感を消し、自分がブラコンだということを隠し通せばいいだけである。

――未来は明るい！

にわかに希望の光の温かさを感じた胡桃の横で、

「いいなあ～。クルミちゃん、あんな人と付き合ってるんだもんな～」

小麦色の肌をした少女が羨ましげな声を上げた。もっと言ってくれ、我を称えよ、と傲慢極まりないことを考えながら、胡桃は、でへへへ、と思わず自分でも気持ちの悪い笑い方をした。

「お兄さんもカッコいいしさ。恵まれすぎだよ、クルミちゃん」

「あんな兄で良ければ、いつでも差し上げますよ。それにミヤちゃんこそ、ステキなお兄さんいるじゃん」

「兄は一人いるけど、ステキな兄なんていませんね～」

「でも実は好きなんでしょ？」

胡桃はじっと友人を見つめた。ここで、彼女がむきになって否定してくれたり、あわよくば頬を染めて俯いてくれたりなどすれば、胡桃としては大いに慰められることになったが、彼女はきょとんとした顔を作って、

「うーん、まあ、好きっていうか、いてくれると色々便利だよね。上に一人いると親からうるさく言われにくくなるし、こき使えるし、あと、付き合ってるカノジョさんと会えるのは楽しい」

真面目に答えてくれるものだから、墓穴を掘ることとなった。やはりブラコンはマイノリティなのだ。胡桃は、兄のカノジョが施してくれる一手によって、気持ちよくその少数派に入れるようになることを祈った。

その18

病み上がりの金曜日を友人とカレシに優しくされながら甘えて暮らし、完全回復した土曜日を、しかし、まだ本調子ではない振りをしてむやみに親を心配させて過ごすと、もうXデーであった。運命の日曜日。皐月（さつき）の青空から清々とした光が降り、そよそよと爽やかな風が吹いている。無駄に気持ちの良い日である。

「今日こそ王になってくるゼ、姉ちゃん！」

団地の階段をくだりきって少し歩いていると、後ろから小柄な影がすり抜けた。弟である。今日、カードゲームの大会があるらしい。

「王になる」とはなかなか豪気なことである。立ち止まって箱型のカードケースを誇らしげに見せつけ不敵に笑う弟に対して胡桃（クルミ）は、王になったらいつも温かく見守っていた心優しい姉に対して恩返しするよう念を押した。

萌ゆる草木の香りを吸いながら十五分ほど歩くと、駅前広場であった。

――何やってんだろうなあ、あたし。

それは誰にも分かるまい。胡桃はひとり空しい突っ込みを入れた。駅前広場は喧騒に満ちていた。行楽日和にどこかへ遊びに行くのだろう、駅へ向かう人々は一様に気楽な服装で楽しげである。テンションが上がり切った子どもの奇声とそれをたしなめる親の声、バカップルがお互いのウツクシサを讃えあう嬌声などが聞こえてきた。

そんな賑やかなところの一角で寂しくぽつねんと佇んでいなければならないのは、

「待ち合わせにしようね」

という泉（イズミ）の一言が原因である。何でそんなことをする必要があるのか尋ねると、

「だって、その方がデートっぽいでしょ」

泉は笑って答えた。何か企みがあるのである。彼女の意図はまる

きり不明であるが、大した人だ、ということは認めざるを得ない。中学三年のこの時期に、学業に勤しむべき休日を、茶番をプロデュースすることに当てられるのだから。とても真似できそうにない。したくもない。

それにしても、泉の言った「デート」という言葉はよろしくない、と今さらながら胡桃は思うのである。恥ずかしながら、いや別に恥ずかしくもない、いややっぱり恥ずかしいことに、胡桃はまだ「デート」というものをしたことがない。早熟な友人たちが語る甘酸っぱい「デート」話を、羨ましげに聞いている立場であり、初デートを夢見る純情百パーセントの少女なのである。その初めての相手が兄などであって良いものだろうか。

――これはデートなんかじゃないっ！

胡桃は足を踏みならした。エサを求めてチョコチョコと地面を歩いていたハトが驚いて空へ逃れた。胡桃は苛々してきた。本来ならば、初めてのカレシを待って、胸をドキドキさせながら、手鏡を見て前髪を直したり、目やにがついていないかどうか確認したり、魅力的な笑顔ができるよう練習をしたりしているはずなのに。相手が兄ではそんなこともできないし、しかも――

「遅いっ！　何やってんのよ、お兄ちゃんは？」

既に約束の時刻から五分が経過していた。遅刻である。これが小太郎（タロウ）だったら、五分くらい何でもない。三十分でも一時間でもいくらでも遅れてくれて良い。

――もう！　遅いよ、コタロウくん！

――ゴメン、クルミちゃん。

――謝るだけじゃ、許してあげない！

――じゃあ、どうすれば……。

――お願い一つ聞いてくれる？

――いいよ、何でも言ってよ。

――今すぐここでキスして。

――えっ？　い、いや、それはちょっと。人前だし……。

――わたしのこと愛してないのね。もういいわ、プン。
――分かったよ。しょうがないな、クルミちゃんは。
――本当？
――目をつぶって。
――はい……。
妄想の翼で大空をどこまでも駆け上がっていきそうだった胡桃を地上に引きとめたのは、近くに聞こえた足音だった。胡桃は、コホンと咳払いすると、緩んだ顔を引き締めて、
「お兄ちゃん、遅いよ。何してたの！」
怒りの声を上げた。
近づいてきた気配の方に体を向けた胡桃は目を丸くした。てっきり兄だとばかり思い込んでいた人影は見知らぬ少年だった。胡桃と同い年か一つ二つ上の年。清潔感のあるベリーショートの黒髪が細面を彩って、オーバル型の眼鏡の中に知的な瞳が覗いていた。
胡桃は心の中のカレシに詫びた。不覚にも見惚れてしまったのである。カレシに借りができてしまった。彼が他の女の子に魅了されるときがあったとして、一回は許してやらなければならない。
そこで胡桃は己の早計を反省した。
――言わなければ分からないことだわ。
自分に都合の良い反省だけはすぐにできるという特殊能力を持っている胡桃は、今の一件を心の中の宝石箱に放り込んだ。十三年間いろいろとアヤシゲなものが詰め込まれたその箱はそろそろ上蓋（うわぶた）が閉まらなくなってきている。
「ごめんなさい、人違いで……」
謝ろうとした矢先だった。
不意に手に温もりを感じた胡桃の心臓が跳ね上がった。

その19

見知らぬ少年から唐突に手を握られた胡桃（クルミ）は、
――もしかして、これがナンパというものかしら？
ドキドキしながら考えた。
ナンパとは、通りすがりの美少女――「美」という所が大切だ、と胡桃は主張する――を、ひと時のアバンチュールの相手とするためにお誘いする行為である。少女の恋に関してあらゆる知識が書かれている「賢者の書」によると、典型的な誘い方は、
「キミ、可愛いね。ちょっとそこでお茶しな～い？」
的な軽薄極まりないものであるそうだが、目前の少年の雰囲気は厳粛なものだった。胡桃の片手を取ったまま真剣な目を向けてくる。何かを訴えかけてくるような目だったが、あいにく彼には見覚えが無い。初対面である。
「あ、あの……？」
たっぷり五秒ほどしたのち、胡桃は口を開いた。さすがにこのまま手を取られて見つめられていることが気まずくなったのである。胡桃はカレシを持つ身である。喫茶店やアミューズメントパークや、ダンスパーティに誘われても、のこのこついて行くことなどできない立場なのだ。
――あなたとは出会うのが少し遅かったのよ、ごめんなさい。
心中で頭を下げた胡桃が、すっと少年の手から自分の手を離すと、ふう、というため息が聞こえてきた。失望の吐息である。何にガックリきているのかは言うまでもない。他の美少女を探してね、と内心でエールを送り、少年の立ち去る姿を見送ってやろうと思った胡桃だったが、意に反して彼はその場を動かなかった。
「ごめんなさい。兄を待ってるんです」
人と待ち合わせている最中だとアピールして、胡桃は彼の執着を断ち切ってやろうと思った。いくら恋い焦がれられても、こればか

りは仕方無い。カレシを待っていると言った方がより彼のためになっただろうか、と胡桃が考えていると、
「まさか本当に気がつかないとはな」
少年が初めて口を開いた。
落ち着いた綺麗な声である。
そう思った瞬間に、胡桃の血の気が引いた。
聞き覚えのある声だった。記憶に間違いがなければ、それは実に十三年の間聞き続けて、いささか聞き飽きた声である。
「お兄ちゃん……なの？」
少年はどこかしぶしぶといった調子でうなずいた。
胡桃が唖然としていると、背後からガサゴソという音がした。振り向くと、植え込みから草を割って少女がひとり姿を現した。
「びっくりした、クルミちゃん？」
ニコニコマークも顔負けの泉の腕を取ると、キャッと声が上がるのも無視して、彼女をぐいぐい引っ張っていく胡桃。兄らしき少年から十分に距離を取ると、一体アレは何なのかと、鋭い声をかけた。
「何って、春樹（ハルキ）だよ。あなたのお兄さんじゃないの」
「あれが？」
全くの別人である。つい昨日、いや今朝見たときまでは、無造作にカットした中途半端な長さの髪と冷ややかな目を持ち、精神の未熟さを表すような青々としたダサいジーンズと、低い知性を象徴する訳の分からない英語が書き込まれたTシャツを身につけていたのに。
「クルミちゃんをびっくりさせる為に朝一でカットしてもらったの」
現在着ている華やかなギンガムチェックのパーカーとカーゴパンツは、昨日量販店に一緒に買いに行って泉が選んでやったものらしい。
「眼鏡も似合うでしょ？」
兄は目は悪くない。レンズは度なしのようである。
幸せそうな顔をしている泉を、胡桃は恐ろしげに見つめた。「魔

法」と称しても大げさでない手際である。その魔法にかけられて、兄は変身を遂げ、そして胡桃は変心した。まさか、兄のことをカッコいいと思ってしまうとは。一生の不覚！

「さ、デート開始だよ、クルミちゃん。ハルキの所に戻って」

今度は逆に自分の手を引くようにする泉に、嫌な予感を覚えた胡桃が、

「イズミちゃんも一緒に来てくれるんでしょ？」

懇願口調で確認してみたところ、

「兄妹水入らずを邪魔できないよ。それにわたしがいたら甘えられないだろうし。今日はカッコいいお兄ちゃんに甘えてください」

キラッと星がまたたきそうなウインクが返ってきた。

兄は道行く女子中高生の視線を集めているようである。それにも納得できてしまうのだから、いよいよ病膏肓（こうこう）に入る。まさに胡桃は死の淵に立っていたというべきである。

「さ、二人とも手をつないでみよう！」

泉の突き抜けるような明るい声が、哀れな少女の背を無情にもドンと押しやった。

その20

手をつなごう。

二人手をつなげば、あらゆる困難を打倒し、耐えがたきを耐え、喜びは二倍、悲しみは半分になる。どちらかが正しい道を知っていれば、ひとり寂しく迷子になることもない。無論、二人いっぺんに道に迷うこともあるが、そのときだって相手がいれば、お前が悪い、と責任をなすりつけることができるのだ。

手をつなげる相手がいるというのは非常に幸せなことなのである。

それは分かる。しかし、誰でも良いというわけではない。胡桃（クルミ）が手をつなぎたいのはカレシである。あわよくば腕も組みたい！　それはともかく兄と手をつなぐなど真っ平ごめんこうむる。

「デート中は手をつなぐ、コレは常識よ」

泉（イズミ）が相変わらず笑顔で言う。その隣で、兄は相変わらず平然とした様子。この二人と一緒にいると、何だかこちらの方が間違っているような気になってくる胡桃だったが、

――そんなはずない！

ぎゅっと拳を握り爪を手の平に食い込ませて正気を保つと、これはデートなどではない、とはっきりと二人に告げた。

「だから、手なんかつながない」

「怖いの、クルミちゃん？」

胡桃はムッとした。兄の手を握ることにどんな恐怖があるというのか。そんなものは断じてない。ちょっと前にも泉から同じ挑発を受けたような気がしないでもないが、まあいい。胡桃は過去にとらわれない女の子である。勇気を疑われては女がすたると、胡桃は、バッと兄に向って挑戦的に手を差し出した。

そう、これは挑戦であった。

兄にしたって、いい年をした妹の手など取りたいはずがない。兄がどう出るか。

――これは見ものですよ。
唇の端に笑みをのせる胡桃。
兄はいともあっさりと妹の手を取った。仲良し中学生カップルの出来上がりである。
「じゃあね、春樹（ハルキ）。男に二言は無しだからね」
何らか二人だけの取り決めでもあるのか、泉は秘密めかした注意を兄に与えると、ショックを受けている胡桃の背をぽんぽんと叩いて勇気づけるようにしたあと、おもむろにその場を去って行った。泉の背が雑踏の中に消えると、静かに手が引かれた。無言で兄を見ると、行くぞ、と促す声。
首を傾げる胡桃に、
「ここでぼおっとしてても仕方ないだろ」と兄。
確かに広場でぽつねんと手をつないで突っ立ってても、道行く人の好奇の的になるだけである。二人は晴れた青空の下、広場から、駅前に広がる街の中心部へと歩き出した。歩を合わせながら胡桃は横目でちらちらと兄を窺った。声さえ聞かなければ、見知らぬ男の子と変わりない。しかも、あんまり認めたくないことだが、髪と服装を整えるとそれなりに見栄えのするルックス。にわかに胸に動悸を感じた胡桃だったが、
「ちょっと髪を切って、眼鏡をかけただけだぞ。分かりそうなもんだ」
兄が声を出したので、ドキドキはピタリとやんだ。おや、と胡桃は兄の横顔を注視した。ひそめられた眉が不機嫌さを表している。珍しいこともあるものだ。常に小憎たらしいほど落ち着いている兄が何だかイライラしている。
「さっきのことだ。オレのこと分からなかっただろ」
兄がとげを含んだ声で、胡桃の手を取ったときのことを言いだした。胡桃は呆れた。変装した兄が変な行動をしているのである。そんなもの、分かるわけがない。
「お兄ちゃん、何怒ってんの？」

「オレが？」
胡桃は立ち止まると、つないだ手を振りほどいた。怒りの原因は分からないが、それが何であるにせよ、兄のご機嫌を取り結ぶ殊勝さを持たない胡桃としては、是非もない。家に帰るのみである。
ターンしようとした胡桃の手が素早く取られた。
「お兄ちゃん、イタイ」
握られた手に込められた力が緩んだ。胡桃が手を取られたままじっと兄を見ていると、彼は小さく肩を下げた。
「お前に怒ってるわけじゃない」
だとしても、苛々を振りまく人間の相手などしたくない。今すぐ機嫌を直さないと帰る旨、胡桃が決然とした声を出すと、兄は大きく息をついて気を取り直した。
「分かったよ、今のはオレが悪かった」
そう言って歩きだす兄の手に引かれた胡桃が、どこに行くつもりなのか、尋ねると、
「イズミから、お前の好きな所に行くように言われてる」
素敵な答えが返ってきた。
「イズミちゃんっていい人だね」
「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」
「お兄ちゃんには勿体ない」
兄は泉の価値について議論をする気はないようだった。行きたいところを訊かれて、どこにしようかと胡桃が思案を巡らせ始めた所で、休日の人ごみに流される格好で、二人は駅前広場を出た。

その21

手を引かれるようにして歩いていると、知らず、昔のことを思い出した。

保育園や、小学校の低学年の頃だ。園や学校への行き帰り、兄はいつも胡桃（クルミ）の手を引いてくれていた。考えてみれば凄いことである。なにせ胡桃はすぐ下の弟にそんなことをしてやった覚えがない。弟もそして妹もやはり兄に手を引かれて育った。

その手の優しさから離れるようにしたのは胡桃の方だった。小学二年生の頃か。いつも兄に手を引かれていることを友達にからかわれて恥ずかしくなったのである。

「今日からひとりで学校行く！」

朝日の降る玄関先で高らかに宣言したときのことをまだ覚えている。本当は兄と一緒に登下校することは一日の楽しみの一つだった。隣を兄が歩いていると、まるで守られているようで安心できた。そんな兄との決別を宣言したときに、自分がちょっと涙目だったことさえ胡桃は思い出した。

――あのときに一つ大人になったんだわ。

胡桃はしみじみと昔を懐かしんだ。

「それで？　どこに行くんだ？」

兄の言葉に我に返った胡桃は、とりあえず歩行者専用になっている街路へ折れた。両脇にさまざまな店舗が並んでおり、より取り見取りである。ゆっくりと歩きながら、どの店に誘われたものだろうか、あっちにふらりこっちにふらりとフラフラしていると、手でつながっている兄も引っ付いてくるので非常にうっとうしい。

「あのさ、もういいんじゃないの、手？」

胡桃が立ち止まって言ったが、兄は首を横に振った。

「今日は一日この状態だ」

「え？　何で？」

びっくりした胡桃が、いったい何の罰ゲームなのか問い質すと、兄は、
「さっきお前の手を取ったときにお前がオレのことがすぐに分かるかどうかで泉（イズミ）と賭けをしたんだ。オレはすぐに分かる方に賭けた。負けたオレは一日お前と手をつないでいなければならない、ということだ」
と答えて、思わずつきそうになるため息を、妹の手前、押しとどめるようにした。兄がさっき不機嫌だった理由はこれだったのかと思えば、失礼な話である。こっちだってもう手を引かれるような年ではないのだ。
「ちなみにイズミちゃんは何を賭けたの？」
「女のプライド、だそうだ」
「……お兄ちゃん」
「何だよ？」
「バカじゃないの」
苦い顔をする兄。この一事を以ってしても彼がいわゆる「尻に敷かれて」いる状態だということが分かる。胡桃は泉に師事することに決めた。男子を手玉に取るすべを是非伝授してもらわねばならぬ。

「でも、その賭けに勝って、イズミちゃんに何の得があるんだろ？」
まさか胡桃に兄の手を取らせ、昔を思い出させるためにした訳でもあるまい。何とはなしにつないでいる方の手をぶらぶらさせると、兄は瞳に迷惑そうな色を浮かべたあと、考えたくもない、とこぼした。さすが一年の付き合い。兄には何か考えられるところがあるのだろう。先ほど機嫌が悪かった理由はそっちの方なのだろうか。
「お兄ちゃん、お金持ってるの？」
デートの時は女の子はビタ一文払わなくて良い、という巷間に流布する噂を鵜呑みにしている胡桃は、淑女のたしなみとして一応財布は持っているにせよ、その封印を解く気は全くなかった。
「お前のカレシは幸せだな。デート中にまず金の話か？」と兄。

セリフは嫌味っぽいが特に気分を害した風でもない。
胡桃は、兄がせっせとお金を貯めていることを思い出した。毎月のお小遣いやお年玉はほとんど全部貯金しているのである。庭付き一戸建てでも買うつもりか、とからかっていた胡桃だったが、そうではなかったことがたった今判明した。
兄はカワイイ妹に、貢ぐ……もといプレゼントするためにお金をセーブしていたのだ！
にたにたした胡桃は、兄から気持ち悪げに見られていることにも構わず、その手をぐいっと引いた。
二人の行く先に、眩しい昼の日を浴びるオープンカフェが広がっていた。

その22

日が当たってぽかぽかしたオープンスペースに陣取ると、胡桃(クルミ)はメニューの中からアイスカフェオレと抹茶のケーキを選び出した。兄にも同じものを注文してやる。制服姿のうら若きウエイトレスが退くと、椅子の上で気取って足など組んでみた。良い気分。一度入ってみたかった店なのだが他店よりちょっと割高なのでこれまで敬遠していたのである。

――これで相手が小太郎(コタロウ)くんなら言うことないんだけどなあ。

恋する乙女として反射的にそう考えずにいられない胡桃だったが、テーブルを挟んで真向かいに座っている兄を見ると、胸がまたうるさく鳴ってきた。まるでカレシといるときのよう。声を出さないと、本当に全くの別人である。胡桃は改めて泉(イズミ)の手並みに感心した。今度、自分もコーディネートしてもらおう。

「何見てる？」

じろじろ見すぎたようである。兄がちょっとうっとうしそうな声を出した。まさか見惚れていたとも言えない胡桃は、別に、と素っ気なく返して話題を変えた。

「そう言えばさ、お兄ちゃん、今日は部活休みなの？」

「いや、休んだんだ」

「え、何で？」

「何でって、お前に付き合うためだろ」

兄は呆れたような声を出した。何でも、胡桃が深刻な悩みを抱えておりそれを解消するためには一日胡桃に付き合う必要がある、という類のことを泉から吹き込まれたらしい。当然のことではあるが、具体的に何を悩んでいるのかということは、泉からは聞かなかったそうだ。

「でも、そんなに深刻でもなさそうだな」

確かめるような目を向けてくる兄に、胡桃は、彼女の小さな、い

や、これから大きくなる予定の胸には地球規模の悩みが秘められているのだ、と厳かに告げた。
「うさんくさいな」
「ソンナコトナイヨ」
兄がため息をついたとき、お待ちかねのスイーツが到着した。それからしばらくの間テーブルの上には、甘いモノ好き少女の、「美味しい、幸せ」という感動の声と、「苦手だったら、残してもいいよ」という兄へのいたわりの声しか響かなかった。
ケーキを平らげて満足した胡桃が、アイスカフェオレをストローで啜っていると、何やら周囲からヒソヒソと囁き声がする。周りの席についているのは、女子高生や女子大生などのちょっと年上のお姉さまばかりである。視線がこちらを向いていて、よくよく耳を澄ましてみると、「あの子カワイイね」に類するルックスをほめそやす感嘆の言葉だった。
胡桃も自分の外見に自信が無い訳ではないが、それにしたって、お姉さま方から熱い眼差しを受けるほどのレベルでないことは分かっている。彼女たちを、今日この時間にこのカフェに来てちょっと得した気分、にさせているのは紙ナプキンで口元を拭っている兄だった。
「出るか」
兄が席を立つと、周りから名残惜しそうな吐息が漏れた。会計を済ませて戻って来た兄が、その手を差し出して来たので、胡桃はぎょっとした。きょろきょろと辺りを見回してみたが、不審な人物は目に映らない。
「イズミちゃん、どこに隠れてるの？」
「何のことだ？」
「イズミちゃんが見張ってるんでしょ？」
帰ったはずの泉がどこからかこちらを監視していて、カレシとその妹が本当に一日仲良く手をつないでいるかどうか確かめている。だから兄はカノジョの手前その手を差し出して来たのだ、と思った

胡桃だったが、兄からは、そんなアホなこととしてるわけないだろ、と簡単に退けられた。
しかし、そうすると、現在胡桃に向かって突き出されている手には何の意味があるのかということになるが、
「約束は約束だからな」
という、くだらない賭けに負けた責任をあくまで取ろうとする兄の律儀さがその原因だった。
胡桃の躊躇は一瞬だった。
彼女は兄の手を取ると、周囲の羨望の眼差しをまとって、街路へと出た。

その23

眩しい日の光がみずみずしい新緑を輝かせている。
街路を歩く人々は一様に楽しげである。
光と笑顔で明るい空気の中、兄と手をつないで歩く胡桃（クルミ）の足取りは軽やかだった。
胡桃は案外、兄と一緒に歩くこと、しかも手をつないで歩くことに嫌悪感を抱いていないことに気がついた。
一体、これはどういうことであろうか。
ほんの一時間前の胡桃が今の彼女の体たらくを見たら、怒り心頭に発し、あまつさえ手まで上げるに違いない。
「その年でお兄ちゃんとお手てつないでルンルンなんて、恥を知れっ！」
罵声とともに振り下ろされる平手を、しかし、余裕を持ってかわす自信が今の胡桃にはある。
「よーく考えてみなさい、おバカさん」
一時間前の未熟な胡桃に、一時間後の成熟した胡桃はなだめるように言うことができる。
「今手をつないでいるのは、兄にして兄にあらず」と。
今の兄は魔女によって姿を変えられた別人である。別人なんだから手をつないでも大丈夫。時めいちゃってもオーライ！
「バカはあんたよ！　何言ってるの？　別人なんかじゃないわ。格好が違うだけで、お兄ちゃんはお兄ちゃんでしょ。それに時めくってマズすぎでしょ。本当のブラコンになりたいの？　そんなにネコ耳つけたいの？」
胡桃は、一時間前の自分を憐れんだ。この頃の自分はなんと幼い小娘であったことだろう。何も分からず、むやみに己の性癖を恐れ、兄を憎み、カレシに罪悪感を持っていた。それだけ純粋だったのだ。しかし、人はいつまでも子どもではいられない。また一つ大人にな

るときが来たのである。
「何が大人よ？　抹茶ケーキにつられただけでしょ？　お兄ちゃんがちょっと注目されてるから、一緒にいて気分いいだけでしょ？」
子どもと話し合うには寛容の精神が重要である。胡桃は大らかな心で、過ぎ去りし時の自分自身から発せられる口汚い罵り声を聞いていた。
「この真性ブラコン女！」
真性ブラコンとは「お兄ちゃんラブ」を前面に押し出すことを言う。
ちょっと前の自分なら甚大な精神的ダメージを受けていたはずのこの言葉も、今の胡桃には何らの効果もなかった。
「真性ブラコンね……それも良し！」
はっきりとした言葉に唖然とした若き胡桃に向かって、年長けた胡桃は穏やかに言った。
「よくお聞きなさい、心青き者よ。己の為になるのであれば甘んじてブラコンの汚名を着なくてはならない。そんな時もあるのです。今の兄はいつもとは別人。これを利用しない手はないでしょう」
「どういうこと？」
「間近に迫っているはずのカレシとの初デート。そこで粗相をしないように兄でシミュレーションしておくのです」
胡桃（過去）はイマイチ納得の行かない顔をしている。胡桃（今）はやれやれと首を横に振った。同じ自分ながらさっしの悪いことこの上ない。仕方なく、カコ胡桃の目を街路沿いに並ぶオシャレなお店たちに向けさせ、なおかつ兄の財布にはまだ余力があるはずだということを耳打ちすると、そこでようやく納得した彼女はニヤリとした笑みを浮かべた。
つまりはそういうことであった。
胡桃は目前の利益のためであれば、己の好き嫌いを封じ込めることができる鉄の女なのだ！
「大丈夫か？」

兄の心配そうな声に、胡桃は夢想から醒めた。
「え、大丈夫かって、何が？」
「さっきから全然話さないだろ」
「やー、ちょっと考えごと」
「……例の悩みか？」
胡桃は我が兄について改めて考えてみた。
カノジョである泉（イズミ）から何を吹きこまれたにせよ、今日の「デート」に付き合ってくれるということからは彼の優しさを感じなければならないだろう。最後の大会前の大事な時期にも関わらず部活を休み、髪を切ってピエロとなり、妹と一日中ずっと手をつなぎ、ケーキをご馳走してくれる。
そんな兄である。
「ブラコンよ、どーんと来い！」
という気になっても誰が胡桃を責められよう。
「誰も責められるはずがない」
胡桃は力強く断定する。およそ一週間ほどぐじぐじと悩んでいたことだったが、何のことはないことであった。お兄ちゃん好き。上等ではないか。こんな兄なら、好きだと言っても、白い目で見られることはあるまい。まあ、あえて公言する必要はないけれども。
胡桃は改めて、兄の真価に気づかせてくれた泉に感謝の念を捧げた。
――ありがとう、イズミちゃん。クルミは胸を張って真性ブラコンになります。
いや、このブラコンという言葉はよろしくない。兄を慕っているだけのことである。ケーキとアイスカフェオレをご馳走してくれて、なおかつ、
「服、買ってくれるんでしょ？」
という要求に不承不承ながらうなずいてくれる兄を。

その２４

胡桃（クルミ）は街路沿いにある衣料品を扱うアウトレットストアに入った。広々とした店内は、若い客でごった返している。胡桃は兄の手を放すと、ワンピースが整列したハンガーラックに突入した。しばらくして、彼女の厳しい審美眼に耐えたのは、花柄フリルのワンピースだった。かわいいだけではなく、バスト部分がふんわりと見えるという機能性に優れたものである。

試着した胡桃はそのキュートさと値段で兄を悩殺した。

「お前の抱えてる悩みは、そういうもので慰められるものなんだろうな？」

「もちろん」

胡桃が力いっぱいうなずくと、兄は諦めたようだった。

「良くお似合いですよ」

誰にでもそう言うに違いないものの、女性店員ににこやかに言われてちょっといい気分の胡桃。

「かっこいいカレシさんね」

耳元で小声で囁かれ、胡桃は更に気分が良くなった。兄はここでも衆目を集めているようで、カレシと一緒に来ている女子中高生の目さえ引いていた。カップルの平和をかき乱すほどの魅力のある男子。そういう男の子を――それが例え兄だとしても――引きつれているという事実は、胡桃の価値を押し上げているに違いない。

――わらわは満足じゃ。

胡桃は、わざと店の外に出る前に手を差し出した。それを兄が取ると、周囲から嫉妬まじりの目が向けられる。ちょっとした優越感。これは愉快！

「それで？　これからどうする？」

「ボーリング！」

カラオケと迷ったが、小太郎（コタロウ）の歌ならともかく兄の歌など聞いて

も仕方ないし、暗い所で兄妹でいてもさらにどうしようもない。
兄に買い物袋を下げさせて、歩行者専用になっている街路から出た胡桃は、大通り沿いをしばらく歩いた。手はつないだままである。さんざん悩んだブラコンに一応のけりをつけて、服まで買ってもらい、これからボーリング。胡桃の気分は実に晴れやかだった。
――ブラコンもいいものである。
胡桃は幸せをおすそ分けするために、道行く人に微笑みを振りまいた。美少女の笑顔で幸せになるが良い。
「気は晴れたのか？」
「アイム・ファイン」
妹の心からの答えに、兄はそのクールな瞳を少し緩ませた。ただ、それは一瞬だけのことで、胡桃に向けた目はすぐに元の平静な色に戻った。おそらく照れているのだ。その仕種をちょっとかわいいと思ってしまうあたり、大分キテいるかもしれないが、女は度胸である。毒を食らわば皿まで。胡桃は親愛の念を込めて、握っている兄の手に力を込めた。
そこでふと思いついたことがある。
――お兄ちゃんは恥ずかしくないのかな？
いくら泉との賭け（？）に敗れたからといって、昼日中からいい年をした妹と手をつないで街中を歩き、もし友達から見られたりしたら、一生の恥になるのではないだろうか。いや、無論、カワユイ妹とデートできる幸運を妬まれる可能性の方が大であるに違いないが、兄の気持ちとしてはどうなのだろう。
「別に。お前と手をつないで歩くのは大したことじゃない」
兄は平然とした顔で言った。何だか引っかかる言い方だったが、そっちを突っ込む前に、胡桃は大変なことに気がついた。今さらではあるが、
――こんなトコ、誰かに見られたら……。
ということに思い至ったのである。
これは兄どころの話ではない。

自分がブラコンだということは克服できたとしても、それを人に知られるのはまた別な話である。数を唯一至上のものとするこの民主主義社会において、残念なことではあるが、マイノリティは常に迫害の危険を持つ。胡桃はゾッとした。キョロキョロと辺りを見回して、秘密警察の手の者がいないかどうか目を皿のようにして確認した。しかし、その心配は一瞬で雲散することになった。妹でさえ、今手をつないでいる少年が兄だと分からなかったのである。まして、他の誰にも彼が兄だとは分からないだろう。

ほっと胸をなでおろした胡桃は、兄を隣にして、意気揚々とボーリング場への道を歩いた。

その25

2ゲーム分、兄とボーリングを行った胡桃(クルミ)は、レーン上のピンを倒すとともに、「ブラコン」という強敵もまた完全に打ち倒していた。アウトレットストアから出た辺りでほとんどへろへろだった彼女の好敵手は、ボーリングが終わる時点で全く力を失っていた。胡桃は倒れ伏す「ブラコン」に手を差し伸べた。共存の道を選んだのである。

この共存には利益が大きい。まずはデート代が無料になること。次に、どこに行っても注目を浴びることができること。

――人間、勇気を持つことが大事だわ。

ボーリング場を出て、ゆるくなってきた日のもと、家路を取りながら胡桃は一つ悟った。問題は直視することである。問題から逃げださず、がっぷり四つに組めば、案外、相手の力が大したものでないことが分かる。もちろん、今回の問題の解決ができたのは二人の支援者の助けがあったからであって、自分一人の手柄にする気など毛頭ない。

「今日はありがとう、お兄ちゃん」

家が近づいてきたがまだ手はつながれている。胡桃はつないだ手を前後に勢いよくぶらぶらさせて感謝を表現した。兄は迷惑そうな顔を作ったが、手は離さなかった。

「何か悩んでることがあるならいつでも言えよ」

そうぶっきらぼうに言って妹の手を少し強く握ってくる兄に、胡桃は極上の笑みを与えた。

数日ぶりにスッキリとした気分になった胡桃が家に戻ると、彼女と対照的に絶望のどん底にいるかのような弟の姿があった。ダイニングテーブルの一角にかがめた背が闇を集めている。胡桃が声をかけると、弟は顔をうつむかせたまま、

「……また負けたよ、姉ちゃん」

弱い声を出した。
どうやら今日のカードの大会で王になることはできなかったようである。
胡桃はすかさず弟の背をバンと叩いた。
「くよくよすんな、ボウズ。勝つまでやりゃいいじゃん」
弟は怪訝そうに顔を上げたが、やはりうなだれて、
「おれじゃ、一生、氷の女王には勝てないんだよ」
ため息をつきつき言った。「氷の女王」とは、この町のカード使い――弟の言葉を使えば「サモナー」――の頂点に君臨する小学生少女の二つ名である。弟は彼女に過去二度も優勝を阻まれているらしい。雪のような白髪と石膏のごとき肌を持ち、戦う前から凄艶な美貌で相手を威圧、ひとたび戦いを始めれば計算された戦術で敵をけちょんけちょんにやっつけ、戦闘後には敗者を一顧だにしないようなクールな少女。氷の女王という呼称から、胡桃は勝手にそんな風に想像していた。そうして、「そんな小学生いたらコワイ」とも思っていたし、「ていうか、二つ名って何それ」とも思っていた。
胡桃は弟の頭を撫で、
「諦めなければ夢はかなうよ、ボーイ」
優しい言葉をかけた。弟の肩が小刻みに震え始めた。姉の思いやりに感動したのだろうと思っていたところ、弟は上げた顔をひきつらせて、「いつもの姉ちゃんじゃない、なんかあったの？」などと失礼なことを言ってきたので、胡桃はいつも通り弟の頭をひっぱたくことにした。
その後、同室の妹に今日買ってもらった洋服を見せつけて半ば強制的に「かわいい」と言わせ、食卓では弟のおかずを奪い、この頃会話のなかった父の肩なぞ揉んで、意図せずお小遣いをもらえそうになったところ、母にたしなめられて泣く泣く諦めた振りをしたりした。
「お兄ちゃん、たまには一緒にお風呂でも入ろうよ、昔みたいにさ」
なんていう危うい冗談を言って兄をからかうことも忘れない。家

族に愛嬌を振りまいた胡桃が非常に良い気分で眠りに落ちると、いつか見た王国へ再び足を踏み入れていた。
「たのもー！」
王国の門に向かって道場破りのような声をかける胡桃に、メイド服を着た門番の少女はギョッとしたような顔をした。
「……どのような御用でしょうか？」
「わたしも仲間にいーれて！」
満面の笑みを見せる胡桃に、少女は申し訳ありませんと言って、頭を下げた。
「え？　何で？」
「お兄ちゃんが好きな女の子しか入城は許可されません」
「なら大丈夫じゃん、わたし」
「失礼いたしました。お兄ちゃんが『純粋に』好きな女の子と言い換えます」
胡桃はムッとした。
「わたしも純粋に好きだけど、お兄ちゃんのこと」
「あなたには邪心が見えます」
「失礼ね。百パーセント純心でできている乙女に向かって」
「お帰り下さい」
胡桃は構わず、城門に手をかけると力を入れて押し出した。
「ああっ！　何をなさるのですかっ！」
「うるさいっ！　わたしを中に入れなさいっ。知ってるのよ、この中には、可愛いワンピースとか抹茶ケーキがあるってこと。もっとヨコセ！」
「それが邪心だと言うのです。ここは兄にタカるための方法を考える場所ではありません」
胡桃は、取りすがってくる少女をこうるさげに振り払った。
地に倒れた彼女は、メイド服の下をごそごそすると、どこに隠してあったのか大きな法螺貝を取り出した。ぶおおーんという鈍い音が響き、次の瞬間、地から無数の影が湧き出て来た。みな胡桃と同

じくらいの年の少女で、そろってミニミニフリフリのスカートを身につけている。
「あのインチキブラコン女を捕らえよっ！」
法螺貝から唇を離した門番の少女が命を下すと、数十人はいそうな少女の大軍団が一斉に襲いかかってきた。しかし、胡桃は慌てない。
「めくられたいヤツからかかってきな」
不敵な笑みを作ると、取り押さえようとしてくる少女たちの猛攻をひらりひらりとかわし、かわしざまに、ミニフリスカートを片っ端からめくっていった。はらりとあられもなく下着が見えて、「きゃあっ」と小さく悲鳴を上げざましゃがみ込む少女たち。白い下着にはクマさんの顔がプリントされている。それを見た胡桃は、
「ふはははは、プリントショーツなんぞ片腹痛いわっ！　本気でお兄ちゃんを落としたかったら、黒のTバックでも履いてみな！」
高らかな声を上げた。
「な、なんと、破廉恥（はれんち）な。しかし、強い……」
累々と座り込む少女たちの間で、立ち上がった門番の少女は唖然とした声を漏らした。
「当然でしょ。わたしはお兄ちゃんに愛されてるんだから」
自信満々に腕を組む胡桃。それを聞いて絶句する少女を尻目に、再び門へと向かった。もう止められることはなかった。ブラコンキングダムは胡桃の手に落ちたのだ。ゆっくりと門を押し開けると、その先から光が差し、胡桃の前に新しい朝が待っていた。

その26

母の苛立たしげな声より、妹の面倒くさそうな声より、さらには携帯のアラーム音よりも早く、胡桃(クルミ)は目を覚ました。うす白い光の中に、窓外からチュンチュンという雀の声が響いている。むっくりと体を起こした胡桃は部屋を出て洗面を済ませたのち、ダイニングへと向かった。

「ど、どうしたの、クルミ？」

いつも家族の中で一番遅く起きてくる……というか起こされないと起きようともしない子が自分の力で、かつ最も早く起きて来たので、母はびっくりしたような顔をした。

「お母様、クルミは生まれ変わりました」

朝食を作る手を休めて気遣わしげに近寄ってくる母に、胡桃は手を突き出すと、その手で「ストップ」という格好を取った。

「熱はありません。どうぞご心配なく」

一層母を心配させることを気にかけもせず、胡桃は悠々と朝の時間を過ごした。いつもよりゆっくりと朝食を取り、いつもよりゆっくり身支度を整え、しかも、いつもより早く家を出る。パーフェクトである。唯一にして最大の欠点「ブラコン」を克服した胡桃にもはや怖いモノはない。全世界は我が掌中にあり！

――世界は回る、わたしを中心に！

胡桃は自信満々に通学路を歩いた。

美しい朝だった。見上げた空は透き通るような青一色である。惜しげなく降り注ぐ光があらゆるものを優しく輝かせていた。

「どうやらうまくいったみたいね」

学校への途上に現れた一つの影から、発せられる明るい声。

「泉(イズミ)ちゃんっ！」

胡桃は声の主にがばっと抱きついた。

数年ぶりに会った友人同士のような風情でなされる熱烈なハグは、

道行く人の視線を集めていたが、胡桃は気にしなかった。しかし、相手はそうでもないようで、十秒も経たないうちに、もう離れてくれという意を込めて、ぽんぽんと肩を叩かれたので、胡桃は名残惜しげに身を離した。

「詳しく話して」

ふっくらとした笑顔を見せる泉に促されるまま、学校までの道すがら、胡桃はウレシハズカシ兄妹デート初体験の顛末を一部始終話して聞かせた。泉からは昨夜メールが来ており、今朝は途中で待ち合わせる約束をしていたのである。

話し終わった胡桃は、改めて泉に感謝の言葉を述べた。歩きながらペコリと頭を下げる。すると、

「そんなに感謝されると言いにくいんだけどね、実を言うと、今回のことではわたしの方が感謝したいくらいなの」

と分からない言葉が返って来た。

「クルミちゃんのことを利用させてもらったの」

天使のような微笑みを見せながら剣呑なことを言い出す泉の言葉を更に待つと、

「あのね、春樹（ハルキ）って、人前でわたしと手をつないでくれないのよ。だから、まずクルミちゃんと手をつながせてね、そのあと、『妹とは手をつなげるのにどうしてカノジョと手をつなげないの？　もしかしてハルキってシスコン？』みたいな感じで攻めようかなと思って」

と、小悪魔的なセリフが続けられた。

なるほど、昨日の「デート」の初めのときに、兄がどこか機嫌が悪かった理由がこれで分かった。おそらくこの事態を予測していたのだろう。そう言えば、兄は今朝、随分早く学校に出かけていた。部活の朝練があるのかもしれないが、

「わたしに会わないようにするためよ。でもいつまで逃げ切れるかな」

そう泉は言って、フフフ、とにわかに妖艶な笑みをつくった。

胡桃は兄の幸運を祈った。祈りつつも、
「今日中に捕まっちゃうのにわたし賭ける。『抹茶オレ』１パック！」
それが天上に届かなかったときのことも抜け目なく考えておく。
胡桃は両手を広げると初夏の空気を胸一杯に吸い込んだ。
前途は洋々としている。もはや、胡桃と愛しのカレとのケーキよりも甘いラブラブライフを遮るものは何もないのだ。
――小太郎（コタロウ）様、今からあなたのクルミがおそばに参ります。
瞳に星を煌めかせ、挙げ句スキップさえしそうなほど浮かれていた胡桃は、しかし気がつかなかった。
ゴロゴロという不気味な雷鳴がどこからともなく響き始めているということに。

その27

穏やかな青空が一天にわかにかき曇ったのは、二時限目の休み時間のことだった。

「ねえ、胡桃（クルミ）。昨日、誰と歩いてたの？」

おそるおそる胡桃が顔を上げると、ツインテールの少女が、瞳をきらきら、いやもとい、ギラギラさせているのが見えた。彼女は胡桃の机に両手をつくと、かわいらしく作った笑顔で、

「なんかカッコいい人と歩いてたよね、あれ、だあれ？」

質問を重ねた。

瞬間、胡桃は、その男子受けを狙ったあざといツインテールを思いきり引っ張ってやりたい衝動に駆られた。男子にされると甘い鼻声で「いや～ん」とか言っているのである。女子に唐突にされたときにまでそれを演じられれば大したものだ。

胡桃は努めて平静を装うと、何の事を言ってるの、とにこやかに訊き返した。

「え、あれ、クルミじゃなかったのかなあ。『イースト・ボウル』の近くでさ、クルミが誰かと一緒に歩いてるのを見かけた気がするんだけど」

「イースト・ボウル」とは昨日兄と入ったボウリング場である。胡桃は心の中で舌打ちした。昨日の兄とのデート風景を見られていたのである。しかも一緒に歩いていただけならまだしも昨日はずっと手をつないでいたのだった。これは面倒なことになってきた。ブラコンは胡桃自身の中では乗り越えられたものの、だからといって、それをクラスメートに知らしめる気などさらさらない。世間のブラコンへの風当たりは厳しいのである。できるだけ知られないままにしておくのが吉。

とはいえ、兄だということを言えないとすると、これはこれで困った事態に陥る。カレシ持ちの女の子が他の男と手をつないで仲良

さげにしていた。その一事から導かれる結論は「二股」である。胡桃は己の不明を恥じた。昨日のデート風景は例え誰かに見られていたとしても、兄だと気がつかれないから問題は無いはずだと高をくくっていたのである。しかし、兄だと気がつかれないからこそ現れる問題もある。そこまでは頭が回らなかった。

ツインテール娘の瞳に邪悪な笑みが浮かんでいるのに、胡桃は気がついた。

――くっ、この子、まさか……。

小太郎（コタロウ）との仲を裂こうとしている？　そう胡桃が疑ったとしてもあながち被害妄想ではないだろう。胡桃と小太郎が付き合っていることは彼女も知っているはずである。とすれば、胡桃が他の男と歩いていたというのは繊細微妙な話だということになり、普通ならばひと気のないところで胡桃にだけ事情を聞くなどの心づかいがあってしかるべきだろう。それをこのような公衆の面前で、少し離れた席にいる小太郎に丸聞こえになるくらいの声量で言うのだから、悪意を疑うべきだろう。

そうしてそれはツインテール娘だけではなかった。

胡桃の心の目に、教室内にいる他の女の子たちの瞳が緑色に輝き始めているのが見て取れた。

そう、ここは教室という名の魔窟であった。緑色の目をした怪物がさ迷い歩く闇の空間だったのだ。

胡桃の身が恐怖に震えた。油断したが最後、カッコイイ男子はからめとられ、カレシ持ちの女子は別れさせられる。

胡桃は小太郎の方を見た。すると、こちらの視線に気がついた様子で小太郎は手を振ってきてくれた。

胸に温かいものを感じた胡桃は勇気を奮い起こした。今や彼女の細い肩には、ひとり自分のものだけではなく、小太郎の命もかかっているのである。小太郎を怪物の餌食にすることはできない。

――彼はわたしが守る！

胡桃は素知らぬ風で三時限目の教科の準備をしながら、人違いな

んじゃないの、と白を切った。
「え？　あれってクルミじゃなかったのかなあ」
「見間違いなんじゃないかな」
「ふーん。あのだっさいグレーのワンピは絶対にクルミだと思ったんだけどなあ」
　机の上に教科書を出した手がぴくりと震えた。昨日身につけていた服はお気に入りの一着だったのである。思わずキリリと眉を上げた胡桃だったが、クラスメートのしたり顔を見て、無理無理笑顔を作った。
「どうかしたの、クルミ？」
「ほ、ほほほ。何でもございませんことよ」
　胡桃が奥歯を噛みしめながら侮辱に耐えていると、三時限目の始まりを告げる予鈴が響き始めた。

その28

胡桃（クルミ）がカッコイイ男の子と親しげに手をつなぎながら歩いていたというニュースは、どうやら二年生中のクラスに知れ渡っているようだった。昼休みに、別のクラスにいる友人たちがこぞって胡桃に事情を聞きに来たのである。胡桃は、男子生徒と談笑している小太郎（コタロウ）の方をちらりと窺いながら、引きつった笑みで彼女たちを迎え、そして早々に追い返した。

昨日のことが今日にはもう知られている。

――これは、絶対に「裏生徒会」の仕業だわ。

胡桃は中庭にあるベンチに座り、頭を抱えながら身もだえた。

裏生徒会――

それは学校の闇に潜む秘密組織である。彼らの活動目的は、生徒の恋愛に関する情報を収集し、それを全校に流すこと。誰と誰が付き合ったとか、誰が誰のことを好きらしいとか、誰と誰が別れそうとか。そういった恋に関する情報を提供することによって、中学校生活を豊かにすることが彼らの目的である。

聞く所によると、秘密組織の長、「生徒会長」を務めるのは絶世の美少女らしい。とっても中学生には思えない抜群のプロポーションを持ち、腰まで流れる豊かな黒髪は校則違反も何のその、その長さにも関わらず毛先まで手入れが行き届いているという。知性と教養に溢れ、スポーツも万能な彼女だが、たまに何にもない所で転んだりなどする。その落差にやられた男子は数知れない。カリスマ的なリーダーシップを発揮し、組織に絶大な影響力を持っている。

「副生徒会長」は、オレ様的性格の男子である。大会社の社長の御曹司であり、甘やかされて育ったせいで人情の機微にうとい。整った顔立ちをしているが、鋭い目に性格の悪さがにじみ出ている。生徒会長よりも偉そうに振舞い、会長の座と会長自身を狙っていると公言して憚らない。会長に向かって、会う度に、「お前はオレの

ものだ」的なことを発言して、毎回、会長の右回し蹴りを食らっている。食らっていてちょっと嬉しそうな顔をしている辺りに彼の性癖が見えかくれする。

「書記」の女の子は、おかっぱ頭がトレードマークのちびっ子。寡黙な彼女は、授業で当てられた時などどうしても必要な時以外は何も話さない。人とのコミュニケーション手段は筆談か手話。背の低さゆえ、黒板に議事を書かなければならない時は踏み台を使う。その年で既に、自分に酔っている高齢の国語教師のような達筆な字を書き、しばしば読めない。しかし、文句を言うと、チョークが飛び、次に黒板消しが投げられ、ひどい時には踏み台が宙を舞うので、恐れて誰も何も言わなくなっている。

「会計」の男子は、クオーターであるという噂。ただし、その特徴を全く活かさず、しばしばインチキくさい古語を使う。陽気な性格で、ともすればアホらしい空気になりがちな（裏）生徒会室をいっそうアホらしくすることに長けている。秀麗な面は、長い茶髪をポニーテールなどにすると、女の子と間違えられるほどである。事実、校外で私服でいるとき何度も男からナンパされているらしい。コンビニで買い物したものならその合計金額を暗算できるという微妙な特技を持つ。

彼らを筆頭として多くの会員を持つ裏生徒会は、中学校に隠然とした勢力を誇っているのだ！

「二年一組の福田胡桃が見知らぬ男子と手をつなぎながら歩いていたところが目撃されました」

「ほお、一週間前に聞いた名だ。確か、彼女は同じクラスの男子と付き合い始めたのではないか」

「はい、会長」

「嘆かわしいことだな。もう別の男に手を出すとは」

「いかがいたしますか？」

「各クラスの会員に目撃情報を流すように伝えよ。また、その男子の特定も急げ」

残像を残し忍者のように一斉に散る団員たち。
昨夜の話である。
「ちくしょー。『裏生徒会』め！　こんなに噂にしてくれるなんて、いったいわたしはどうすれば？」
「とりあえず、病院に行けば。なによ、『裏生徒会』って」
隣に座って足をぶらぶらさせながら気楽な声を上げた少女に、胡桃は暗い目を向けた。友人の実夏（ミカ）である。彼女も胡桃の噂の件につき事情を聞きに来た一人だった。親友にだけは本当のことを話そうと、中庭に連れて来たのが三分前のこと。
「そんな恨めしそうな目で見たって、自業自得でしょ。まさかクルミが二股かけるなんてなあ。カレシができて、次に二股。ついこの前までは同じ立場だったのにさ。あんまりわたしを置いてかないでよね」
胡桃は噂の本当の所を、実夏に耳打ちした。二股などという爛（ただ）れた行為をしているなどと親友に思われては沽券に関わる。
ふむふむ、とうなずいた彼女は、小太郎には弁明したのか、と訊いてきた。
「しなきゃダメかな？」
「さあ、わたしはカレシいたことないからよく分かんない」
適当極まりないことを言う親友の横で、胡桃はどうしようか首を捻った。小太郎の耳にも噂は届いているだろう。話さなければ小太郎の心に疑念を生むことは確実である。しかし、話せばブラコン女という称号を得る。にっちもさっちもいかなくなった胡桃は、最後の手段をとることにした。
「様子を見ることにする！」

その29

日和見(ひよりみ)主義。

それは、有利な方につこうとして、事態のなりゆきに対し傍観者的態度を取ることを指す。簡単に言えば、様子を見て勝てそうな方につく、という一面でまことに卑怯な、しかし見方によっては世間一般で通用するごくごく普通の考え方である。

今ここに一人の日和見主義者が誕生した。

彼女は友と別れたのち、予鈴とともに教室に滑り込んだ。授業開始間近にも関わらず、ザワザワしている空気の中、椅子についてグッと拳を握る。状況がどう変化するか、注意深く見守らねばならぬ。一瞬たりとも油断できまいぞ！

五時限目の国語の授業を右から左に聞き流しながら、胡桃(クルミ)はちらちらと小太郎(コタロウ)の方を窺っていた。傍から見ている分には、恋する少女が、その乙女チックハートを抑え切れず、カレシに熱っぽい視線を送っているようにも見えよう。しかし、実態はそんな生易しいものではないのである。小太郎の一挙手一投足から彼の心理を読み、対応を決めなければならないのだ。昨日の兄とのデートの一件を話した方が良いのか、話さない方が良いのか。

――これは心理戦である！

戦いはすぐに終結を見た。

三十代のまだ若い男性教師の視線を巧みに避けながら、じろじろと少し離れた席を見ていると、不意に小太郎の顔が胡桃の方を向いたのである。目が合った彼は、ちょっとびっくりしたような顔をしたあと、ちらっと先生の動向を確認してから、小さく笑って手を振ってきた。

小太郎の笑顔は凶器に等しい。

胡桃の心は四分五裂した。心のカケラを拾い集めた胡桃はリボンに包んで、全てを小太郎に差し出した。完全降伏の証である。そも

そも勝算の無い戦いだった。というか、別に戦ってない。
胡桃が手を振り返そうとした所で、男性教師が黒板から生徒の方へ向き直った。危ういところである。授業を聞かず教師の隙をついて手を振り合うことばかり考えているバカップル。そんな汚名を職員室に響かせるところだった。胡桃はひやっとしたが、一瞬後、
――それも良いかもなあ……。
と翻意した。広く教師一同にまで二人の仲が知られれば、よりオフィシャルなカップルとなる。二年生のカップルと言えば胡桃と小太郎、という感じで二人はどこに行っても注目の的となるだろう。一方で、だからこそ返って教師から注意されるようなことにもなる。不純な交際を疑われた二人の家に学校から連絡が行く。事態を重く見た双方の親が、愛する二人の仲を引き裂こうとする。
――ボクたち、ちょっと距離を置いた方がいいみたいだね、クルミちゃん。
――え……どうして？
――仕方ないよ。これ以上、周りを心配させるわけにいかないから。
――いや！　なんでそんなこと言うの！　コタロウくんはわたしと会えなくて平気なの？
――平気なんかじゃないよ。でも、どうしようもないよ。
――うそ！　コタロウくんはわたしのことなんか何とも思ってないんでしょ。そうよ！　この前のあの、何て言ったっけ、そうそう、麗華さんって人の所にでも行けばいいわ！
――麗華は関係ないだろ。
――関係あるでしょ、コタロウくんのいいなずけなんだから。
――そんなの親が勝手に決めただけだってこの前も言っただろ。ボクが好きなのはクルミちゃんだけだよ。
――え、今、何て……？
――ボクが好きなのはクルミちゃんだけだって、そう言ったんだよ。
――もう一回言って、コタロウくん。
――何度でも言うよ、クルミちゃん。ボクが好きなのは――

「福田！」
一番いい所で空想は終わりを告げた。ハッとした胡桃が前を見ると、教壇に立つ男性教諭の呆れたような顔が見えた。
「聞いてなかったのか？　教科書の５３ページを読んでくれって言ったんだが。それともアレか、大人の言うことを聞きたくない年頃か。よく聞けよ、福田。『人』っていう字はな、人間が立っている姿を横から見た形だ。人と人が支え合っているわけじゃない。オレが何が言いたいか分かるな。人は他人の支えなしで自分の力で立たなければいけないってことだ。大人に文句があるならな、自分で立ってからにしろ。親に食わせてもらっているくせに反抗心なんて百年早い！」
実に感動的な説教を聞きながら、胡桃は教科書を手にし慌てて席を立った。
「待て、福田。教科書読む前に、何か言うことがあるだろ」
現実世界に着地したばかりで動揺していた胡桃は、一言謝ることに思い至らず、
「え、えーと、その不精髭剃った方がいいですよ、先生」
思わず、いつも思っていたことをついぽろりと言ってしまった。教室中からクスクスという失笑が漏れた。そのあと、男性教師のハハハという爽やかな笑い声が胡桃の耳に聞こえて来た。笑いが収まってから残りの授業時間の間、小太郎を見ていられる幸福な時は二度と胡桃に訪れなかった。その時間中、ずっと指され続けることになったからである。

その３０

まったくひどい目に遭った。五時限目の鐘が鳴るまでみっちり三十分の間、胡桃（クルミ）は全然ありがたくないマンツーマン指導を受け続けた。難しい問題を問われては冷や汗をかき、答えられたと思ったら間違えて恥をかく。さらに胡桃だけ特別に漢字を書く宿題を出された。もはやこれはイジメである。

――もしかしたら先生はわたしのこと好きなのかもしれないな。

ある筋の情報によると、男子というのは好きな子をわざといじめてしまうものらしい。無論、立派な不精髭を生やしたミスター・ワイルドは既に男子と称するには年を取り過ぎているが、もし彼が少年の心を失っていなかったとしたら可能性はある。今度、彼が少年誌を読んでいるかどうか確認しようと心に決めつつ、胡桃は六時限目の「音楽」の用意を始めた。

「大丈夫、クルミちゃん？」

リコーダーと教科書だけ持って音楽室に向かうべく廊下に出たところで、隣から声がかけられた。たとえ百人の男子が一斉に話しかけてきたとしても、胡桃にはその声を聞き分ける自信がある。クラスメートに混じって廊下を歩きながら、胡桃は小太郎（コタロウ）に向かって肩を落としてみせた。大げさに憔悴した振りを作った胡桃を見て、小太郎は喉の奥を鳴らした。小さく笑った拍子に、少年のさらりとした黒髪がかすかに揺れて、昼下がりの光が弾けた。胡桃は、小太郎の綺麗な髪に触れたくなる衝動をどうにかこうにか抑えつけつつ、音楽室に到着した。

――言うべきか言わざるべきか、それが問題だわ。

クラスメートが奏でるぴ～ひょろ的な妙なる調べを聞きながら、胡桃は、なお迷っていた。胡桃に対してなされている噂について小太郎に弁明すべきか、否か。

胡桃は頭の中のお花畑で可憐な花を一輪摘んでみた。その花びら

を一枚一枚ちぎり始める。
「言う。言わない。言う。言わない。白状する。隠しておく。ブラコンを男らしくカミングアウトする。秘密は女を綺麗にする……」
胡桃の前に二つの影が現れた。
一つは白衣を身に付けた少女で首から聴診器を下げている。
もう一つは黒のレオタードを身にまといお尻から尻尾を生やした少女だった。
白衣の天使が胡桃に言う。
「今すぐコタロウくんに事情を話しなさい。昨日の相手はお兄ちゃんだと。それが誠実な態度です」
小悪魔が胡桃に囁く。
「つまんないことはやめときな。別にコタロウくんに見られたわけじゃないんだから。噂のままにしておけばいいじゃん」
天使は悪魔に向き直った。
「いけませんよ。カレシには真摯（しんし）な態度で向かうべきです。それに、もしかしたら噂を鵜呑みにしているかもしれないではありませんか」
「真摯も時と場合によるでしょ。それにコタロウくんは噂を信じるようなアホじゃないわ」
「だとしても、念を押しておいた方が良いでしょう」
「あんた、バカ？　藪蛇（やぶへび）って言葉、知らないの？　『昨日一緒に手をつないで歩いていた相手はお兄ちゃんなんです、てへ』なんてこっちから言ってみなさい。手に入るのは、ブラコンの勲章だけよ」
「ブラコンは既に克服したではありませんか。堂々と言えば良いでしょう」
「自分的に克服してもね、相手はひくでしょ」
「そんなことありません。誠実な態度を示せば、二人の絆は強まります」
「脳みその代わりに綿菓子（わたがし）でも詰まってんじゃない、あんたの頭。絆が強まる？　絆はそこで断ち切られるのよ、永遠にね」
「もしそうなったらそれでも良いではありませんか。潔く生きまし

ょう」
「寝言は寝てから言え、このスカタン！　一週間しか続かなかったカップルとして、一年間、クラスのみんなからバカにされてもいいの？」
　白衣の少女の白い額に青筋が立った。
「さっきから大人しくしてればいい気になってさ！　何よ、この露出魔！」
　レオタードの少女は慌てない。ふふん、と笑う余裕さえあった。
「小悪魔だからね」
「何が小悪魔よ！　グロスのＣＭに出てくるモデル気取りか！」
「あんたこそ、何、そのダッサイ白衣。あ、分かった、アレだ。露出する自信がないから全身を隠してるんだ。カワイソー」
　白衣の天使は聴診器を投げ捨てると、小悪魔にくってかかった。応戦する小悪魔。二人は互いの頬をつねりながら花畑の花を踏み散らした。胡桃は秘密の花園を出ることにした。六時限目のチャイムが聞こえてきていた。結局、結論が出なかった胡桃はその後、掃除を適当に済ませ、部活で汗を流した。そうしてとうとう小太郎と一緒に帰る時刻を迎えてしまった。
「なにも話してくれないの？」
　十五分ほど帰り道デートを楽しんで、別れ道でさよならの挨拶を交わした直後のことである。名残惜しい気持ちを抱えながら歩きだそうとした胡桃は、小太郎の澄み切った声に、ぎくりとして立ち止まった。

その31

ギギギと油の切れたブリキのおもちゃよろしくぎこちなく振り返った胡桃(クルミ)。

柔らかなオレンジ色の夕日が地面に少年の影を長く伸ばしている。

「何のこと？」

などと問い返すほどの厚かましさはさすがになかった。また、そんな余裕を与えてもくれなかった。何か言わなくてはならないと思った胡桃が口を開きかけるのを、突き出された小太郎(コタロウ)の手が止めた。

「ボクに先に言わせて。……ボクはクルミちゃんが他の男子と歩いていたなんてことは全然信じてない。クルミちゃんがそんな子のハズないから。でも、そういう噂が流れてるのなら、ボクが信じてるかどうかに関わらず、一言説明してくれるのが誠実な態度なんじゃないかな」

小太郎の口ぶりは落ち着いたものだったが、その落ち着きぶりには余裕がなかった。どうにかこうにか自制の力を働かせて努めて落ち着こうとしているのだ。それが証拠に、いつも柔らかな彼の瞳が今は見る影もないほど険しい。

「今朝、友だちから、昨日クルミちゃんが他の男子と歩いているのを見たって聞いたんだ」

そいつが小太郎を迷わせた元凶である。街に遊びに出る暇があるなら一生懸命部活動に勤(いそ)しめ！　つまらん流言を――ほぼ事実であるが――飛ばしてくれた小太郎の友だちに心の中で罵り声を上げた胡桃だったが、そんな場合でもない。

「クルミちゃんが全然噂について知らなかったなら構わないけど、でも、二時限目の休み時間にクラスの子から言われてたから知ってるはずだよね」

胡桃の目前に、あざといツインテール娘が現れた。明日会ったときに、テールの先と先をかた結びしてやろうと心に決めた。

「いつ言ってくれるのかってずっと待ってた。待ってたけど、今一緒に帰ってきた時にも話してくれなかったってことは、どうやら話してくれる気はなかったみたいだね」
胡桃は歯噛みした。小太郎は完全に自分のことを信じてくれていたのである。一言、「わたし、男の子となんて歩いてないからね」と言っておけば、それで終わる話だった。
――そういうことではないでしょう、それではウソをつくということではありませんか。
頭の中にしつこく白衣の天使がしゃしゃりでてきたが、胡桃は無視した。この状況は、天使には荷が重い。どうすれば、現状をしのげるか、胡桃は小悪魔とともに頭をフル回転させた。何だか前にも同じようなことがあった気がしてならない。
「誠実じゃない人ってキライなんだ」
固まる胡桃を尻目にして、小太郎は歩きだした。彼が数歩あるいたあとに、ようやく自分を取り戻した胡桃は、そのまま小太郎の背を追った。
「ちょ、ちょっと待って、コタロウくん」
言うだけ言って立ち去ろうとする少年の前に回り込んだ胡桃の耳に、
「なに？」
という冷たい声。胡桃は改めて小太郎のことが好きなのだということを確認した。彼の一声で心折られそうな自分がいる。胡桃は体中にある勇気をかき集めて、昨日の件につき説明させてもらいたい旨、伝えた。こうなったら、洗いざらい話して、小太郎に笑ってもらう外ない。カレシにブラコンを知られるのが嫌で隠していたという話であれば、昨日の件につき口を閉ざしていたとしても一応の理は通る。あとは、小太郎が切ない乙女心を理解してくれるのを待つしかない。
淡い期待だった。一部始終胡桃の言い訳を聞いた小太郎の顔は青ざめているようだった。それが、カノジョがブラコンという病に侵

されていることに対するショックではないということ、そうであってくれればどれほど良かったかしれないということに気がつくのに時を要さなかった。
「ごめん、クルミちゃん。当分、クルミちゃんとは話したくない」
返ってきた声は少し震えているようだった。小太郎の顔色が暗かったのはどうやら怒りが原因であるらしい。それは分かったが、ぜんたいどうして怒られているのかが分からない。嫌悪されてひかれるならともかく。自分の横をすり抜けようとする小太郎の腕を思わず取る胡桃。このまま帰られると、カレシに怒られているというショックと、その理由が分からないというショックのダブルショックに悩まされることになる。
悶々とした夜を過ごしたくない胡桃が怒りの理由を訊くと、小太郎は小さくため息を落とした。「そんなことも分からないの？」という彼の心の声が聞こえた。
「それはボクのことを信じなかったってことでしょ。お兄さんのことが好きだってことをボクが知ったら、それでクルミちゃんのこと嫌いになるだなんて。そんなバカみたいなことあるわけないのに。それと、お父さんとお母さんが喧嘩してるって話、嘘だったんだね」
胡桃は小太郎の腕を取っている自分の手に冷ややかな感触を感じた。
小太郎の冷たい手が胡桃の手を外した。
「と、当分ってどのくらいなの？」
小太郎は胡桃を見なかった。
「さあ、一週間か、それとも……」
「それとも？」
「一生」
ぽつり。
ぽつり。
立ち去る小太郎を見送る胡桃の胸に、後悔の雨が降り始めた。

その32

五月の暮れなずむ街をどうやって家まで帰ったのか覚えていない。
気づいたら、自分の部屋の絨毯の上だった。
「お、おい、姉ちゃん！」
どたどたという足音を聞いて、胡桃(クルミ)はうつろな目を向けた。小学六年の弟がまだ可愛げのある顔に、焦りの色を浮かべているのが見える。薄暗くなってきた部屋の中、制服姿でうつ伏せに横たわっている姉を見つけて、何らかの発作にでも襲われたのではないか、そんな要らぬ心配でもしたのだろう。
「なに？」
「漫画、返そうと思ったんだけど……大丈夫か？」
胡桃はのそりと立ち上がると、弟から受け取った漫画をぞんざいに自分の机の上に放り投げた。
「な、なんかあったのか？」
「何かあったかって？　全然。まさか。何の問題も無いわよ、弟くん！」
弟は、ヒステリックになっている姉からそうそうに逃げ出した。賢い決断である。ひとりになった胡桃はその場にどっかとあぐらをかいた。大きな声を出して多少は精神に活気が戻ったようである。胡桃は気を取り直そうとした。してしまったことはしょうがない。激しくなった後悔の雨中でずぶぬれになっていても心が風邪をひくだけである。それでカレシの同情を引ければ良いが、小太郎(コタロウ)はそれほど甘い男の子ではなさそうだ。先の応答で小太郎の厳しさは嫌というほど分かった。
――でも、どうしよう？
ショックが尾を引いているのか、単にバカなのか――前者だと思いたい――何にも思いつかない胡桃の耳に年長けた男性の優しい声がする。声は言った、「友だちは助け合うためにいるんだよ」と。

小学校の恩師の言葉である。胡桃は老師に感謝した。友だちは助けてもらうためにいる、とはまさに至言である。同室の妹はまだ帰って来ていないものの、基本的にこの家の中にプライバシーなどという上品なものはない。胡桃は携帯電話を手に取ると外に出た。

団地棟の前にある広場のベンチで胡桃は親友に電話をかけた。あたりにはひと気がなかったが、ときおりどこからともなく家族の団欒の声が流れてきた。薄闇の中に白色電灯がぼんやり輝いている。

「あのさー、話が全然見えないんだけど」

フラレる危機にあって助けてもらいたいことを切々と訴えたところ、返ってきた友の第一声がそれだった。取り乱しているせいでうまく伝えられなかったのか、と思った胡桃は、深呼吸して心を落ち着けたのち、ゆっくりと事の顛末を説明した。今度は分かってくれただろうと期待した胡桃だったが、全く同じ反応を返されただけだった。

友人の分からず屋ぶりも気になったが、もっと気になることが一つ。先ほどから携帯電話を通してバリバリバリと小気味良い音が聞こえてきていた。

「ちょっと、実夏！　この大事な時に何食べてんの？　ソレ、ぜったいお煎餅的なもの食べてるでしょ。友だちの悩みを煎餅食べながら聞くなんて何考えてんのよっ！」

「逆よ、逆。お煎餅食べてるときに、あんたから電話あったの」

バリバリ、ずずー。

「おちゃあ！」

「お煎餅と緑茶って最強のタッグだと思わない、クルミ？」

「確かにね、最高にムカツク」

「よく分かんないんだけどさ、コタロウくんは何を怒ってんの？クルミの話からすると、クルミがコタロウくんに、昨日お兄さんと歩いてたってことを話さなかったことに対してってことになるけど」

「あと嘘ついたこと」

「でも、それだって仕方なくだったわけじゃん。そこまで怒ること

ないんじゃないかなあ。絶交まがいのこと言われるほどさ」
「……」
「そういうの何て言うんだろ。ケッペキ症っていうのかね。女の子のついた嘘の一つや二つ、隠し事の三つや四つ、でーんと構えてさあ、笑って許してくれればいいと思わない？　それが男でしょ？」
これは埒が明かない話になりそうだ、と胡桃は直感した。問題なのは、小太郎が怒ったというそのことであって、彼の怒りが理不尽なものかどうかということではない。しかも、胡桃には自分の罪を認める気持ちの方が大きくて、小太郎の行為を評価する気は微塵も無いのである。
なおも続きそうになる実夏の無益なおしゃべりを胡桃は遮ることにした。
滔々と理想の男性像について話し続ける実夏の話を割って、
「明日、謝った方がいいよね？」
「え、別に謝る必要なんか……」
「ありがとう、ミカ。助かったよ！」
胡桃は携帯電話を切った。
友人に相談するまでもなく、なすべきことはそもそも一つしかなかったのだ。
心内に降る雨はいまだやまないが、傘を差しかけてくれるような美少年がいない以上、自分でレインコートを羽織って雨滴を払うほかない。
「よし！」
胡桃は拳を固め決意を握りしめた。

その33

翌朝、胡桃（クルミ）は小太郎（コタロウ）に謝罪した。

小太郎から、「少なくとも一週間は話したくない」と言われたわけだが、言われた通りほとぼりが冷めるのを一週間待っていたりなどしたら、いっそう軽蔑されそうな気がする。なにより、「待つ」という消極的な行動は不得手（ふえて）である。それに、「待っていて手に入ったのは小皺（こじわ）だけだった」とは近所のカフェを経営している妙齢のお姉さまの談。行動あるのみ。女は度胸！

朝の清新な空気の中、カレシが来るのを校門前で待ち、彼を捕まえると、周囲の奇異の視線をものともせず、胡桃は深々と頭を下げた。いつもと違ったタイプのドキドキを胸に感じながら、地を見る胡桃の胸にちょっとした計算がある。

――人前で謝る女の子に冷たくはできないはず……。

甘かった。

下げたままの胡桃の頭に、一週間話しかけないで欲しい、という声が降ってきた。その声はひそめられることもなく堂々としたもので、周囲の好奇の的になることなど全く気にかけてもいないようだった。それだけ怒りが濃いということなのだろうか。頭を上げた胡桃の目が、小太郎の冷静な目を捉えた。胡桃に対してどういう感情を抱いているのか、その瞳から読みとることはできなかった。

風を巻くようにしてきっぱりと身を翻した小太郎は、そのまま門内の人となった。

校門前で突如演じられた恋の悲劇。胡桃は冷やかしの視線を感じながら、決意を新たにした。はっきりと拒絶されて傷つきはしたが、小太郎が言ったことを言葉通りには受け取らなかった。

勇気が試されている。胡桃はそう解釈した。

その日のたそがれ、胡桃は部活を終えた小太郎を待って、再び頭を下げた。朝と同じ答えが返って来ただけだったが、胡桃はめげな

かった。これは試練なのだ。真実の愛を手に入れるために課された試練。小太郎はきっと胡桃の誠意を見ている。いつまで謝り続けられるか。頭を下げ続けたのちに、

「クルミちゃんの気持ち、よく分かったよ。でも、許すのは今回だけだからね」

微笑む小太郎。いっそう深まる二人の絆。そうなることを考えると、この謝罪という状況もなかなか悪くないような気がしてくるから不思議である。「喧嘩して仲直りラブ深まる」というのは、「賢者の書」にしばしば現れる黄金律。とうとうこの教訓を実地に移すときが来たというわけだ。胡桃は桃色の頭で勇躍した。

そうして一週間が過ぎた。

ピンクの妄想機関の動作がスローになり、ついには止まり、胡桃は現実に目覚め始めた。

謝罪週間。この一週間をそう名付けたいと胡桃は思う。とにかく小太郎に謝り続けた一週間だった。朝と夕方は言うに及ばず、小太郎がひとりでいる時を捉えてすかさず頭を下げた。もうほとんど挨拶感覚で謝った。小太郎は、毎回胡桃が謝るのを黙って聞いていた。聞いてくれはするのだが、ただそれだけで他に一言も無く、まして「許す」という言葉が彼の口をつくことはなかった。

――もしかして、このまま自然消滅的に……？

一抹の不安が胸に萌した。

胡桃が諦めて話しかけなくなることをもって、二人の仲は終わる。それを小太郎は待っているのだろうか。彼のこれまでのきっぱりとした所作から、それは無いと思うが、あちらからのアクションが何も無いので何とも判断がつかない。

胡桃と小太郎の仲がどうやら怪しくなってきたという噂は速やかに二年生全体に広まった。暗躍する「裏生徒会」。小太郎が、最近付き合い始めたカノジョとロクに口を利かなくなったという情報は風を切った。

「クルミ、コタロウくんと別れたって本当なの？」

ある日の昼休み。入ったトイレで、胡桃は捕獲された。いつぞやの三人組である。
「やっぱりクルミじゃ続かないと思ったんだよね」
じろりと睨んだ胡桃の目が怖かったようである。ボスの女の子がひるんだような顔をした。下っ端A、Bも一歩退いた。
「な、なによ？　そうなんでしょ？」
今なら一対三でも負ける気がしなかった。花びらをちぎる気安さで、高慢な彼女らの頬をちぎれそうな気がした。胡桃は闇のオーラで三人を圧倒しつつ、しかし、考えを実行に移すことはしなかった。彼女たちの頬をつねってもひっぱたいても事態が変わるわけではない。
恐怖におののく三人の横を素通りして、胡桃は手を洗うと廊下に出た。
胸が痛い。
誠意が見られてるんだと思い続けられる限界がどうやら近付いてきているようだった。

その34

胡桃（クルミ）よりも先に、いち早く忍耐メーターの針を振り切った者がいた。

友人の実夏（ミカ）である。彼女は、親友に一週間、空しい努力をさせ続けている小太郎（コタロウ）に対して激高した。

「中沢くんはクルミにどれだけ謝らせれば気が済むの？」

ある日の夕べ、いつものように校門で小太郎を待ち受けいつものごとく過去を悔いている旨伝えようとしたところ、横から唐突に現れた実夏が小太郎に食ってかかったのである。胡桃は感動した。先日の「せんべいバリバリ事件」は許してあげようと思った。

小太郎は、親しくない女の子から大きな声を出されても慌てた様子もない。静かに、「君には関係ない」と返して、二人の少女の横を通り過ぎた。友が作ってくれた好機である。キラリと目を見開いた胡桃は小太郎の背に向かって、

「コタロウくん、もう許してもらえないの？」

必死の声を投げつけた。

小太郎は一瞬だけ立ち止まったが、振り返りはしなかった。そのまま歩み去る彼に、

「ゴーマン！」

罵声を浴びせる実夏。

一層怒った彼女は胡桃に、「あんな冷血な男とはもう別れなさい。女の子に謝らせ続けるなんてロクなヤツじゃないわ。しかも全然大したことじゃないのにさ。もう、こっちから振っちまえ」と説得の言を吐いた。胡桃は力なく笑うしかなかった。確かに胡桃も、自分のしたことがそこまで大したことだとは正直思っていなかった。しかし、それを言っちゃあおしまいなのである。自分がした悪事の評価を自分がするのはルール違反である。それに――

「それだけコタロウくんは言葉に責任を持つ人なんだよ。誠実な人

なんだ」
と言うこともできるのではないか。
胡桃は肩をつかまれて前後にぐわんぐわん、思いきり揺さぶられた。
「恋は盲目っていうけど、あんたの場合、第三の目でも開いちゃったんじゃないの？　その目で見るとカレシの全てが良く見えるようになんのよ」
「……そうかもね」
「どうすんのよ、これから？」
それは胡桃にも分からなかった。
「とりあえず続けてみるよ」
続く一週間で胡桃の神経は極限まですり減らされた。無策の彼女は誠実さのみを武器にして、果敢に挑戦しつづけたわけだが、小太郎の氷の鎧を貫くことはついになかった。小太郎は、胡桃が話しかけると必ず立ち止まって話を聞いてくれはするが、許しの微笑みを向けてくれることはなかった。小太郎と話さなくなってから二週間が経とうとしている。己の限界を感じてから更にもう一週間がんばってみたわけだが、これ以上は本当にどうしようもなさそうだった。まだ手足も、そして謝罪を伝える口も動くのだが、心が言うことを利かなくなってきている。
「もう遅い。全ては終わったのだ」
どこからともなく低い不気味な声がして、隙あらば胡桃の心を暗黒に誘(いざな)おうとしていた。
教室でふと小太郎を眺めていると、告白を承諾してくれた翌日のことが頭に蘇る。彼が、胡桃のことを自分のカノジョだと言ってクラス中に宣言してくれたときの天にも昇るような気持ちが思い出された。つい三週間ほど前のことなのに、随分と昔のような気がした。
小太郎は以前からそうだったが、ましてクラスの女子から話しかけられるようになった。胡桃と別れるのは時間の問題だと踏んだ女子たちが、次のカノジョ候補としてこぞって自分をアピールし始め

たのである。これまでは注意深く機を窺っていたが、胡桃の告白成功を見て、
「あんなツマラン女にできたこと、わたしにできないことがあろうか」
と勢い込んでいるのであろう。緑眼の少女たちと笑顔で話す小太郎を見ていると、胡桃は思わず涙をこぼしそうになるのだった。
絶望の海にどっぷり肩まで沈んでいたそんなとき、一人の少女の訪問を得た。日曜日の午後のことである。胡桃は自室の絨毯の上でごろごろしながらヘッドホンで音楽を聴いていた。耳に流るる曲は、その名も「ＬＯＶＥ　ＭＥ　ＤＯ」である。
客はいつものように優美な所作で傍に腰を下ろすと、胡桃がヘッドホンを外すのを待って、いつものニコニコスマイルであいさつしてきた。
気の置けない仲ながら、歓迎したものかどうか、胡桃はしばし迷いの時間を持った。
というのも彼女は、ブラコンという死病を癒してくれた天女であったが、また同時に現在の状況の遠因を作った魔女でもあったからだ。

その35

母がお茶を持ってくるまでの間、胡桃(クルミ)は無言だった。持ってきたあとも口を開こうとはしなかった。娘がむやみに張り詰めた雰囲気を醸し出しているので、母は首を傾(かし)げながら部屋を後にした。

「冷めないうちにいただきます」

そう言うと客は、ほわほわ湯気を上げるティカップの縁に唇をつけた。

卑怯者ではないと自負している胡桃だったが、目前で紅茶を楽しんでいる少女、彼女のお茶目さんが無ければ、兄と手をつなぐようなことにならず、ひいてはカレシとここまで難しい関係にならなかったのではないか、そういう恨みがましい気持ちが多少ある。もちろん、ブラコンから救ってくれたということには感謝の言葉も無いが、その代わりにカレシを失っては本末転倒である。

「どうしたの、クルミちゃん？　泉(イズミ)お姉ちゃんだよ、さ、いつものようにいらっしゃい」

ティカップをソーサーに戻して両手を広げる少女。胡桃は警戒した。その胸に迂闊(うかつ)に飛び込んだが最後、今度はどんなめくるめく世界に連れて行かれるか分かったものではない。

「キョウハドンナゴヨウケンデスカ？」

「クルミちゃんがきっとわたしの力を必要としていると思って参った次第」

胡桃が首を捻る間もなく、泉は、お兄さんに頼まれたのよと来訪の理由を告げた。

「『クルミの様子がおかしい』って、春樹(ハルキ)はこの頃そればっかりなんだよ。ちょっと本気でクルミちゃんに嫉妬しました」

そう言えば、小太郎と話せなくなってどんよりしていた時に、兄が何回か話しかけてきたような覚えがある。ぞんざいな受け答え――「ウルサイ」と言ってティッシュ箱を投げつけるがごとき――を

したこともうっすら記憶にあった。
泉はお茶受けのどら焼きをほおばりながら、柔らかな色を湛(たた)える瞳で、悩みを打ち明けるよう促してきた。
小太郎とこじれはじめた時に、泉に相談することを考えなかったわけではない。実際彼女は、知り合って、すなわち兄と付き合い始めてからの一年間、胡桃の良き相談相手だった。それにもかかわらず、相談しなかったのは、胡桃が大人になってきたということを示していた。すなわち、年上の忠告に諾々と従うような可愛らしい時が過去のものになりつつあるということである。自分のことはできるだけ自分でやりたいという自立心の芽生え。ひとりでできるもん！
とはいえ、今回の件は、パジャマの着替えや歯磨きなどのレベルではない。この件を一人で処理して華麗な大人の女性にステップアップしたい気持ちはやまやまだが、さすがに手に負えるレベルではなさそうだ。この二週間、既にやれるだけのことはやったのである。あとはもう、誰かに手を貸してもらう外ない。仮にその手が胡桃の足を取り、かえって絶望の海底深く引きずり込む危険があったとしても。
ええい、ままよ！
胡桃は覚悟を決めた。イチかバチかである。小太郎とのいきさつを胡桃は洗いざらい泉に話し、助言を乞うた。
「クルミちゃん、もう謝っちゃダメだよ」
うなずきながら聞いていた泉が、聞き終わってからまず言ったのがそれだった。
「ダメってどうして？」
「悪いと思って一度謝ったんだから、もうそれ以上謝る必要はないわ」
「必要はあるよ……だって、コタロウくん許してくれないんだもん」
「許してもらうことないよ。というか、許してもらおうなんて思ったらダメ」
どういうことかさっぱり分からない胡桃に、泉は諄々（じゅんじ

ゅん）と説いた。
「仮に許してもらったとしましょう。そうしたら、コタロウくんとクルミちゃんの関係は、許した子と許された子っていうことになって対等じゃなくなるわ。人と人との関係は対等じゃなくちゃいけません。そうしないと、どちらかがどちらかに余計に気を使って付き合わないといけなくなるでしょ。そういうお付き合いはしちゃだめ。いったん許されたりしたら、クルミちゃんはコタロウくんに対してずっと気を使って付き合わないといけなくなるわ」
だてに一歳、年を取っているわけではない。人間関係についてそういう考え方もあるのか、と胡桃は新たな視界を開いた気持ちだった。
「泉ちゃんはお兄ちゃんに謝ったこと無いの？」
「あるよ。でも、それは許してもらいたいからじゃないよ。わたしが単に悪いと思ったから。そうして謝ったらそれでおしまい」
「もしお兄ちゃんが許さないって言ったら？」
「そんな人とは別れます」
泉はふっくらとした笑顔で言った。よっぽど自分に自信があるのか、兄を信頼しているのか。どちらにせよ羨ましいことである。
「じゃあさ、謝らないとしたらどうすればいいの？」
胡桃はずいっと身を乗り出した。
泉はゆっくりと首を横に振った。
「残念だけど、クルミちゃんにできることは、わたしにはちょっと思いつかないな」
真っ暗になった視界に、しかし、すみやかに差し込む一条の光。
「ただ、クルミちゃんじゃなければできることはありそうよ」
誰に何をさせるつもりなのか、胡桃は詳細を知りたがったが、泉は答えなかった。
「明日を楽しみにしてて」
それだけ言うと座を払って立ちあがった。
部屋を出る未来の姉の後ろ姿を拝みながら、差した光は再び薄れ、

胡桃はそこはかとなく不安になってきた。泉が詳細を話さないということは、詳細まで考えていないか、あるいは――

胡桃は、見事に変身した兄に度肝を抜かされたいつぞやの日のことを思いだした。

その36

翌朝、胡桃（クルミ）はやはり小太郎（コタロウ）に謝った。泉（イズミ）からは、「もうやめろ」と言われたわけだが、二週間一貫して続けてきたことを急に変えるのには抵抗があった。それに、やるなと言われたことほど、やりたくなるのが人情である。

自転車の二人乗り、しかり。

たわむれに火災報知機を押すこと、しかり。

弟のランドセルにチョコ菓子のおまけシール（子ども向け美少女アニメのキャラクター）をぺたぺた貼り付けること、しかり。

「やめなさい」と言われれば言われるほどますます、「やってやろうじゃないか」と思うのである。

そんな見当違いのガッツをほとばしらせる娘に対して、母はしばしばため息をついた。叱声を浴びせた。なによりおしりを張った。聞き分けのない子に対しては、叱りつけるだけでなくおしり叩きをくれてやるのが福田家の流儀なのである。一説によると、胡桃のおしりがちっちゃくてカッコイイものにならなかったのは、母に引っぱたかれる機会がありすぎたせいだという。

胡桃はがっくりと肩を落とした。自分の残念なヒップラインのことではない。今しがた、怒りを解いてもらえるようカレシに懇願したわけだが、彼は優しい言葉をかけてくれようともせず、ただ後ろ姿を見せて立ち去っただけだったのだ。胡桃の周りだけ重力が大きくなったようである。きらきらした朝日の下、誰も彼もが足取り軽い中、胡桃は重い荷を負っているかのようにのろのろと校門をくぐった。

もしかしたら、とどこかで奇跡を期待していた自分を胡桃は嘲った。週が改まることによって、小太郎の気持ちも新たになるのではないか。胡桃に二週間謝らせ続けたことについて、後悔の気持ちが芽生えているのではないか。そんな甘っちょろいことを今さら考え

ていたのである。人の世に奇跡など起こらない。とうに夢見る頃を過ぎた胡桃は、悲しい真理を再認識しつつ、年上の友人の策を頼るほか手がないことを認めるしかなかった。

泉がいったいどういう手段で小太郎に翻意を促すのか。四コマ分授業をこなしながら、来たるべき決定的瞬間を見逃すまいと小太郎をじっと見ていた胡桃だったが、彼の身に特別なことは起こらない。そうしてお昼になった。いつものように牛乳を残して昼食を取り終えると、昼休みである。何か起こるのであればこの昼休みのはずである。そう断じて、大きめの瞳を皿のようにして小太郎を見ていると、キャッキャッという女子のカン高い声が胡桃の耳に飛び込んできた。

胡桃はイラッとした。

どうせ、ドラマの俳優やアイドルグループあたりのことで盛り上がっているのだろう。恋に恋していられる幸せなお子ちゃまたち。彼女らが恋愛に関して持っているのは、栗羊羹（くりようかん）よりも甘い幻想のみである。そのうち、グリーンピースよりも苦い現実があるということを知るだろう。早く知ればいいのに！

怒らせた肩をそっと叩かれた胡桃は反射的に振りかえり、己の凶相を向けてやった。消えろ、というサインのつもりである。クラスメートの誰がコミュニケーションを取ろうとしてきたにせよ、付き合っている時間などないのだ。ひとにらみで退散させようとした胡桃だったが、予期に反し、彼女の目前にいたのは級友などではなかった。

少女のような、という形容がぴったり当てはまるほど細工の行き届いた少年が、胡桃の邪眼を受けてなお端然としていた。少年の瞳から溢れる光で、胡桃の目から闇が払われた。先ほど女子が上げた歓声の原因を胡桃は正しく理解した。

「や、クルミちゃん」

その声は天上で奏でられるハープの音色だった。

その37

しばしぼおっとしていた胡桃(クルミ)は、

「もしかして忘れてる？　お兄さんの友だちの五十嵐だけど」

ちょっと不安そうにかけられた声でもって正気に返った。胡桃は天パー気味の頭を大げさに振った。

兄の友だち云々とは関係なく、忘れようはずがない。五十嵐俊(シュン)と言えば、「校内美少年ランキング」の常にトップ付近にいる男子である。「校内美少年ランキング」とは、その名の通り、校内の全学年の男子をウツクシサ順に並べていったものである。秘密組織「裏生徒会」によって毎月アンケートが集計されて、ポイントが高い順に二十位まで発表される。五十嵐少年は、そのトップ１０に毎回ランクインしているのであった。現在三年生の彼は、どういう所で気が合ったのか知れないが兄の友人であって、家に遊びに来た時などに、胡桃は何度か顔を合わせていた。

「良かった。自己紹介から始めて、お互いの趣味を聞いてって感じでやってたらお昼休みなくなっちゃうからね」

五十嵐少年はそのまま胡桃の隣の席に座ると、胡桃に今、時間があるかどうか訊いてきた。

「ありあまってマス」

胡桃は即答した。小太郎に何が起こるかということに注意することはやめた。もうしなくて良くなったのである。というのも、この五十嵐先輩こそ、泉(イズミ)の計略に違いなかったからだ。いくら何でも、カレシとの仲が怪しくなっているときに、美少年が唐突に現れて胡桃に興味を持つなどという都合の良い事態が起こるはずがない。少女コミックではあるまいし。しかも、彼はカノジョ持ちなのだからよっぽどである。とすれば、考えられることは一つしかない。誰かの差し金であるということだ。兄と友だちということは、当然、俊は泉の友だちでもあるはず。

俊は他愛ない話を始めた。泉が何をしたいのかは知らないが、胡桃はカッコイイ先輩男子との会話をしばし楽しむことにした。最近見た話題の映画やベストセラー、漫画のことなどとりとめないことを話す俊の語り口は柔らかで耳に心地良く響いた。いつまでも声を聞いていたいようなそんな気分になる。話していること自体も愉快だが、周囲から向けられるチクチクとした嫉妬の視線にもまた快いものがあった。

「何でクルミなんかが五十嵐先輩と？」

心の声か肉声かは定かでないが、クラスメートの妬みの声が聞こえたような気がした。

慎みが足りないことかもしれないが、カレシと危機的な状況にも関わらず胡桃はちょっと楽しくなってきた。恋人と冷えた状態になったときに他の男性から優しくされてついフラフラしてしまう。そんな状況を恋愛ドラマなんかで観るたび、心くじけないよう無邪気にヒロインを応援していた胡桃だったが、話はそんなに簡単なものではないということが今分かった気がした。

――もし先輩にこのまま誘われたら……。

それはあり得ない想像であるが、仮の話として考えてみたとき、一言の下にはっきりと断れそうにない。そう思った瞬間に口の中に苦い味がした。どうやらユラユラと揺れるような自分に対しては嫌悪感を持つようである。胡桃はほっと胸を撫でおろした。

十分くらい話したころだろうか、不意に俊が身を寄せて来たので、胡桃はどきっとした。

「中沢くんってどの子？」

耳打ちされた声に応えて軽く手を向けると、俊はおもむろに席を立った。胡桃に別れを告げて、その足を、教室の隅の方で立って級友と話をしている少年のもとへ向ける。いったい小太郎（コタロウ）に何をするつもりなのか。胡桃が固唾（かたず）を飲んで見守っていると、俊は小太郎に話しかけたのち、二人連れ立って教室の外に向かった。

「またね、クルミちゃん」

小太郎を先に出した俊が教室の戸から出る時に胡桃に手を振ってきた。途端に胡桃は周囲に殺気が巻き起こるのを感じた。美少年が去ったあと、ひとり残されたカレシ持ちの少女は、クラスメートから厳しい追及を受けることになった。

その38

胡桃(クルミ)はじりじりした気持ちで、本日残り2コマの授業をこなした。何のために俊(シュン)――つまり泉(イズミ)――が小太郎(コタロウ)を呼び出したのか。気になって仕方ないが小太郎に直接訊く訳にもいかず、時が過ぎ去るのをただ待つほかなかったのである。

帰りのホームルームが終わると、胡桃はダッシュで教室を出た。見つかれば確実に厳重な注意を受けるであろうスピードで疾走し、泉のクラスへと急ぐ。危険を冒した甲斐あってか、三年一組はまだホームルーム中らしく、教室の引き戸は閉められ、静かな雰囲気の中から男性教諭のくぐもった声が聞こえてきていた。

やがて静寂が破れてざわめきが湧いた。訓示を終えた教師が戸を引いて姿を現すと、所在なげに廊下に立っている胡桃を一瞥したが、何も言わず立ち去った。無駄にビビらされた胡桃は、三々五々出てくる先輩たちを避け、目当ての人を待った。少しして友人と笑声を交わしながら出てきたふっくらふわふわした女の子。泉である。胡桃が近付くと、泉は訳知り顔でにこりとして、友だちを先に行かせたあと、ふと教室の戸口にタッタッと戻り、

「春樹(ハルキ)、今日、先に帰るから」

と同じクラスにいるカレシ、つまり胡桃の兄に向かって明るい声を投げた。

大っぴらなラブラブアピールにテンションが上がる教室。喝采の響きを聞きながら歩きだした胡桃は生徒用玄関を抜けてちょっと歩き、校門を出るやいなや隣にいる少女に事情を尋ねた。一応、胡桃にも昼休みの件につき思いついたことはあった。午後の二時間、学生の本分をそっちのけにして考えた結果、脳中に現れたのは、名付けて「コタロウにヤキモチ焼かせよう作戦！」というわざわざ名付けるまでもない作戦だった。先輩男子（美少年）を胡桃に接触させることによって、小太郎のジェラシーを誘う。「賢者の書」にもた

びたび登場する由緒ある作戦である。しかし、
――無理っぽいなあ。
この作戦に期待するのは難しい。
さっきの昼休みに俊と話をしていたとき、もしやと思って、小太郎の方をちらちら窺ってみたりしたのだが、彼は全くこちらのことを気に留めていないようだった。嫉妬の「し」の字の気配さえ見せてくれなかったのである。それに、そもそも小太郎に対して何らかの策を弄するということが間違いである。まともに付き合っていた一週間と、まともに口を利いてもらえなくなった二週間で分かったことがそれだった。何かしらの小細工の匂いを嗅げば、小太郎はますます胡桃のことを嫌いになるに違いない。
泉が静かに口を開いた。
「えー、大変ショッキングなニュースがあります」
胡桃は平然とした目を泉に向けた。
現状よりもショッキングなことがあれば言ってもらいたいものである。
泉はコホンと勿体ぶって咳をすると、
「中沢くんとハルキが決闘することになりました」
そう続けて、胡桃の頭にクエスチョンマークを与えた。
「ハルキが中沢くんに勝負を申し込んだの。クルミちゃんを賭けた勝負よ。もしそれにハルキが勝ったら中沢くんとクルミちゃんは元通りになり、もし中沢くんが勝ったらクルミちゃんとこれからどうするかは中沢くんに一任する」
胡桃の口が開き、あんぐりとあごが落ちた。
勝負とは何か。なぜ兄が出てくるのか。何が何やらさっぱり分からない胡桃。彼女に理解できたのは、隣を歩く少女がどうやら魔法の力を秘めているということであり、そして、その魔法がおとぎ話とは違って、美しいものではないらしいということだけだった。

その39

夕暮れというにはまだもうちょっと早い夏空の下、胡桃（クルミ）は歩きながら話を聞いた。

泉（イズミ）によると、ことは以下のように進行したらしい。

まず、昨日胡桃から話を聞いた泉は、小太郎（コタロウ）のことをかなり頑固な子であると断じた。二週間女の子に頭を下げさせてなお許しを与えないとは相当である。仮にこれから許すことがあったとしても、許す・許されるという上下関係を、小太郎と胡桃の間に作りたくない泉は、別方向からのアプローチが必要だと思った。とはいえ、部外者の泉が話をしにいったとしても、小太郎は聞く耳を持たないだろう。

ここで、兄の出番となる。「兄」という肉親の立場にある者から事情を尋ねられたら、小太郎も無下にはできまい。そう考えた泉は、兄を説得して、小太郎の真意を尋ね、胡桃ともと通りになる気があるのかどうかを聞き出させようとした。

「一応ブラコンのことは隠して話をしておきました」

泉が言う。気を遣（つか）ったつもりだろうが、そもそも小太郎とのことを話したこと自体がよろしくない。乙女の秘事を軽軽（けいけい）に兄に明かすなんて！　恥ずかしさと苛立ちで体の奥がむずむずしてきた胡桃だったが、先を聞くために黙っておいた。

「それで善は急げ。お昼休みに、五十嵐くんに呼び出してもらったの」

まさか兄が直接、小太郎を呼びに行く訳にも行かず、泉が行ったら先輩女子に呼び出されたということであらぬうわさが立つ。メッセンジャーとして白羽の矢が立ったのが五十嵐少年だったのだと泉は言った。

「ちょっとクルミちゃんとトークしてもらうことも頼んでおいたのよ」

カレシに冷たくされてすっかり下がっている胡桃の株だが、先輩男子（美少年）から話しかけられるということになればその株も上がるだろうという実に細かい芸である。
五十嵐少年に校庭の隅まで先導された小太郎は、そこに兄と泉が待ち受けているのを見ても落ち着いたものだったという。
「所帯じみたヤツだな」
とは自分のことを棚に上げた兄の談。五十嵐先輩に礼を言った兄は、彼を帰してから小太郎に向かった。そうしてまず妹が悩み苦しんでいる様を話した。仲違いしている恋人を想い食事も喉を通らず夜通し泣いているというようなことを、ちょっとオーバーに語った。当然、泉の入れ知恵である。二人の間のことに口を出す気はさらさらないが、あまりに哀れな妹の様子を見兼ねたのだ、と兄は言い訳して、もし妹に落ち度があれば反省もしていることだろうから許してもらいたい、と続けた。
兄の真摯な態度に、小太郎の気持ちは動かされたように見えた。
しかし、
「ボクは隠し事や嘘が嫌いなんです」
その牙城を突き崩すまでには至らなかった。
「可愛げない子ね」
とは可愛らしさと対極にある泉女史の言。
小太郎はまっすぐな声を出した。
「隠し事は持ったっていうこと、嘘はついたっていうことが全てで、あとから謝ればいいっていうものじゃない。人のためにしたことなら別ですけど、クルミちゃんは自分のことしか考えてなかったから」
「隠し事、それに嘘か……。ただ、それも程度問題だろ。オレは、許嫁（いいなずけ）がいることを隠されてたことがある。それに、『一カ月後に引っ越す』っていう嘘をつかれたこともある。それでも、そいつとまだ付き合ってる」
小太郎の目に同情するような色が現れた。泉は、軽く咳払いすると、脱線しそうになっている話を元に戻させる為、また自分への非

難を逸らすため、肘で兄の脇をつついた。
「とにかくだ。どうせクルミの頭じゃ、大したことができるハズもない。そんなものにいつまでも目くじらを立てるのは大人げない」
「ボク、中学生ですから……それに、例え、お兄さんだとしても、クルミちゃんのこと悪く言うのやめてください」
おや、と泉は内心にやりとした。これは脈がありそうだ。
「本当のことだろ。悪事ができないのが、あいつの唯一の美点だからな」
「唯一だなんて！」
「他にあるか？」
「いくらでもあります。明るくてはきはきしてて可愛らしくて、クラスのムードメーカーですし、一緒にいると凄く……」
勢い込んだ小太郎の言葉は尻すぼみになった。誘導尋問をしかけられていることに気がついたのである。
「と、とにかく、付き合った直後に隠し事をしたこと、ウソをついたことを無かったことにはできません。失礼します」
そう言って帰ろうとした小太郎を止める形で、あろうことか、兄は深々と頭を下げた。
「この通りだ」
泉は驚いた。頭まで下げてくれと頼んだ覚えは無い。
「そういうことをさせないためにわたしがついてたんだけどなあ……」
悔しさをにじませた声で、彼女には珍しい暗い顔で語る泉。
上級生から頭を下げられてさすがにショックを隠せない小太郎。こここそ泉の出番である。
「中沢くん。クルミちゃんのこと許せとはもう言わない。その代わり、一つ勝負を受けてくれないかな」
「……勝負？」
「そう。クルミちゃんをめぐって、あなたと春樹（ハルキ）が戦う。もしあなたが勝ったらもうこれ以上、わたしたちは口を出さない。もしハル

キが勝ったら、あなたとクルミちゃんは仲直りする。どう？」
いったいどこからそういう発想が生まれてくるのか。それもそれ。しかし、もっと驚くべきことは、打ち合わせなくいきなり持ちだしたことであっても、兄が平然としていたということ、そして、小太郎がそれを受け入れたということだった。

その４０

「男の子は意地を張る生き物です。胡桃(クルミ)ちゃんのことを怒ってるというより……まあ、それもあるんだろうけど、許しちゃうと自分に嘘をつくことになるとでも思ってるんじゃないかな。許したいんだけど、キッカケがなくて許せない。そこに『勝負』っていうキッカケをあげたのよ」

インチキ魔導師は魔法のタネを説明した。

「じゃあ、小太郎(コタロウ)くんは、わたしのこと嫌いになったわけじゃないの？」

「引っ込みがつかなくなってるだけじゃないかな」

「お姉ちゃんっ！」

足を止めた胡桃は、隣の少女の足も止めた。感謝の意を込めて熱い抱擁を彼女に与える。ほっぺたすりすりまで行って感動を伝えているところで、胡桃はやんわりと引き離されるのを感じた。

「でもね、もし中沢くんが万が一断ったりしたら、クルミちゃんに中沢くんと別れるように言うつもりだったんだよ、わたし」

ちょっと距離を取るようにした泉(イズミ)が思いがけないことを言った。彼女は、大事なカレシに頭まで下げさせておいて、それでも小さな提案一つ断るほど小太郎が頑迷であるなら、そんな男と未来の妹をこれ以上付き合わせる気は無かった、とこれも珍しい真剣な顔で続けた。

胡桃の胸は感動に打ち震えた。

「そこまでわたしのこと考えてくれてたなんて……わたし、イズミちゃんを誤解してた。ただ、わたしを驚かせたりからかったりして、楽しもうとしてるんだとばっかり」

「いいのよ、クルミちゃん、そんなこと。わたしはクルミちゃんの力になりたかっただけなんだから」

慈母のごとき微笑みを作る泉のおかげで、元気がフルチャージさ

れた胡桃は、地を蹴れば天高く飛んでいけそうなほど体が軽くなるのを覚えた。自分のいない所で事がすいすい進んでしまったのはあんまりいい気がしないが、
――そういう小さなことにこだわらないのが大人の女ではなかろうか、そうに違いない！
という都合の良い考えで気分を改めた。なんにせよ大事なのは、小太郎に完全に嫌われたわけではない、というその一事なのである。その他のことは些事（さじ）にすぎぬ。
――あとは、お兄ちゃんがその勝負に勝てば……。
と、そこで気がついたことが一つ。まだ、その勝負とやらの内容を聞いていない。隣に問いただしてみたところ、返って来たのは、
「何だと思う？」というニコニコ笑いだった。
胡桃はもやもやと想像を巡らせた。
可憐な乙女をめぐって争うとすれば、やはり……。
そう、決闘である！

夕暮れ迫るひとけ無き荒野。
対峙する二つの影。
その手に握られしは細身の刺突剣（レイピア）。
兄「来たか。逃げずに来たことだけは褒めてやろう。しかし、ナカザワ家の者に妹をやるわけにはいかん」
恋人「ボクとクルミさんは愛し合っているんです。家同士のことは別の話ではありませんか」
兄「別の話などであるものか。ナカザワとフクダは既に数百年の間、互いをカタキと憎み合って来たのだ。わたしの父もお前の父に殺された」
恋人「ボクは叔父をあなたの家の人に殺されました。しかし、もうやめましょう、こんな不毛な争いは。いままたボクとあなたが争えば、新たな憎しみが生まれるだけです！」
兄「かもしれぬ。しかし、血に抗うことはできん。もしも妹が欲し

いのならば、当主のわたしを倒し力づくで奪うほかない」
恋人「できません。愛する人の兄と戦うなど」
兄「来ないのか、ならば……」
煌めく剣閃。
数合打ち合う二人。
その間に現れる小柄な影。
兄のレイピアの先がその影に突き刺さる。
兄「ああ、お前は。なぜ、こんな所に？」
地にゆっくりとくずれおちる美少女。
慌てて抱きかかえる恋人。
恋人「クルミ、クルミ！」
ヒロイン「……良かった、わたしの大好きなお二人にお怪我が無くて」
兄「わたしは何てことを……」
ヒロイン「お兄様……どうか、憎しみをお捨てになってください」
兄「ああ、捨てるとも。お前を失うことになるならば、どんなものでも捨ててやったものを。なんと、わたしは愚かだったんだ」
ヒロイン「良かった。……コタロウ様、どうかお兄様を恨まないでください」
恋人「クルミ、ボクを置いていかないでくれ」
ヒロイン「約束を……」
恋人「するとも、どんな約束でも。だから、クルミ、お願いだ……」
ヒロイン「……クルミは幸せでした、コタロウ様。ありがとう……」
がっくりと力をなくすヒロイン。
号泣する恋人。
兄「妹は両家の憎しみを終わらせるために死んだのだ。今後、二度とナカザワ家とフクダ家が憎しみ合うことはないであろう」

胡桃は目頭が熱くなるのを覚えた。何という美しいお話だろう。
ヒロインが死んでしまうのが気にならないでもないが、なに、この

あと生き返らせれば問題ない。胸に母の形見の携帯電話でもしのばせておいたことにしよう。レイピアはそれを貫いたのだ。そうして物語はハッピーエンディングへ……。

暴走を始めた胡桃の妄想機関。その動きを止めたのは、

「勝負は一週間後。それまでに春樹（ハルキ）を鍛えてくれるよう、助力を乞わなければならない人がいます」

泉の真剣な声音だった。

胡桃はきょろきょろと周囲を見回した。林立する団地棟。気のせいか見覚えある景色である。

「あの……イズミちゃん？」

「行くよ、クルミちゃん」

泉は意を決したかのように大股で歩いて行くと一棟の団地に入り階段を上っていった。あとにつく胡桃。やがて泉は一枚のスチールドアの前で歩みを止めた。

ピンポーン。

呼び鈴に応じて出てきたのは小学校高学年くらいの少年である。彼は怪訝な目で泉を見ると、

「えと、兄ちゃんも姉ちゃんもまだ……って、ん？」

胡桃の方に視線を向けた。

「今日はあなたに会いに来たのよ、テルくん。お願いがあって」

少年は泉をドアの中へと招いた。ついで胡桃も中へ入る。少年に断りを入れる必要は無かった。

なにせ自分の家だったのだから。

その41

これは何やらアホらしい話になりそうだ、と胡桃（クルミ）は直感した。理屈が合わない。兄を鍛えるマスターが弟だなどと。弟の照也（テルヤ）が兄より勝っているところなどあるのだろうか。理屈が合わないということは、胡桃がおバカなのか、それともこれからの展開がアホらしいかの、どちらかである。無論、後者に違いない。

――待って、もしかしたら……。

小奇麗に片付いている弟（プラス兄）の部屋に入り絨毯に腰を下ろした胡桃は、壁に貼られているサッカー選手のポスターを見た。イタリアの有名選手らしい。そして、ピンと来た。隣に座った泉（イズミ）が、お構いなくと言う前に、弟は珈琲を淹れに行った。

サッカー勝負。

弟はサッカー部であり、サッカーであれば兄に教えることもできる。小太郎（コタロウ）もサッカー部。胡桃を巡る争いは、スポーツだったのだ。それも只のスポーツではない。全世界２００の国と地域でプレーされている世界最高のスポーツ！　まさに美少女を巡る戦いに相応しいではないか。

いやいや、待て待て。

胡桃は首を横に振った。

それはおかしい。なにせ小太郎は部でレギュラーを張るほどの腕前である。対して、兄も運動神経が悪い方ではないが、にしたって一週間で小太郎に勝てるようになるわけない。いくらなんだって無茶である。何かしらハンデ的な特別ルールでもあるのだろうか。

――待って……ま、まさかっ！

謎は全て解けた！

バラバラのピースがにわかに一枚の絵を形作ったのである。

そんなピースがどこにあったんだ、という批判を胡桃の天才は意に介さない。

泉は兄を勝たせる気など毛頭ないのである。兄は勝算の無い戦いを挑み、そして当然に負ける。しかし、負けることがミソなのだ。妹のために勝ち目の無い戦いを挑み死力を尽くす兄。そんな彼を見て、小太郎はどう思うだろう。いさぎよい、と思うに違いない。兄とボールを蹴り合う内にわだかまりをさっぱりと消した小太郎が、

「クルミちゃんを想う気持ちに打たれました」

兄に手を差し伸べる。敗北を悔しがって地に拳を打ちつけている兄がふと顔を上げる。

微笑みを向ける小太郎。

「お兄さんと呼ばせて下さい」

「……しかし、オレは負けたんだぞ」

「ええ、確かに。でも、条件はこうでしたよね。ボクが勝ったら、クルミちゃんとのことはボクの好きなようにしていいと。ですから、ボクは自分の好きなようにします」

兄の手を取って立ちあがらせたあと、小太郎は優しい目でヒロインを見る。恥じらう少女。

「お兄さんに感謝しなきゃだめだよ」

ヒロインに近づいて温かな声をかける小太郎。

「……はい、わたくしには過ぎた兄です」

「もう二度とボクに隠し事をしたり嘘をつかないって約束できる、クルミちゃん？」

「は、はい！」

「なら、ボクも約束するよ。クルミちゃんがそうしてくれる限り、ボクは絶対にクルミちゃんのこと放さないってこと。好きだよ、クルミ」

抱きしめられる少女。周囲から湧きおこる拍手の嵐。大団円を迎えるラブストーリー……。

胡桃の体はふるふると震え出した。感動と、そしてそれに倍する恐怖で。

何という神算鬼謀！

胡桃は、隣に腰を下ろし天使のような微笑を浮かべている少女を恐ろしげに見つめた。こんな優しげな顔の下で、まさに悪魔的ともいえる謀(はかりごと)を巡らせていようとは。いったい誰が知ることができよう。この人にだけは逆らうまいと、胡桃は固く心に決めた。

その矢先のことである。

引き戸が滑り、慣れた手つきで盆を持った弟が部屋に入ってきた。客と姉の分の珈琲を給仕すると、美少女二人の前で照れくさいのだろう、少し離れたところに腰を落ち着けた。ういヤツである。その緊張した様子には、獰猛な肉食獣に睨まれた子うさぎのような風情も若干見られるような気がするが、多分気のせいだろう。

泉は、香り立つ珈琲に手をつけず、おもむろに正座すると居ずまいを正した。兄をインチキサッカー選手に仕上げてくれという依頼を伝えるのである。自分のことである。胡桃も泉に倣い、崩していた足を直した。

「テルくん、カードゲームを教えて」

「照也(テルヤ)、カードゲーム……ん？」

訳の分からないことを言い出した泉に怪訝な目を向ける胡桃。その視界の端に、弟が身を乗り出すのが映った。

その42

モンスター・サモナーズ！

それはこの地上で最もエキサイティングなカードゲームである。

プレイヤーは五十枚一組のデッキ（カードの集まり）を駆使し相手プレイヤーと戦う。カードの効果で相手のＬＰ（ライフポイント）――持ち点のこと――を減らし、先に相手のＬＰを０にした方が勝ちである。数千種に渡る多様なカードを組み合わせれば、世界に一つしかない君だけのデッキが作られる。そのデッキとはすなわち君自身に他ならない。

「己をぶつけ合え、サモナー諸君！　未知の強敵、未知の戦いが君たちを待っている！　勇躍せよ！　ハーハッハッハッ！」

長い耳を翼代わりにしてパタパタと宙に浮かんだ子ウサギが天空から哄笑を降らせた。

胡桃（クルミ）・ザ・ライオンはよっぽどその背にワシの翼を生やして宙を駆け、弟の首筋にかみついてやろうかと思ったが、それよりも先になさねばならぬことがある。胡桃は泉（イズミ）の袖を引いた。珈琲に手を伸ばしていた泉は未練ありげな様子で席を立った。

引き戸を引いて廊下に出た胡桃は、どうして弟のテンションを上げるようなことを言い出したのか、泉に納得のいく説明を求めた。

「勝負の方法はね、カードゲームなの。知らない？　『モンスター・サモナーズ』って？」

知っているけど、知らない。小学生の間ではやっているトレーディングカードゲームだということくらいは知っている。なにせ弟がはまっているのだ。しかし、胡桃自身はプレイしてみたことはなかった。たまに弟が誘ってくることもあるが、言下に断った。胡桃は中学二年生である。刻一刻と容色が衰えていくこの時期に、カードゲームなどに打ち興じている時間などあろうか！

それはともかくとしても、美少女を奪い合う方法がカードゲームとはどういうことか。血で血を洗う決闘でも、汗を散らすスポーツ

でもなく、カードゲームだなどと。せいぜい唾が飛び交うくらいのものである。全く美しくない。
「二人に怪我させる訳にはいかないでしょ。平和的にいかないと」
胡桃はめまいがしてきた。ヒロインを取りあうのに平和的だなんて聞いたこともない。折角のもえる展開が台無しである。
「春樹(ハルキ)も中沢くんもどっちもやったことないから、ハンデは無し」
「ねえ、イズミちゃん？」
「なあに？」
「楽しんでない？」
泉はそば向くと頬を隠すように手を当てた。
――なぜ照れる？
「クルミちゃん、これにはちゃんとした理由があるのよ」
「そうでしょうとも！」
胡桃は脱力した。嫌な予感が見事に的中したのである。やっぱりアホらしい話になった。
「さ、クルミちゃん。テルくんにゲームのこと教えてもらいましょ。やるのは春樹(ハルキ)だけど、わたしたちも知ってた方がいいでしょ。その方がハルキに協力できるからね」
胡桃が嫌々ながら引き戸を開けると、部屋の絨毯の上に、カードの束――デッキ――が三つ置かれているのが見えた。
「一週間後に勝たないといけない相手がいるの。お兄さんが戦うから、主にお兄さんに教えてもらいたいんだけど、一応わたしとクルミちゃんにも教えてもらいたいのよ」
一つのデッキの前に座った泉が真面目な声を出すと、弟のまだあどけない顔が引き締められた。何かを決意したような顔である。
「よし！　一週間で姉ちゃんたちと兄ちゃんを一人前のサモナーにしてやるよ。でも、相当な努力がいるから、覚悟しろよな」
腰を下ろした胡桃の耳を強い声が打った。サモナーとは一体何のことを指すのか、まずそこから聞きたい。胡桃は夢も希望もある十三歳である。勝手におかしな職業につかされてはたまらない。

「サモナーが何かって？　それはサモナーになれば分かることさ」
弟はフッとニヒルな笑みを浮かべた。胡桃は思わず左手で自分の右手をおさえた。
それから、兄が帰ってくるまでの間、胡桃と泉はみっちりとゲームの基礎を叩きこまれた。希望を失った胡桃は興味の湧かないこともあってあんまりやる気が出ない。当然、覚えも悪い。鬼軍曹からの罵声が容赦なく飛んだ。
「姉ちゃん！　そのモンスター、まだ召喚条件が整ってないよ。まだ場に出せないってば！」
「姉ちゃん！　その魔法カードは、自分のターンじゃないと使えないんだよ。何してんの！」
「姉ちゃん！　罠カードはセットしたターンには発動できないんだって。それができたらセットする意味がないじゃん！　ちょっと考えれば分かりそうなもんだけどなあ。頭悪い人は勝てないよ」
教えを乞う立場でありながら、思わず瞳を開いて弟を睨みつけてしまう胡桃。両の手は固く握りしめられて、それを止めてくれる手はもう無い。もう少しで破門になりそうな暴挙をしてしまいそうなところ、ドアの開く音がして玄関から兄の声が流れてきた。

その43

部屋に入ってきた兄の方を胡桃(クルミ)は見ないようにした。見られなかったのである。顔を合わせられない。どんな顔をすればいいか分からない。恋路をひた走る妹の並走ランナーを買って出たことに関して、

「余計なお世話！」

と怒りの面を向けてやりたい気持ちもあるが、そもそも兄がそのような行動を取ったのは胡桃が泉(イズミ)に相談したことがきっかけであるし、また何より兄が自分の為に頭まで下げて小太郎(コタロウ)に食い下がってくれたということに関しては素直に嬉しいという気持ちもあるのだった。

矛盾した気持ちを合わせ持つ複雑極まる乙女心から胡桃が面を伏せている間に、兄はカバンを部屋の隅に置くと、泉に家に帰るよう促した。

「送ってく」

ぶっきらぼうに言う兄に泉は小さく礼を言ってから、

「老師、また明日も教えていただけますでしょうか？」

弟にうやうやしく声をかけた。

弟はうむと重々しくうなずくと、カードの束を専用の箱型ケースに入れて泉に手渡した。

「復習しておくようにね。明日は同じことを説明しないよ。中に説明書が入ってるから、忘れたことは確認しておくこと」

サモナーの標準装備をカバンに収めた泉が座を立って部屋を出ると、それに兄が続いた。兄が引き戸を閉めると、胡桃はほっとした。

「さ、姉ちゃん。なにボンヤリしてんのさ、続きやるよ。時間が惜しい。真のサモナーへの道は険しいんだから」

ずいっとひざを進めてくる少年。その頭が軽くこづかれる。

「何すんだよ！」

殴られた部分を手でさすりながら、いわれなき暴力を与えた相手をにらみつけてやった照也（テルヤ）だったが、
「え、えーと、もう一回、最初からおさらいしてみる、お姉ちゃん？　時間はたっぷりあるし、ぼくがうまく説明できなかったところがあるかもしれないし」
即、態度を改めた。
逆立つ黒髪、裂けた朱唇、身に纏う青白い闘気。
照也の目に映っていたのはまごうことなき鬼だった。
それから兄が再び帰ってくるまでの間、胡桃は心優しい弟から懇切丁寧にカードゲームのいろはを教えてもらった。
兄の帰宅後少しして父が帰ってきた。皆で夕餉の食卓を囲いながら、胡桃はちらちらと横目で隣の席にいる兄を窺っていた。ひとつ疑問がある。兄はなにゆえ妹の騎士役を引き受けたりしたのだろう。泉の奇計に巻き込まれただけ。そうだろうか。そもそも泉に胡桃の様子を見るように言ったのは兄なのだから、とすれば、兄自身が胡桃のことを心配していたことになる。先日のデートの件で、兄が自分のことを気にかけていたということは分かっていたが、それにしても騎士になって戦ってくれる――カードバトルではあるが――ほどとは思わなかった。
妹を想う兄――
――も、もしかしたらっ！
夕食を終えてから、入浴の時間となって、浴槽につかっているときに胡桃の妄想機関に火が入った。彼女の妄想機関は実に簡単に起動するのである。
兄は自分のことが好きなのではあるまいか。その「好き」は普通の「好き」ではない。妹に向ける普通の感情以上のものを抱いてしまっているのである。すなわち愛、そう禁断の愛である。
胡桃は足先で水面を跳ね上げた。ちゃぷちゃぷという水音とともに湯が浴室の壁に散った。
それは決戦前夜のことである。灯りを消した室内の窓辺、椅子に

座った兄は月明かりだけを頼りに剣の鋼……いやもとい、カードのプラスチックを入念に磨いている。戸が開いて廊下の明かりが少し室内を浸す。光の中に現れる小柄なシルエット。張り詰めた雰囲気の兄におずおずと近づいていく妹。
「お兄ちゃん……」
可憐な声に、兄は手を止めて妹を見る。
半ば闇に溶けた少女の影が真ん中から折れる。どうやら頭を下げているようだ。兄は眉をひそめる。
「ずっと言いたかったことがあるの」
頭を上げた胡桃がまっすぐに兄を見る。
「ありがとう。いろいろとわたしのために」
兄はカードを机に置くと無言で立ち上がり妹に近づく。
「お、お兄ちゃん？」
背に腕が回り、抱きしめられる胡桃。その耳元に鳴るかすかな囁き。
「……好きだ」
「え？」
「ずっと好きだった」
言葉の意味が分からず混乱する胡桃。兄の告白は妹に向けるものではなく、まるで恋する人に向けるかのような熱を帯びている。
「オレは負ける気はない。お前はオレのものだ。誰にも渡さない」
「な、なに言ってるの、お兄ちゃん？」
息苦しくなるほど強く抱きしめられる胡桃。
「クルミ、オレが勝ったら結婚してくれ」
「……お兄ちゃん、兄妹じゃ結婚できないのよ」
「なに、そうなのか？　誰が決めたんだ」
「多分、法律で」
「くっ、なら、オレは法律を変えてやる。お前と結婚するために。オレは総理大臣になる！」
胡桃は浴槽を出た。妄想機関は正しく機能しなかったようである。

どうやらできる妄想にも限界があるらしい。仕方がない。とりあえず兄が騎士になった理由については普通の兄妹愛ということにしておいた。大体にしてそもそもがシスコン兄など願い下げであった。

その44

その昔、中国に呉子という兵法家がいた。彼は生涯に七十余戦して一度も負けなかったそうである。なぜ負けなかったか。それは負ける戦をしなかったからだ。確実に勝算の立つ戦いしかしなければ、負けることはない。

「呉子曰(いわ)く、『およそ戦いの要は必ずまずその将を占いて、その才を察し、その形に因(よ)りてその権を用うれば、すなわち労せずして功挙がる』と」

マスター・テルヤに弟子入りした翌朝の通学路である。まるで幼稚園児が水色の絵の具で思うさま塗りたくったような爽快な青空に、太陽がきらきら輝いている。

「胡桃(クルミ)ちゃん。聞いてる？」

胡桃は傍らを自転車で走り去る女子高生を見ていた。黒髪をなびかせて颯爽と走る姿がカッコいい。

「戦いの要点は、敵をよく調べてその才能を見抜きそれに応じて対応すること。そうすれば、苦労することなく勝てる。そういう意味なのよ」

ふーん、と胡桃は生返事を返した。何だか良く分からなかったが、隣を歩く先輩女子がおかしな人だということは良く分かった。いや、再認識したというべきか。

「泉(イズミ)ちゃんはスゴイね。お経まで知ってるんだから。好きな人とうまくいくヒミツの呪文とかも知ってるの？」

「いや、お経じゃないからね。昔の中国のエラい人が言った言葉。友だちに古代中国のことが好きな子がいてね。その子から教えてもらったのよ」

泉が言う。三年生とは恐ろしい人種だと胡桃は思った。インチキマジックを使う魔法少女だけでなく、なんじゃもんじゃのお経めいたものを自在に操る少女（あるいは少年）までいるとは。他にもど

んな能力者がいるか分かったものではない。あんまり、三年生の教室には近づかない方がよさそうだ。

「クルミちゃんの話から中沢くんの人物像を分析して出した答えがこの勝負なわけです。中沢くんはクルミちゃんのこと嫌ってない。むしろ仲直りしたいと思ってる。でもプライドがそれを許さない。そこで勝負を持ちかける。男と男の真剣勝負ならともかく、カードゲームなんていう遊びみたいなものだったら負けたって言い訳が立つ。むしろ負けてやった方がカッコいいくらいに、男の子なら思うはず。念のためこっちがカード上級者に必勝法を教わっておけば万が一にも負けることはない」

泉はニコニコしながら、カードゲームを持ちかけた理由をもっともらしく語り、必勝のシナリオまで聞かせた。既に彼女の目には、胡桃と小太郎（コタロウ）が手に手を取って仲を修復する図まで見えているようである。

――そんなことになんのかな……？

泉の話は妄想めいてるゾと、散々妄想じみたことを考えている胡桃は自分のことを棚に上げつつ、しかしそう感じたのだった。泉の予想は楽観的に過ぎるような気がする。小太郎を甘く見ているのではないか。仮に泉の言う通り、小太郎がどこかで胡桃を許したい気持ちがあって今回の勝負を受けてくれたのだとしても、いったん受けたからには、正々堂々の限りを尽くしてくるだろう。勝つために最大の努力をするに違いない。そういう物事にまっすぐに取り組む誠実さが彼の特質ではなかろうか。

胡桃の想像を裏付けてくれたのがその日の昼休みのことだった。

昼食後手洗いに立った胡桃が廊下を歩いていくと、前から小太郎が来る。気まずくて下を向きながら通り過ぎようとしたところ、

「クルミちゃん」

思いがけず向こうから声をかけられた。彼に呼ばれるだけで、自分の名前が世界一美しい言葉ででもあるかのように聞こえるから不思議であった。そのあとに、続けられるのが甘い睦言（むつごと）であったなら

どんなに良かったか知れない。
「話は聞いてると思うけど、お兄さんと一週間後にカードゲームで勝負することになったから、それまではもう話しかけないでね。敵同士が話すっておかしいでしょ」
そこで言葉を切ってから、
「これはクルミちゃんとボクの問題だと思うけど……でもいいお兄さんを持ったね。死力を尽くすつもりだってこと、お兄さんに伝えてください」
それだけ言うと、胡桃が何か答えるのを嫌うかのように、小太郎は早々にその場を後にした。
現実はこんなところである。
恋人から宣戦布告を受けるヒロイン。自分の予想が当たって納得したものの、厳しすぎる現実にそこはかとなく泣きたくなってくる胡桃だった。

その45

しかし胡桃(クルミ)は泣かなかった。見てくれる人がいないところで泣いてもしょうがない。女の子の涙はここぞという時の為に取っておかなければならないのだ。そうそう無駄遣いはできない。

胡桃はいじらしく悲しみに耐える淑女めいた自分に大きな満足を覚えながら、一日の業を終えて家に戻った。

「遅いよ、姉ちゃん！　学校終わったら速攻で帰って来いよな！」

開いたスチールドアのギコギコ音に応えるようにして玄関先に現れた弟が、目尻を吊り上げている。

姉を睨みつけてくる愛らしい弟。胡桃はその額にデコピンをお見舞いしてやりたいという気持ちをどうにかこうにか抑えつけた。レディはそんなはしたない真似はしないものである。

「兄ちゃんたちはもう来てるよ。一番できないくせに一番最後に来るって、どういうリョーケンだよ」

胡桃は考えを改めた。よくよく考えてみれば、「女はしとやかにしなければいけない」などというのは男性中心の女性観である。承服しがたいものがある。どころか、女性の社会進出著しい現代にあっては時代錯誤もはなはだしい考え方ではなかろうか。立ち上がれ、世の女性たち！

即席フェミニストになった胡桃が弟のふわふわした黒髪に手をのばしかけたところ、弟はひょいっと一歩ステップバックして、姉の髪つかみ攻撃をかわした。

「ダッシュで来いよな」

背を見せる弟。胡桃は大きく深呼吸して心を落ちつけたあと、自室で荷物を下ろし部屋着に着替えてからトレーニングルームへと向かった。

愛の鞭という言葉がある。愛しているからこそ厳しく当たるというものだが、当たられている方からすれば、それが果たして愛か憎

しみかは分かったものではない。それを決めるのはひとえに二人の間の信頼関係である。胡桃は弟との間に大した信頼関係が醸成されていないのをひしひしと感じた。

「聞いてよ、咲子(サキコ)ちゃん！」

実に二時間の間、ゲームの基本戦術、各種カードの効果、サモナーとしての心得を叩きこまれた上に、あげくの果てに、

「何より自分のカードを信頼すること。信頼すれば必ず応えてくれる。これはカードも人も一緒だね」

などと説教めいたことまで語られてへろへろに疲弊した胡桃は妹に癒しを求めた。昨日と同じように、兄は泉を送るために家を出ている。

「照也(テルヤ)がお姉ちゃんをいじめるの」

思いきり弟にヘッドロックを極めてやってから帰った自室で妹に切々と哀れな身の上を訴えたところ、妹は座っていた椅子をおもむろに下りた。それから絨毯に正座した。胡桃にも座れという。あどけない顔を真剣なものにしている妹の不思議に厳かな雰囲気に、胡桃も思わず着座して居ずまいを正した。

「知らないよ」

円形電灯の光の下で、妹は静かに切り出した。

「わたしは事情はよく知らないけど、でも、テル兄はお姉ちゃんに協力してるんだよね？　だったらさ、テル兄に文句とか言っちゃいけないんじゃないの。むしろ感謝しないと。そうでしょ？　お姉ちゃんはどう思う？」

気のせいか、母そっくりの口調だった。母が胡桃を叱る場面を見る機会が多かったせいだろう。いや、そんなことより、

「なんでサキコ、怒ってるの？」

ということが疑問である。

慰めてもらいたかったのに怒られては期待はずれもいいとこだ。

胡桃が口を尖らせると、妹は抑えた口調で言った。

「今朝の登校のときにテル兄がずっとくっついてきて、お姉ちゃん

の文句言ってたの。『教えてもらってくるくせに態度がでかい』とか『覚えが悪くていらいらする』とか『天パー』とか、いろいろ、ずーっとね。ずっとだよ。朝からそんなの聞かされる身にもなってよ。それに校門くぐっても離れないから、テル兄と一緒にいるところ友だちに見られちゃってさあ。兄と一緒にいるところ見られる恥ずかしさ、お姉ちゃんも分かるでしょ。おかげで今日一日クラスでブラコン扱いされて大変だったんだから」

前半の言葉でにわかに弟に対する怒りがマックスになった胡桃だったが、後半の言葉でその怒りの気持ちごと心が破砕された。姉がその唾棄すべきブラコンだと知っても、それでも妹は変わらず、姉を愛してくれるだろうか。

「ね、だから、お姉ちゃん……あれ、どうしたの？」

「いえ、何でもないです……」

「そお？　とにかく、テル兄に関わるなら優しくするようにして。何でカードゲームに突然目覚めたんだか知らないけどさ、一応お姉ちゃんが頼んだ方なんでしょ？」

意気消沈した胡桃は諾々とうなずいた。

その46

胡桃（クルミ）は妹の言葉で悔悟した。そうして心を入れ替えた。なりゆきはどうあれ、今回の件には胡桃自身の意志が確かに通っている。とすれば、弟が多少横柄で傲慢でムカついて、ときに首をしめてやりたくなったとしても耐えるのが筋である。胡桃は刃の下に心を置くことを決意した。今の屈辱を忍ぶのは、明日の栄光を勝ち取る為である。

――終わり良ければ全てよし！

そのために、胡桃はサモナーになることを決めた。胡桃にはいろいろとよろしくない性癖があるものの、彼女が行動の人だということは評価してやらねばならない。妹のアドバイスを容れたその夜から胡桃はカードに全力を注いだ。寝食を忘れた。睡眠時間は六時間へと激減し、夕食後の夜食を取ることもやめるほどであった。学校にはさすがにカードを持ちこめないものの、ゲームの説明書でルールの復習に努め、弟手製の指南書でスキルを貪欲に吸収した。休み時間だけではなく授業中にもカードに没頭していたせいで、授業が分からなくなったが、

――そんな場合ではないのだ！

学業より恋を取ることになんらのためらいもなかった。というか学業の方はそもそもどうでも良かったのではないかという説もある。

勝負に臨むのは胡桃自身ではなかったわけだが、兄のバックアップをするためにはカードのことを良く知っていた方が良いし、やっていると気が紛れるのだった。何であれ、できることがあるというのは良いものである。また、兄に悪いという気持ちもあった。突然、望んでもいない騎士役を任命された兄がひとり厳しいトレーニングを続けている。それを横でボケっと見ているだけなどということは到底できなかった。

その兄とは、しかし、ほとんど口を利いていなかった。もともと

あんまり話す兄妹ではないが、さらに話す機会は減った。胡桃が話をするのを避けたのだった。まともに話をしようとすれば、どうしても今回の件に言及することになって、それがなんだか気恥ずかしい。

「ありがとう、お兄ちゃん」

その一言が言えなくて、

「トラップカード『反撃の竜軍』発動！　このカードは相手が攻撃宣言をしたときに発動することができる。ＬＰ（ライフポイント）を１０００、コストにすることにより、攻撃宣言した相手モンスターカードを破壊し、自分の手札から竜の名の付くモンスターカードを場に召喚することができる！　これで形勢逆転だね、お兄ちゃん！」

などということを兄とのカード対戦時に言って、フハハハハと高らかな嘲笑を浴びせてやるのが精一杯の所だった。

「もう一回だ、クルミ」

勝負に負けて悔しがる兄に、

「ふっ、三流サモナーめ。わたしが相手をするまでもないわ。ゆけ、我が一の配下、イズミ・ザ・ウイッチよ。この身の程知らずに己の実力のほどを知らしめてやるがよい」

素直になれず憎まれ口を叩いてしまうのは、可憐な乙女心の為せるわざである。

そうこうしているうちに、日はするすると過ぎていって、決闘期日の前日となった。その日は土曜日で休日だったため朝からトレーニングをして過ごし最後の調整を行っていた。兄は午前中に部活があったため午後からの参加である。夕闇がそっとしのびこんできた頃に、弟の「そこまで！」というトレーニング終了の声が響いた。

「本当に良くがんばったね、みんな。もうどこに出しても恥ずかしくない立派なサモナーだよ」

サモナーであること自体が恥ずかしいという頭がいまだある胡桃だったが、いまさら師に口応えなどはしなかった。

マスター・テルヤはひとり椅子の上であぐらをかいたまま、絨毯

の上に正座をしている三人の弟子たちに最後の訓戒を施した。
「ハル兄はあんまり慎重になりすぎないこと。先を読むのは大事だけど時には直感に従った方がいい場合もあるからね」
「イズミ姉は相手を罠にはめることばかり考えないこと。罠にかけるのは目的じゃなくて、あくまで勝つための手段に過ぎないんだからね」
「クルミ姉は調子に乗らないこと。勝負は最後の最後まで分からないんだから、優勢になってもクールにね。常にクールに自分を保つこと」
三人は揃って頭を下げ、この数日間の指導に対して謝辞を呈した。
胡桃は夕飯を済ませて入浴したのち自室に籠った。布団の上でごろごろしながら、自分のカード――弟が選んでくれたもの――の効果を確認したり、師から頂いた指南書を復習した。明日、自分の恋の行方が決まるのかと思うとドキドキするものがあるが、決め方があんまりロマンチックではない上、しかもよくよく考えてみると勝った方が負けた方にヒロインを渡すという取り決めなので、なんだそりゃという感も多分にあった。とはいえ、チャンスには違いないのだ。それを活かすために胡桃ができることはやった。あとは兄に任せるしかない。
寝転がった状態からふと目を上げると、窓外にふっくらとした月が浮かんでいた。起き上がった胡桃は窓際に寄って白い月光を浴びると物憂げに夜空を見上げた。可憐な美少女が憂いに沈むという最高のシチュエーションであったにも関わらず、禁断の告白をしに兄が部屋の戸を叩くというようなことはついに起こらなかった。

その47

いよいよ決戦当日。
胡桃（クルミ）は城の前に立っていた。
無論、本物の城ではない。城のような威容を備えた豪奢な邸宅である。洋風三階建てのその建築物は、まだ夕暮れには少し早い薄青い空をバックにして、はるかな高みから胡桃を睥睨（へいげい）していた。
泉（イズミ）の家である。
「ここに来るたびにフォーマルドレスが欲しくなるんだよなあ」
門前に佇む胡桃が嘆声を落とすと、門の横にある通用口が開いて泉が姿を現した。招きに応じて胡桃が門内に入ると、そのあとに兄と弟が続いた。煉瓦敷きの道を歩いていると、ホステス役の少女は、あとでドレスを一着プレゼントする旨、胡桃に笑いかけた。どうやら聞こえていたらしい。
「やめてくれよ、イズミ姉。そんなことされるとこっちが迷惑する。無理矢理、『可愛い』って言わされる身にもなってよ」
後ろから弟が口を出した。胡桃はギラリと目を光らせたが、残念なことに、弟は注意深く姉の間合いの外にいた。胡桃は心の闇魔帳に今の弟の言葉を大きく書き記しておいた。
「女の子に『可愛い』って言うクセは今のうちからちゃんとつけておいた方がいいよ、テルくん。そうしないとお兄ちゃんみたいに後から苦労するからね。ね、春樹（ハルキ）？」
兄は庭にある立ち木に興味を惹かれたような顔をして聞いていない振りをした。
ゆったりとした玄関から家の中に入ると、胡桃たち三人は庭を一望する和室に通された。大きなテーブルがでんと鎮座していて、午後の光を受けテカテカと輝いている。そこが決戦の場だった。決闘場を泉の家にしたのは当の泉の申し出による。戸外では落ち着かないし、かといって当事者のどちらかの家では公平を欠く。ここは第

三者の自分の家ではどうだろうか、と完全に胡桃サイドであるくせに知らぬ顔で小太郎（コタロウ）に伝えたところ、相手からは二つ返事が返ってきたということだった。

「場所を用意してくれたのはありがたいけど……」

邸の豪華さで小太郎の意気をくじこうとしても多分無駄である。泉が社長令嬢宅を提供してくれたことに対して何らかの底意（そこい）があるのではないかと疑った胡桃が、そう言って探りを入れてみたりしたが、泉は笑って答えなかった。決闘開始時刻を午後四時というディナータイムに近い微妙にハタ迷惑な時刻に設定したのも謎である。胡桃はテーブルの傍に腰を下ろすと、雑念を脇に置いた。運命の時刻まであと三十分ある。兄のウォームアップを手伝わなければならない。

畳の上で対戦したところ、胡桃は危うく勝ちそうになってしまって慌てたが、終盤で首尾よく兄の策にはまり胸をなでおろした。戦う前に負けるイメージを持たせてしまうのはうまくない。横から見ていた弟は満足そうな声を出した。

「いい戦いだったよ。相手は初心者なんだよね？　こっちも初心者だけど、おれがみっちり鍛えたんだから、兄ちゃんは中級者に近い初心者さ。楽勝だね」

事の重大さが分かっていない――知らせていないのだから当然だが――弟は気楽な声を出した。弟がついてきたのは兄の参謀役を務めるためである。これはどちらかと言えば小太郎サイドの申し出だった。ひとり付き人を連れてきたいという彼の希望を受け入れた形である。決闘の場に連れてくるということはおそらくカード通の友人か何かだろう。

「兄ちゃんに勝てるとしたら、同じおれが教えたイズミ姉かクルミ姉くらいのもんだよ」

弟がリラックスさせるように兄の背をぽんぽんと叩くと、兄は微笑をもらした。沈毅な兄は、弟と違って、この勝負を気楽に考えてるわけではないだろうが、ここ数日間のカードへの取り組みに自信

があるのだろう。ひとり胡桃だけが緊張していた。胸がざわざわとしてなんだか落ち着かない。他ならぬ自分自身のことであるということもあるが、なにより小太郎はそんなに甘くないのではないかという不安がある。

「死力を尽くすつもりだ」

と彼は言った。ならば、その言葉通り、それ相応のことをするに違いない。言葉に責任を持たなかった胡桃を責めた小太郎であれば、人一倍言葉に責任を持っているハズである。そうでなければウソだろう。

時刻通りに小太郎は現れた。

そうして胡桃は自分の想像が正しかったことを知る。

泉に連れられて室内に足を踏み入れた小太郎は厳粛な雰囲気を身にまとっていた。国際試合に臨むナショナルチームのメンバーでもあるかのような張り詰めた面持ちである。小太郎は、兄の前まで来ると、無言で軽く頭を下げてから、握手を求めた。やはり無言で小太郎の手を取る兄。その兄のほんの二歩ほど後ろに控えている胡桃は、一顧だにされなかった。無視されたような格好でちょっと寂しくなった胡桃だったが、悪意が無いことは分かっていた。ホイッスルを待ってフィールドで身構えているときに、観客のことなど気にしていられない。そういうことだろう。

「お、お前、な、何でこんなところに！」

重たい沈黙を、弟のすっとんきょうな声が打ち破った。

小太郎に気を取られていたせいか、全く気に留めていなかったが、もう一人来客があった。小太郎の少し後ろに、ひとりの少女が立っている。小学校の高学年くらい、ちょうど弟くらいの年の女の子だった。小太郎の同行者ということは、カードのアドバイザーなのだろう。てっきりカードに詳しい同学年の男友達を連れてくるものだとばかり思っていた胡桃は軽く驚いたが、照也の方はほとんど卒倒せんばかりの表情である。

「知ってる子？」

「知ってるも何も……」
弟は驚愕の表情をすみやかに改めて、瞳に強い光を溜めた。
「おれのライバルで……そして、この町で最強のサモナーだ」

その48

「え、じゃあ、もしかしてあんたが一回も勝ててない子？　『氷の女王』だっけ？」
照也（テルヤ）は嫌な顔で、不用意な発言をした姉を見た。
どうやら当たりである。
胡桃（クルミ）は、椅子に座り込んで真っ白に燃え尽きていたいつぞやの弟の様子を思い出した。
カードクイーンはすたすたと畳の上を歩いてくる。
背を覆う豊かな黒髪が扇のように広がった。
「こんなとこでキグウね、テル」
口元に笑みを作る少女に、
「ここで何してるんだよ、早瀬（ハヤセ）！」
照也は攻撃的である。
「弟子のバトルを見届けに来たの」
「弟子だって？」
少女はほっそりとした手を小太郎（コタロウ）に向けた。
照也は唇をなめた。
「お前が教えたっていうのか？」
「そう。一週間だけだけどね。ただ、その辺のインチキサモナーでは相手にならないくらい鍛え上げたつもり」
早瀬は女王の呼称にふさわしい優美な切れ長の目をめぐらせて、胡桃と春樹（ハルキ）を見た。
そして、ふふん、と笑ってみせた。
照也はカッとした。
「おれの弟子がインチキかどうか、やってみれば分かる」
「やるまでもないけどね。所詮カエルの弟子はカエル。竜の弟子は竜。相手にならないわ」
「何でお前が竜なんだよ。それにな、知らないのか、カエルだって

滝を登れば竜になるんだ」
「それ、コイでしょ」
「魚にできてカエルにできないことは無い！」
きいきい言い出した弟の隣で胡桃が、
――なんか変なの始まったなあ。
と傍観していたところ、喧騒に全く関心が無いかのような様子で小太郎がその場から離れた。泉（イズミ）に自分の座を尋ねてテーブルを回る。回って座布団の上に腰を下ろした小太郎と胡桃は一瞬、目が合った。視線と視線がかすって、しかしそれはからまることなく離れた。小太郎は自分のカードの確認を始めた。
胡桃の耳に弟の不審げな声が聞こえた。
「どういう関係なんだよ？」
「気になる？」
「別に！」
「……わたしの通ってるフットサルクラブの先輩よ。どうしても『モンスター・サモナーズ』で勝たなければいけない相手がいるからって、一週間前に頼まれたの。お世話になってる先輩に頼まれたら否（いや）も応もないでしょう。しかも、聞けば、戦う相手があなたのお兄さんでしょ。とすれば、当然あなたがからんでくる。それを知ったらなおさら」
「どういうことだよ？」
「分かんないの？　弟子同士の戦いでもあなたはわたしに負ける。あなたはわたしに負け続ける運命なの。それを教えてあげたくて」
照也は絶句した。
「な……な、なんてヤな女だ。姉ちゃんと良い勝負だ」
胡桃は弟の不適切な発言を再び闇魔ノートに大書した。
「でも安心して。テルが教えそうな戦略については、中沢先輩には教えてないから。さすがにそこまで教えるとフェアじゃないからね。勝負はフェアじゃないと面白くない」
早瀬はゆったりとした口調で言った。

照也は腰に下げたホルダーから箱型カードケースをしゅたっと取りだした。
「その余裕がイライラするぜ。いつまでも以前のおれだと思うなよ、クイーン！　おれは日々強くなってるんだ！」
「面白い。超えられぬ頂上の力というものをもう一度教えてやろう、消えない恐怖の記憶と共に」
手にしていたポーチから箱型カードケースをごそりと抜き出す少女。
にらみ合う二人。
今まさに切って落とされんとするもう一つの戦いの火蓋（ひぶた）。
しょうもない！
完全に二人だけの世界に入ってしまった照也と女王様をどうやって現実の世界に引き戻そうか、とりあえずほっぺたでもつねってやろうかと思った胡桃だったが、その必要はなかった。テーブルの向こう側に座を占めている小太郎が、「ハヤセちゃん」と静かだが鋭い声をかけると、少女は手にしていたカードケースをポーチの中に戻した。
「命拾いしたね」
早瀬は、奥歯を噛みしめる弟の前から離れ、テーブルを回ると小太郎の少し後ろに控えた。
「絶対あいつ、おれのこと好きだよ」
弟は憤然とした声を出すと、兄の袖を引いた。
「悔しいけど、あいつは強い。あいつがあっちについたってことは、楽勝ムードじゃなくなったってことだ。気をつけて、兄ちゃん」
兄の顔が引き締まった。
やはり小太郎は言葉通り最善を尽くしてきた。不安が的中してしまって、しかし胡桃はどこかで嬉しい気持ちもあった。この勝負に勝つためにカード上級者に教えを乞うたということは、一見、是が非でも勝負に勝って胡桃と別れたい、そういう意志表示だとも考えられるが、それだけではないだろう。小太郎の中では、勝負を受け

るということは、勝つ為に最大限の努力をするということとイコールなのだ。それはいかにも小太郎らしいように胡桃には思えた。

「あいさつはもういいわね。じゃあ、始めましょう」

進行役を買って出た泉の声が勝負の開始を告げた。

その49

ゲームは五戦して先に三勝した方が勝ちとなる。一戦終わるごとにしばしの休憩が設けられ、アドバイザーからのアドバイスを受けて、予備のカードと入れ替えたり、作戦を練り直したりすることが許される。

「まずは様子を見てね、兄ちゃん。五回戦えるんだから焦る必要は無いよ」

弟の指示に兄は重々しくうなずいた。

胡桃（クルミ）は、整然と座して自分のデッキ（カードの集まり）の最終チェックをしている小太郎（コタロウ）を見ていた。その姿勢にゆるみはない。茶番に付き合わされてなお凛としたその姿に、胡桃は惚れぼれとしたものを覚えた。と、そのとき、ふと顔を上げた小太郎と胡桃は目が合った。今度は時間にして数秒見つめ合っていた。想い人と瞳と瞳を合わせるというロマンチックこの上ない状態だったが、胡桃は胸の高鳴りを覚えたりはしなかった。小太郎の綺麗な瞳にどこか寂しそうな色が漂っているように見えたからである。

――まるで別れを惜しむかのような……。

胡桃は思わずしてしまった自分の空想に自分でゾッとした。小さく首を横に振る。妄想もいい加減にした方が良い、と胡桃は己をたしなめた。

兄が座布団の上に正座した。

テーブルの向こう側にも同じように正座している少年。

対峙する二人は互いに軽く会釈した。

初戦が始まった。

それぞれが代わる代わる自分のデッキ――山札――から、一枚ずつカードを手札に加え、必要なカードを場に出して使用していく。カードの効果で相手のライフポイント――持ち点――を減らしていき、先に相手のポイントをゼロにした方が勝ちになる。ゆるゆると

した日が差し込む室内に、カードをめくる音と、カードの効果を相手に対して読み上げるプレイヤーの声が静かに響いた。
弟の指示通り様子を見ようとゆっくりとプレイする兄に対して、小太郎は即断即決だった。繰り出す一手が驚くほど速い。兄がどういう戦略を持っているのかなど考えもしないような様子で大胆不敵なプレイである。初戦は向こうの勢いに押し切られる形で兄の敗北に終わった。
「あいにく、せこい戦い方は教えてないの」
早瀬（ハヤセ）がその愛らしい花唇から嘲るような言葉を放った。
両陣営はそれぞれ部屋の隅に別れた。
「ごめん、兄ちゃん。あいつの言う通りだ。様子見なんかせず、全力で行けば良かった。でも、そのおかげであっちの戦略は分かった。次は勝つよ」
そう言って、いくつか指示を与える照也（テルヤ）。カードも何枚か入れ替えたようである。
胡桃は第二戦の行方よりも気になっていることがあった。小太郎の視線である。第一戦が繰り広げられているとき、兄が自分の手を熟考しているときに、何度か小太郎に見られたような気がする。無論、気がするだけで、自意識過剰なだけかもしれないが、
――そうじゃないとしたら……？
なぜ見られていたのか分からず胡桃は首を捻った。顔に何か変なものでもついているのかもと思って、手鏡を取り出して見ていたら、横から弟にうさんくさそうな目で覗き込まれた。
「いや、違うよ、テルくん。そういうんじゃないからね」
胡桃は慌てて弁解口調で言ったが、命の取り合いをする決闘の場で顔なぞを気にしている小娘に対して、師匠の視線は冷ややかだった。
「じゃあ、そろそろ――」
泉が第二戦の開始を告げた。
小太郎は相変わらずあまり考える様子を見せずにパッパッと手札

を使った。兄はゆったりと考える時間をもったプレイである。初戦と同じ展開のようにも見えたが、今回は押し切られることはなかった。弟の助言が利いているようである。小太郎の攻撃を受け流しつつ反撃し、終わってみれば大差をつけて兄が勝っていた。

再びの作戦タイムである。部屋の隅でまた視線を感じた胡桃だったが、それは想像上のものだったらしい。小太郎は向こう側の隅で胡桃に背を向けて女王とひそやかに作戦を練っていた。

「よし。流れは取り戻したよ、兄ちゃん。今の感じでいい。でも、気をつけて。ハヤセがあっちについてるってことはこのままで済むはずないからね」

弟の言葉に、兄は神妙な面持ちでうなずいた。

兄が勝負のテーブルに戻り、その少し後ろで控えるようにすると、先にテーブルについていた小太郎とまともに目があった。

小太郎は明らかに胡桃を見ていた。

胡桃の胸が早鐘を打ち始めた。

――わたしを呼んでる。

誘(いざな)っている。そんな気がした。どこへ、ということは考えるまでもない。先ほどからの視線の意味に、小太郎の気持ちに、ようやく胡桃は気がついた。あるいはそれは単に胡桃自身の気持ちだったのかもしれない。小太郎の気持ちを読みとったというよりは、彼を通して、胡桃はただ自分自身を見たのかもしれなかった。

第三戦の開始を宣言しようとした泉(イズミ)の声に胡桃の声がかぶった。

室内の視線が一斉に胡桃に集まった。

「え？　今何て、クルミちゃん？」

呆気に取られる泉の声を聞きながら、胡桃は自分のカードケースを掲げてみせた。

「選手交代。ここからはお兄ちゃんに代わって、わたしがやる」

その50

「ええっ？　何言ってんの、姉ちゃん！　選手交代なんてナシに決まってんじゃん。チーム選じゃないんだからさ。大丈夫？　酔っぱらってんの？」

ピーチクパーチクかまびすしい弟を、断固としたシラフの目のひとにらみで黙らせた胡桃（クルミ）は、ついで兄に目を向けた。妹を見上げる兄の瞳はしばし戸惑いに波立っていたが、やがて穏やかになった。兄はゆるやかに一つうなずくと静かに座を立って試合から退いた。

進行役の泉（イズミ）が小太郎（コタロウ）に、胡桃の提案を呑むかその意志を確認したところ、小太郎は驚いた様子も見せずに平然とうなずいてみせた。

――やっぱり……？

思った通りだったのだろうか。小太郎の気持ちを読み取ることができたかも、という思いからにわかに湧き起こってきた興奮を胡桃は抑え込んだ。本当の所はどうだか分からないのである。ただ、例え小太郎の気持ちがどうであっても、この行動は正しいことのように思われた。それだけは確信があったし、また残念なことに、どうやら胡桃は大人しく助けを待って満足するようなおとぎ話のお姫様然とした気質ではなかったらしい。自ら剣を取る方が彼女の性に合っていた。

「姉ちゃん、作戦を」

唐突な選手交代に訳が分からないながらそれでも応変に対処しようとする健気な弟に、胡桃は小さく首を振った。助言は必要ないというサインである。残り三戦はひとりでやらせてもらいたかった。おそらく小太郎もそれを望んでいる。想い合う二人の間に邪魔はいらない。そういうことである。

弟は渋い顔をした。それもそうだろう。今回の一件に関してほとんど事情を知らせていない上に、話と違う勝手な展開である。胡桃は素直に「ごめん」と謝って、ことが終わったらお詫びに抹茶味の

豆乳をおごることを約束して、いっそう弟の顔を渋くさせた。
胡桃は腰を下ろして座につくと、カードケースから五十枚からなる自分のカードの束を抜き、小太郎にまむかった。視線を受け止める小太郎。胡桃はまともに想い人と見つめ合う格好になったわけだが、彼の目は真剣そのものであって、それはもちろん勝負への思いを表しているのであるから、ドキドキしている場合などではなかった。
「始めてください」
改めてかかった開始の声に、胡桃はデッキ――山札――からカードを引いた。心なし指先が震えるような気がする。兄を応援する立場という半当事者から真の当事者の立場に立って初めてこの試合の重大さが理解できた。勝てば小太郎と元の状態に戻れるが、負ければそれっきり。勝敗によって恋人の得失が決まるという厳しい現実が、肌で感じられるプレッシャーとなって胡桃に襲いかかってきた。
厳密に言えば、「負ければ別れる」という条件ではなく、「負ければ二人の仲をどうするか小太郎に預ける」という条件なのだが、負けた場合に元に戻れる可能性は極めて低いと胡桃は見ている。低いどころかおそらくゼロである。そういう条件でないなら勝負自体の意味がなくなってしまう。小太郎は意味がないことをするような人ではない。皮肉なことに、一緒にいたときよりも、離れた今の方が、小太郎の人となりをずっと性格に把握できるような気がした。
――勝つしかないんだ。
その緊張が思考から柔軟性を失わせた。対して小太郎は真剣勝負を二戦経てエンジンがかかっている。胡桃は呆気なく第三戦を落とした。
「何やってんだよ、姉ちゃん！　これまでやってきたこと忘れたのか？　いつもみたく後先考えないで、アホみたくやればいいんだよ！」
弟の激が飛んだ。
怒りの気持ちを持たせることで姉の緊張を解こうと考えたのであ

れば、弟は大したサポーターである。不甲斐ない弟子への単なる苛立ちプラス姉への純粋な悪口である可能性もあるが、胡桃は好意的な解釈をしてやることにした。なんにせよ固くなった胡桃の気持ちは見事にほぐれた。

胡桃は大きく息を吸った。

弟の言葉で気がついたことがある。それは、これまでしてきたアホらしいトレーニングは一体何の為にやってきたのか、というそのことだった。兄のサポートをするため。無論それはその通りであるが、では、それは何のため？　言うまでもない。小太郎ともう一度やり直すためである。

胡桃は静かに息を吐いた。

もう一度やり直したいと思うほどに小太郎のことが好きで、そうしてその気持ちを表現できる絶好の場がこの決闘テーブルなのだった。自分もこの日の為に精一杯努めたのだということ、小太郎との関係を真剣に考えたのだということをアピールしなければならない。その気持ちを伝えられずに勝負に勝ったとしてそれが何になるだろう。勝ち負けはむしろ問題ではない。

いつしか指の震えは止まっていた。

胡桃の胸に涼やかな風が吹く。

第四戦の十五手目、胡桃のターン。

「モンスターカード『緑目の怪物（グリーン・アイド・モンスター）』でプレイヤーに直接攻撃！」

接戦の末、第四戦は胡桃が取った。ほっと一息ついた胡桃の目に、小太郎の顔が映る。気のせいか、少し彼の顔がやわらいでいるように胡桃には思えた。余裕であろうか、それとも……。その表情の意味するところを考えているヒマはなかった。

すぐに最終戦が始まった。

その51

息詰まる緊迫した雰囲気の中にあって、胡桃（クルミ）は不思議に落ち着いた気分でいた。気負いも焦りもなく、なんだったらちょっと楽しくなってきたくらいである。たとえそれが、今後の中学校生活の明暗を分ける真剣勝負のその場であったとしても、好きな人とひとときろにいられるということが幸せだった。欲を言えば、一緒にいる場所が、観覧車のゴンドラの中とか、水玉の相合傘の下とか、ピクニックシートの上とかだったらどんなに良かったか知れないが、そんなことを言える立場ではない。折角築いた幸せを自らの手で破壊するという、アグレッシブと呼ぶにも程がある自分の行為に、

――馬鹿なことしたなあ。

という悔いがあるにはあるが、それも今はもうどうでもよくなっていた。今はこの場にいられることに感謝して、決闘をプロデュースしてくれた泉（イズミ）、姉を鍛えてくれたカードマスター・テルヤ、妹のためにナイトになってくれた兄、そしてなによりヒロインの好敵手役を演じてくれている小太郎（コタロウ）に感謝して、あとは勝つことだけを考えれば良い。勝つことだけが、勝つために最大限の努力をすることだけが、今の胡桃にできる唯一のことだった。

余計なことを考えなくなった胡桃の頭は冴えに冴えた。小太郎が繰り出そうとする手が読めるような気さえする。それには、兄と小太郎の戦いを二戦分見ていたということも大きく関係している。自分で戦った二戦と合わせて、計四戦分小太郎の戦いを見ることができて、彼のデッキ構成と戦略がおおよそ把握できた。それに対して、小太郎は胡桃のデッキを二戦分しか見ていない。マスタークラスであれば、一戦すれば相手のデッキを把握するのに十分かもしれないが、小太郎のキャリアは胡桃と変わらない。小太郎の考える時間が長くなった。

しんと静まりかえった和室に外からパタパタというスリッパの音

が近づいてきた。家人のものだろう。音はゆっくりと遠ざかっていった。部屋に入る光は少し弱まったような気がする。試合の開始からもう少しで一時間になろうとしていた。

小太郎は熟考の後、場に伏せていたカードを使用した。

すかさず、胡桃がそのカードの効果を打ち消すカードを発動する。

「よしっ！」

弟の勢いのある声が後ろから胡桃を励ました。

どうやら最終戦は胡桃の優勢のようだった。しかし、小太郎は全く動じた様子を見せない。落ち着いたものである。一発逆転の秘策でもあるのだろうかと用心した胡桃だったが、おそれはなかった。やれることをやればいい。勝つことを目的にしつつ、しかし勝ち負けに執着しない。ベストを尽くした結果であれば恥じることはない。

胡桃の集中力は極限まで研ぎ澄まされた。

再び小太郎のターン。

小太郎は随分長い間、手札を吟味していた。男の子にしては繊細な指が三枚の手札の間を迷うように動く。やがて指が一枚のカードの上で止まった。

えっ、というとてもかすかな、吐息のような声が小太郎の少し後ろから聞こえてきた。胡桃の目に、小太郎の参謀役の少女が驚いたように目を見開き、しかしすぐにその顔を平静に戻す様子が映った。

一瞬後、小太郎は手札を場に出した。

「ボクのターンは終了です」

胡桃のターンになった。

胡桃は場と手札、そして小太郎のライフ・ポイント――持ち点――を確認した。

――勝ったの……？

と思われた。少し時間をかけてあらゆる可能性を考慮してみたが、どうやら胡桃の勝ちのようである。次に繰り出す一手で勝ちが決まる。そう思った途端に、胡桃の肩から力が抜けた。甘い夢から唐突に目覚めたときのような、どこか拍子抜けする気持ちだった。傍目

に分かるほどぼおっとしていたのか、進行役の泉が、「クルミちゃん？」と心配そうな声をかけてきた。
はっと我に返った胡桃は、勝利につながるカードを使おうと、そのカードに指を触れたところ、小太郎と目が合った。
小太郎は優しい目をしていた。
その目の意味を考えて、いや感じてと言うべきか、瞬間確かに小太郎の心が通ってきた気がして、そうしてそういう気がしたことが全てであった。
分かったことが二つある。
一つは、自分で思っていたよりも余計に小太郎のことが好きらしいということであり、そしてもう一つは、好きが高じると「自分」というものが消えるらしいということだった。相手のことしか心に映らなくなる。だからこそ、ここまで落ち着いて勝負に向かうことができ、そうしてあと一手で勝つところまで来ることができた。
胡桃は口元で笑ってみせた。
小太郎はちょっと驚いた顔をした。
ゲーム最終戦の終盤、緊張が作る静寂の中で、胡桃は小太郎に出会ってからこれまでのことを思い出していた。梅花舞う孟春の出会い。茜射す校門の前での告白。初めて一緒に帰ったときのこと。星空の下でのファーストキス――これは妄想である。嫌われたときのこと。謝ったときのこと。美しい思い出が胡桃の頭の中でクルクル回る万華鏡に映る景色のごとく花開いては消えた。
「ちょ、ちょっと、姉ちゃん！　なにやってんだよ！」
弟の声は悲鳴に近かった。
胡桃は手札から指を放して、その手をデッキ――自分の山札――の上に置いていた。
それは自分の負けを認める降参のサインだった。

そのさいご

薄明の中で胡桃（クルミ）は幸せな夢を見ていた。恋人と手をつないで街角を歩く夢である。きらめく初夏の光の下、爽やかなそよ風に吹かれ、煉瓦が敷き詰められた街路を軽やかなステップで叩く。隣には愛しい人。手から伝わる確かな温もり。それはもう体が浮き上がるほどの喜びで。ふと隣を見上げて恋人の顔を見ようとしたとき――

胡桃は目を覚ました。自分の部屋である。窓外から雀のさえずりが聞こえて朝を告げていた。胡桃はふう、と息をつくと体を起こした。もう一度寝れば夢の続きを見られるかもしれないが、夢は所詮夢に過ぎない。齢（よわい）十三を数えれば、夢見る少女ではいられない。胡桃はムンと気合を入れると現実に立ち向かうため立ち上がった。日曜日だというのに既に活動しているのか同室の妹の姿はない。勤勉なことである。感心した胡桃が時計を確認すると九時だった。どうやら、妹がイソイソしているというわけではなく、胡桃が起きるのが遅かっただけらしい。

胡桃は洗面を済ませると、ダイニングに入りながら母に挨拶した。決闘の日からちょうど一週間が経っている。

その日、胡桃は恋人を失った。

「さよなら、クルミちゃん」

それが小太郎（コタロウ）の別れの言葉だった。試合が終わった直後、カードを片づけて座を払った小太郎は、立ち上がった胡桃の目前に来て静かに言った。声にも胡桃を見る目にもいささかの震えもなく、それはいかにも小太郎に似つかわしかった。

「今日までありがとう、コタロウくん」

瞳の縁が小刻みに震えた。泣かないように耐えられたのは小太郎が部屋を出るまでのこと。

「はい、紳士の皆さまはご遠慮ください」

泉（イズミ）はすばやく兄と弟を追い払ってくれた。胡桃は、泉にしがみつ

いてさめざめと泣いた。何に対して泣いたのかということは分からなかった。何の為の涙なのか。それが分からないから人は泣くのだろうと後で胡桃は思った。
「クルミちゃんはよくがんばったよ。立派だった」
優しく撫でられた頭を胡桃は乱暴に振った。
「立派じゃなくていいからカレシ欲しい！」
「誰か紹介しようか？」
「やだ。コタロウくんがいい」
その夜は泉の家に泊まった。彼女が自分の家を決闘場にしたのも、夕方に時刻を設定したのも、もしものことがあったときスムーズに胡桃を宿泊させて慰めの宴を開くためだったというのだから恐れ入る。その日はジャグジーバスで身を清め、豪華なディナーをやけ食いし、天蓋を備えたお姫様ベッドの上で、男というものがいかにくだらない生き物かというテーマで泉と一晩語り合った。その場になぜだか、敵方でしかも初対面の早瀬（ハヤセ）もいたのは、胡桃のイライラ受け止め役という栄誉ある役目は自分ひとりでは荷が勝っているかもしれないと思った泉の機転である。
「あの、事情は良く分かりませんけど、いい戦いでしたよ、お姉さん」
「何が『いい戦い』よ？　負けちゃ意味ないでしょ、女王様。大体さ、あなたはコタロウくんの何なの？」
「町のフットサルクラブの――」
「あ、やっぱどうでもいい。だってあたしフラれたんだから聞いても意味ないし。そんなことよりさ、お兄さんとかいる？」
「え、いえ、姉しかいません」
「使えない！　あんた何でここにいんの？」
ひいっと軽くのけぞるようにした早瀬を更にイジイジ胡桃はいじったのであった。
それから一週間が経って、幾分胡桃は落ち着いてきた。もう話しかけられたときにシカトしたりもしないし、壁を蹴ったりもしない。

家の手伝いもしなければ、宿題もしない。全てが元通りになりつつある。元カレの小太郎とはクラスメートとしての付き合いを続けている。朝会ったらあいさつするし、必要があれば話もする。どうやら振られたカレシに会いたくなくて学校に行けなくなるようなロマンチックな体質ではなかったらしい。

胡桃と小太郎が別れたという情報は「裏生徒会」によって早速流されて、この機を千載一遇ととらえた女子たちが獲物を狩る肉食獣よろしく、さっそく小太郎に襲いかかった。しかし、小太郎は彼女たちの告白を全て断ったそうである。

――わたしに未練があるのかな？

という考えを一笑に付すくらいには胡桃は成長した。では、どうしてか。それは胡桃の知ったことではない。自分を振った男のことなどそれほど興味が無い。と言えば、それはウソになるけれど、というか、クラス内で小太郎の名が出るたび心臓が跳ねあがる胡桃ではあるが、それは、おそらく時間が解決してくれることだろう。解決してくれなければ困る。

「あれ？　おれの抹茶豆乳は？」

ダイニングに現れた弟が冷蔵庫を探りつつ不思議そうな声を出した。昨日まで確かにあったはずの抹茶味の豆乳が消えているという。胡桃は身近に起こったミステリーに軽い驚きを示しながら、今しがた母に給仕してもらった朝食をほおばってもぐもぐすると飲み込んだ。弟の視線が、緑色の液体が入った姉のグラスに張り付いている。それを無視して、胡桃はごきゅごきゅとグラスの中身を干した。

「どっか行くの、テルヤ？」

「う、うん。カードの研究会を友だちの家でやるんだけど」

「がんばりたまえ」

「あの、それよりさ、一つ聞きたいことがあるんだけど、昨日冷蔵庫にあったおれの抹茶豆乳ってさ、姉ちゃんがおれに買ってくれたヤツだよね。お礼だって言って」

「そう、その通り。本当にお世話になりました的な」

「だよね。まさかお礼としてあげたものを、あげたその人が飲むわけないよね」
「そりゃそうよ」
胡桃は自信たっぷりに請け合った。なにやら疲れたように肩を落とした弟が玄関に向かうのを見て、胡桃は仕方ないのでイチゴ豆乳を買ってきてやることにした。抹茶味がどんなもんかは分かったことでもあるし。
例の勝負の翌日、学校から帰った胡桃は、弟から散々なじられた。
子曰く、
「いかなる事情があるにせよ、勝負を諦めるような人間はサモナー失格である。二度とカードを手にすることなかれ」と。
胡桃は粛粛と師の言葉に従い、デッキを返還した。そうして二度とカードに触れないことを厳かに誓った。弟はちょっと寂しそうな顔をした。
「ま、まあ反省もしていることだし、二度とあんなことをしないって誓うなら……」
「反省はしてません。あのときはああするしかなかったのです、マスター」
胡桃は強硬に言い張った。
勝負の最後のとき、確かに小太郎の気持ちが分かった気がして、分かった気になれる自分であったことがちょっと誇らしかった。その誇りを守るための行動であれば、それは試合の勝ち負けよりも大事なことだろう。勝負には負けたが、同時に大事なものを手に入れたハズである。そうとでも考えなければヤッテランナイ！
朝食を取り終えた胡桃は、シャワーを浴びて衣服を改めた。いつかの折に兄に買ってもらった花柄フリルのワンピースを身につけてみる。玄関にある姿見には、世にも美しい少女が映っていて、街ゆく彼女に声をかけないとしたら世の男どもの目はビー玉かなんかに違いないぞ、と胡桃は確信した。
外に出た胡桃は眩しい光に目を細めた。今日はこれからデートな

のである。
「カレシと別れて一週間しか経ってないのにもう別の男の子と？」
そういう非難をする者がいたらおしりを蹴っ飛ばしてやりたいと胡桃は思う。そんなわけがない。見損なってもらっては困る。兄のカノジョであり、また胡桃自身も姉と慕っている少女が、傷心の胡桃を気遣って、知り合いを紹介してくれるという運びになったということであり、彼女の熱意に押し切られた形であってけっして胡桃の本意ではない。
「福田胡桃です。今日はよろしくお願いします、えへ」
胡桃は待ち合わせ場所に着くまでのあいだ、可愛く見られそうな挨拶の練習をして、道行く小学生をおびえさせたり、
「趣味はケーキ作り……うーん、ていってもうまく作れるわけじゃなし。カードゲームとかって言ってウケ狙った方がいいかな。いやいや、わたしにカードゲームってギャップありすぎだし。あ！　でも、そのギャップがいいかもしんない」
ぶつぶつとひとり言を言って、若いカップルから白い目で見られたりした。
駅前広場で新しいカレシ候補を待つ間、胡桃は自分を可愛く見せる方法についてなおアレコレと考えていた。そうして、そんなことはどうでもいい、という結論に達した。方法など必要ない。このありのままの自分を見せれば十分でそれ以上は要らない。自分を偽ることによって小太郎との仲が変なことになってしまったのだから、同じ轍（てつ）を踏んではいけない。これに関しては、単に考えるのが面倒くさくなっただけではないかという有力説もある。
待ち合わせ時刻から五分を過ぎたとき、
「お一人ですか？」
という声が後ろからして、胡桃の背筋が立った。
泉から、「知り合いにカッコイイ子がいるから紹介してあげる」と言われたときから、うすうす感じていたことが、やはり事実その通りだったということを胡桃は認めた。

ため息をついて振り返った胡桃の目に眼鏡をかけた少年が映る。
美少年と言ってやってもよい。
兄である。
「ま、そういうことになるよね」
一週間前にカレシと別れたばかりの女の子に、ぞろ別の男の子を紹介するような心性の子を姉と慕うハズが無い。
胡桃は自ら兄の手を取った。
「期待を裏切ったみたいだな」
「まさか」
一方的に騒動に巻き込んでおいて、しかも勝手なことをした胡桃に対して兄はついに一言も批難の言葉を発しなかった。胡桃の行動の理由を訊くことさえしなかった。それは胡桃への絶大な信頼の現れだった。そんな兄のことを前より好きになった。恥ずかしげもなく言うと、まあかなり好きな部類に入った。ことここに至れば、もう誰からブラコンと言われても仕方ない。甘んじて受け入れる覚悟である。
胡桃は兄の手を取ったまま街の中心部を離れた。さすがに今日は服を買ってもらう気はないし、バカ高いアイスコーヒーを飲む気もない。兄の人生設計をむやみに狂わせる気は今の胡桃には無くなっていた。
胡桃はぐいぐい兄の手を引いた。いくら何でも短期間で二度も兄に慰められるつもりはない。そんなことをされては女がすたる。今日は兄妹デートをする気はなかった。
――このまま、お兄ちゃんを持ち主に返しに行こう。
あるべきものをあるべき場所へ。ついでにお茶でも飲ませてもらおうと厚かましいことを考えていた胡桃の足を兄が止めた。二人の前に和装の喫茶店がある。胡桃の気持ちに反して、妹の頭をよしよしする気分で満ち満ちた兄に手を引かれる格好で、胡桃はのれんをくぐった。
「イズミちゃんとこでもいいんじゃない？」

という意見はあっさりと却下された。
よくよく考えてみれば兄妹揃って遊びに行くというのもなんだか間が抜けていることでもあるし、この店は大好きな和菓子を食べさせてくれるところでもあるしで、胡桃は大人しく席につくことにした。
さして広くない店内は客で埋まっている。
胡桃はロイヤルミルクティで、ういろうを食べながら、弟のことなど話題に出してヒマをつぶした。
「わたしの見るところ、ハヤセちゃんって照也（テルヤ）のこと好きだと思う。やたらわたしのこと、『お姉さん』って呼ぶし。テルヤにつっかかっていくのも好きだからじゃないかな。かーわいいよね。今度デートのセッティングとかしてあげてからかってやろうかな。ハヤセちゃんと一緒に遊ぶ約束して、その場にテルヤも連れて行き、途中からわたしがなぜだかいなくなるのよ。どう思う？」
兄は悪趣味なことはやめるように注意すると、「化粧を直してくる」とらしくもない冗談を言って、テーブルを立った。
一人になった胡桃は携帯を取り出してメールチェックをしながら、考えるのはやはり小太郎のことだった。胡桃は苦笑した。我ながら未練がましい。あのカードバトル最終戦の最後の瞬間、小太郎の目を見た胡桃は、許されたことを感じた。小太郎の瞳に宿るものは優しくて、胡桃に対するわだかまりが消えているのが分かった。しかし、まさにそれゆえに、胡桃は負けを選んだのだった。
許されてはいけないような気がしたのだ。いや、むしろ許させてはいけないような気がした、といった方がいいかもしれない。許した者、許された者といういびつな関係を小太郎に結ばせたくなかったのである。
「人と人との間の関係は対等じゃなくちゃいけません」
とは泉の言葉。その言葉は人の下に立った者にも、また上に立った者にも当てはまるのである。下になった者も不幸だが、同様に上になった者も不幸なのだ。そういう不幸を小太郎に及ぼすのに忍び

なかったと言えばいい子ぶった言い方になって、単に自分が許されて彼の下に立ちたくなかったと言ってもいい。どちらにしても、胡桃はカレシをつなぎとめることよりも大切なことを学んだのである。――でも、カレシも欲しい……。

胡桃は、夏休み中に開催される近所の夏祭りに一人で参加するハメにならないよう、考えをめぐらせ始めた。そうして考えてみたが、これはどうやらムリらしいぞ、という結論に至った。夏祭りまでと、二カ月。いくら何でも別れてから次に行くまでのインターバルが短すぎる。そんなことをしていったん純心を疑われたら、とても中学校では生きていけない。それに、誰でもいいというわけにはいかない。やっぱり――

詮無いことを考えた頭をふるふる振って、カップのミルクティをずずっと飲み干すと、胡桃は椅子の上で体を回した。兄の姿を探したのである。レディを待たせて随分ゆっくりしている。店内に視線をめぐらせようとしたその時、胡桃は目を見張った。

胡桃の視線の先に、それはまるで奇跡のように、別れてもなお心を占める、そして締め付ける人の姿があった。

小太郎は胡桃の視界の中をすたすた歩いてくると、兄が座っていた席についた。

少しの間、放心していた胡桃だったが、むろんこれが奇跡でもなければ偶然でもないことはすぐに分かった。兄が席を立って、小太郎が現れた。それが意味するところは一つしかない。

「どうしても訊きたいことがあるんだ」

小太郎は挨拶もせずにいきなり切り出した。

胡桃はちょっとがっかりしたものを覚えた。小太郎が訊きたいことと言えば、例の勝負で胡桃が降参した理由くらいしか思いつかない。生真面目な彼は勝負が終わったあとずっと考えていたのだろう。それでも分からず、とうとう何かしらの方法で兄とコンタクトを取って――当然裏には泉がいる――今日、ここにやって来たに違いない。学校で訊けば良さそうなものだが、クラスメートの目を憚(はばか)った

のである。そうして、降参の理由を訊くということは、胡桃の気持ちは小太郎には通じていなかったということであり、それは当り前のことかもしれないが、一方でやはり悲しいことでもあった。
「別れた二人がさ、もう一回付き合い始めるためにはどのくらい期間を空ける必要があると思う？」
全く警戒してなかった方向からの問いに、胡桃は面食らった。
小太郎はそれだけ言ったきり口を閉ざした。いつも平静な顔をしている彼のその頬が少し上気している。その様子からよっぽどの気持ちで言ったのだということは分かったが、とはいえ、どう答えればいいのか分からず、胡桃はすぐには答えを返すことができなかった。
「……夏祭り」
やがて胡桃の口から漏れ出たのはそんな言葉だった。
およそ問いの答えにはなっていなかったが、小太郎の明晰な頭脳にはそれで十分だったらしい。二カ月後だね、とつぶやいたあと、すっくと席を立って、しかし立ったまま席を去らず、口を開きかけては閉じてまた開いた。
「あのさ、クルミちゃん……」
「……はい」
「好きだから」
「え？」
「ちゃんと好きだから……だから、またね」
それだけ言うと、小太郎は椅子に足を引っかけながら、テーブルを後にした。
何が何やらさっぱり訳の分からない胡桃。いまだかつて聞いたことのない言葉を耳にして、どう解釈すれば良いのか皆目見当がつかない。好きって……。誰が誰を？
――ていうか「好き」ってなんだっけ？
胡桃はお冷やのグラスを手に取ると頬に当てた。ひんやりとした感覚が心地よい。グラスを頬に当てたまま徐々に頬の熱が取れ、逆

に冷気でちょっとヒリヒリしてきたとき、ようやく胡桃は言葉の意味を解読して再び頬が熱くなるのを覚えた。
「大丈夫か？」
心配そうな声をかけてきたのは兄である。
胡桃はうわごとのような声を出した。
「……お兄ちゃん」
「どうした？」
「コタロウくんがわたしのこと『好き』だって」
「そうか、良かったな」
「それだけじゃない！　『ちゃんと』って言ったのよ！」
胡桃は目を見開いて立った。
「『ちゃんと』好きなんだって。分かる、この意味？」
大きな声を出して興奮する少女の耳に周囲のクスクス笑いは聞こえない。胡桃は優しく手を引かれて、そのまま店の外に導かれた。既に会計は済ませてあったらしい。
胡桃は歩きながら小太郎との会話をじっくりと兄に聞かせた。そうして、小太郎の意図するところについての解釈を示した。兄はいちいちうなずいてくれた。
「ありがとう、お兄ちゃん」
街路樹の下で立ち止まると、胡桃は頭を下げた。今のことも含めて、これまでのもろもろのことに対する謝意が胡桃の胸を一杯にしていた。一杯にならないと感謝の言葉を言えないという点についての批難もあるかもしれないが、そこはそれ、乙女心ということで許してもらいたい。
――それにしても……。
ここまで妹に尽くしてくれるということは、と考えながら胡桃は頭を上げた。
何やら怪しげな色を見て取ったのか、兄は警戒するような目をしている。
「ねえ、お兄ちゃん」

「何だよ？」
「わたしのこと好き？」
てっきり呆れられるかと思っていたが、胡桃の意に反して兄はおそろしく真面目な顔で答えた。
「当たり前だろ」
ちょっと怒っているかのような声である。
「え、当たり前ってことはないんじゃないの？」
「いや、当たり前だ」
あまりにはっきりと言い切るので、それ以上は何も言えなかった。
当たり前なのだそうである。
胡桃の胸に暖かな灯がともって、その明かりは胡桃の世界を優しく照らし出した。
胡桃は自分から兄の手を引いて光り輝く街路を歩き出した。
未来はあるものの、とりあえず今回の騒動で確かにカレシを失った。しかし、代わりに兄を得たこともまた確かである。
それがプラスなのかマイナスなのか――
差し引きは考えないことにした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9471h/

お兄ちゃんが好き！？

2010年10月8日12時52分発行